

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-(4館共通)ア			
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長 河野一隆 部長 尾野善裕 部長 吉澤悟 部長 白井克也
【実績・成果】 外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。 (東京国立博物館) ・科学研究費補助金：5件 ・学術研究助成基金：34件 (京都国立博物館) ・科学研究費補助金：1件 ・学術研究助成基金：4件 (奈良国立博物館) ・科学研究費補助金：1件 ・学術研究助成基金：3件 (九州国立博物館) ・科学研究費補助金：0件 ・学術研究助成基金：10件			
【補足事項】 本項詳細は統計表c-⑦参照			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財等に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組み、件数としては5年度と比べ減少しているものの、着実に成果を挙げている。	
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。			
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財等に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。7年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。	

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア a.特別調査「法隆寺献納宝物」(第44次)		
【事業概要】 当館では、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査概要 ・法隆寺献納宝物の内、法隆寺宝物館に保管される「錦」87件について、全点を対象として顕微鏡撮影を実施した。また、顕微鏡画像をもとに、上代における錦の組織、文様、糸質、色糸の状況などについて、詳細な分析を行った。 (2)調査の成果 ・これまでの調査研究によって整理が進んだ法隆寺伝来の染織については、既に「刺繍」において特別調査・調査概報が刊行されているため、今回は「錦」をテーマとして調査を行った。近年の調査研究の傾向を踏まえ、顕微鏡撮影を行うことによって、より客観的に錦の織物の構造が理解でき、法隆寺宝物の染織法隆寺献納宝物の基礎情報を充実させることができた。 ・以上の成果をまとめ、『法隆寺献納宝物特別調査概報44 錦 調査報告』を編集し、刊行した。			
  右：赤地花文錦小幡(N-26, I-336-53)顕微鏡画像 左：同上 全図			
【備考】 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報44 錦 調査報告』(7年3月30日発行)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物のうち「錦」の調査については、全点を対象に全図のみならず、顕微鏡画像の撮影を実施し、従来の研究蓄積を検証するとともに、新しい知見も得た。こうした客観的データを集積し、公開することが必須と考え、顕微鏡画像を掲載し最新の知見を反映した報告書を刊行し、その成果を社会に還元することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。献納宝物にはまだ調査対象となっていない作品も多く、今後も新たな調査を進めるとともに、従来の研究を検証できるような科学分析等を用いた調査研究を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア e.特別調査「書跡」第19回		
【事業概要】 本事業は17年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、1年に1回ないし2回、当機構内の関係職員を招へいし、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28年度から3か年、奈良国立博物館で実施した。元年度からは京都国立博物館の収蔵品を対象に実施しており、6年度はその3回目である。関係職員同士で情報交換しながら、調査研究を行った			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室研究員 長倉絵梨子
【主な成果】 (1)調査概要 ・調査実施日：7年2月19日、20日。調査場所：京都国立博物館地下調査室。 ・調査参加者：富田淳（九州国立博物館）、六人部克典、長倉絵梨子、新井恵理佳、高田智仁（以上、東京国立博物館）、垣中健志、山本崇、桑田訓也、栗原正東（以上、奈良文化財研究所）、吉川聡（奈良国立博物館）、高梨真行、山田千穂、芳澤直之（以上、皇居三の丸尚蔵館）、羽田聡、上杉智英（以上、京都国立博物館）、鍋島稲子、杉本一樹、藤間温子（以上、客員研究員） ・調査内容：古写経の名称、制作年代、形状、寸法、奥書、出典、料紙等の調査を行った。 (2)調査の成果 第18回までの調査で、京都国立博物館の「松本コレクション」（松本文三郎旧蔵品）はほぼ完了していたが、引き続き同コレクション内の断簡などを中心に調査を続けた。調査の内容に限らず、作品取り扱い方法について知見や技術を共有できたことは、各関係機関内での業務にいかせることであった。7年度は同館所蔵の古筆を中心に調査を行う予定である。			
			
調査の様子			
【備考】 調査件数：古写経（松本コレクション）計29件 調査日数：2日間 調査人員：18人 調査作成：29件			

調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	過去数年は新型コロナウイルス感染状況や当館人員不足により実施がかなわなかったが、6年度は新しく機構に加わった三の丸尚蔵館からも参加がかない、実施することができた。前回の続きとなる京都国立博物館の松本コレクションの古写経を断簡含めほぼ全て調査し終え、その全容が把握できたとともに、調査結果により今後の展示・公開に寄与することが可能となった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は京都国立博物館における3回目の古写経調査を十分に進めることができた。7年度からは京都国立博物館の古筆を調査する予定である。調査は確実に進行しており、調査を踏まえてさらなる研究を推進し、展示・公開の向上、さらに文化財取り扱い技術の向上に寄与するという目標に向けて順調に進めている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア c. 特別調査「工芸」(第14回)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・陶磁・漆工・染織・刀剣・甲冑等工芸分野の特別調査である。該当する工芸分野の研究者が集まり、当機構が保管する作品の調査を行い、今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。6年度は九州国立博物館所蔵の陶磁器および寄託された染織品の調査会を行うこととなった。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	小山弓弦葉
【主な成果】 (1)染織調査 ・調査の概要 7年1月15～17日、当館において、J. フロントリテイリング史料館から寄託を受けた琉球染織を中心とする68件の染織資料について調査を行った。作品1点1点につき採寸を行い、熟覧及び顕微鏡調査によって、その素材の特定・織や染の技法について調査を行った。調査には、当館担当研究員の他、九州国立博物館、J. フロントリテイリング史料館、沖縄県立博物館、那覇市歴史博物館の学芸員が参加した。 ・調査の成果 J. フロントリテイリング史料館が所蔵する琉球染織は、戦前に染織コレクターが蒐集したコレクションが中心であり、沖縄戦で失われずに伝世することとなった貴重な資料である。今回の調査で、当館のコレクションにはない琉球独特の素材である芭蕉、桐板、麻(上布)といった素材による織物や東南アジアの影響を強く受ける琉球の織物の組織などを調査し、その概要を把握することができた。 (2)陶磁調査 ・調査の概要 2025年2月13日、名古屋・横山美術館が所蔵する磁胎七宝作品について、約35件を実見。当館所蔵の磁胎七宝「七宝花鳥文大壺(G-696)」に、漆装飾がみられることが昨年度明らかになったことからとくに漆装飾のある5件を重点的に調査し、比較検討を実施。制作工程などについて、意見交換を行った。 (横山美術館館長宮田昌俊氏、学芸員原久仁子氏、あま市七宝焼きアートヴィレッジ学芸員小林弘昌氏同席) ・調査の成果 漆装飾のある近代の磁胎七宝は、国内でも伝世がきわめて少ない。そうしたなか、海外に輸出された近代工芸蒐集に力を入れている横山美術館は、国内有数の近代七宝作品所蔵館であり同館でまとまって作例を実見できたことは大変貴重な機会であり、とくに制作工程について新たな知見を得ることができ、当館所蔵品への理解を深めることへとつながった。 (3)工芸展示調査の概要 ・調査の概要 本館の展示改修に向け国内外の博物館の工芸に関する展示方法、マウント方法、展示ケースデザイン、グラフィックデザイン、映像デザイン、照明デザイン、展示保存環境の展示に関する調査を行う。調査はカメラによる静止画像、動画等で記録を行った。調査対象博物館：台北故宮南院など ・調査の成果 工芸に関する展示調査では古美術と現代の作品を組み合わせた総合型展示、陶磁器、漆工、ガラス工芸作品のマウントを用いた展示方法、マウントデザイン、アクリルを用いた展示デザインの事例収集ができた。			
 「染織」調査風景  「陶磁」調査風景  「工芸展示」調査風景			
【備考】			

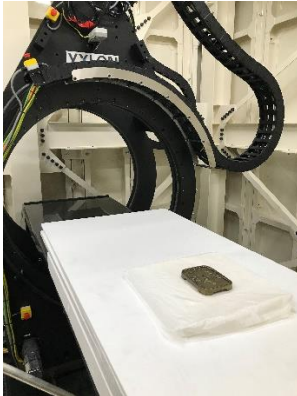
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	染織については、7年度以降に目標としていた、専門的な知識と調査実績を持つ専門家を沖縄から招聘し、調査データを精査して琉球染織資料の調査研究を発展させていく計画が実行できた。陶磁については、収蔵品に関連する作品の調査を行うことによって収蔵品の歴史的・文化的位置づけを行うことができた。また、さまざまな形状・素材の工芸について、効果的な展示方法を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、当館で保管する工芸作品の継続的な調査研究を行うことができている。コロナ禍以後ようやく本格的に機構内における担当研究員及び高度な専門的知識を有する研究者を招聘し、機構全体の調査研究をレベルアップさせる事業に拡大することが可能になった。工芸の他分野の特別調査も充実させることができおり、調査研究の成果は、順次、展示などで活用をはかる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア d.特別調査「彫刻」(第12回)		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告論文活動に結び付けあるいは寄託の増加や特別展等の企画につなげて展示内容の向上を図る。6年度は、館蔵品及び寄託品に対してX線CT撮影を実施し、分析研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉 絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査概要 ・6年度は長崎奉行所伝来キリシタン関係資料24点及び大型作品3点の撮影を重点的に行った。 ・調査日は以下のとおり。4月2日、9日、11日、23日、5月1日、21日、6月19日、28日、9月12日、10月8日、29日、12月19日、7年1月27日、2月4日、25日、3月4日、5日、11日。 (2)調査の成果 ・長崎奉行所伝来キリシタン関係資料のうち、金属製の踏絵は全点（管理換え、長期貸与分を除く）に対してX線CT撮影を実施した。おおむね画面の下から上にかけて鋳造されたことや、各所に鋳損じがあり、金属片を嵌めることなどが判明した。こうした点から、従来の学説通り一括して同一工房によって鋳造されたことが再確認された。 ・大型作品のうち、近代の模刻についてもX線CT撮影を進めた。帝室技芸員だった竹内久一は、奈良時代の執金剛神立像を模刻しつつ、同じ主題で創作も行っているが、模刻は合理的に細かく木寄せを行う一方で、創作では完全に一木から彫出するなど、同じ時期の制作で、同程度の規模の彫刻であっても、材質技法に対する感覚が異なる点が明らかとなった。今後も近代彫刻の撮影を進めたい。 ・成果については、作品解説等に反映するとともに、論文や調査報告として『MUSEUM』誌等で発表する。			
    踏絵のX線CT撮影 同 X線CT C-235 執金剛神立像のX線CT撮影 同X線CT			
【備考】 調査日数：18日 調査作品数：27件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	非破壊による文化財調査の中で、X線CT撮影は作品の内部を観察する上で不可欠となっている。6年度は、館蔵品及び寄託品について、特に長崎奉行所伝来キリシタン関係資料並びに大型作品を重点的に撮影することで、制作技法や保存状態などの点について、新たな知見が得られた。これにより、所期の目的は達成できたと思われる。今後は、さらにデータの解析を進めることで、構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品など文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア e. 特別調査「絵画」第9回
【事業概要】 古代から近世にかけて、特に愛好されたやまと絵主題に『源氏物語』がある。絵巻、掛幅、屏風、扇面、色紙など、多様な形態をとるこれら源氏絵の総合的な調査研究の第一歩として、館蔵品及び寄託品の源氏絵の調査を実施する。これらの調査研究の成果をもとに、当館での平常展、特集、特別展に活かすことを目的とする	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 土屋貴裕
【主な成果】 (1)調査の概要 当館の館蔵品及び寄託品の源氏絵については、その大半が近世に制作されたものである。ただし、広く『源氏物語』を主題とする、あるいはこれらを参考とした作品の数は多く、対象は50件以上ある（浮世絵版画等を除く）。また、これら近世源氏絵を主に描いたやまと絵系絵師の研究については近年新たな研究もあり、これらを参照しながら研究を進める段階にある。そのため、源氏絵の調査とともに近世やまと絵系画派の研究も同時に推進できるよう、6年度は特に土佐派、住吉派、板谷派の源氏絵を中心に調査を行った。 具体的には、近世初期土佐派の土佐光起、光則の屏風作品、住吉具慶の絵巻作品、住吉広守の掛幅作品、板谷桂舟の掛幅作品等、近世やまと絵諸派の作品を広く取り上げた。	
(2)調査の成果 今回取り上げた作品の多くは、『源氏物語』の章段から一、二場面をピックアップして描く作品が多い。中世までの源氏絵が全場面を網羅するかのような作品が多いのに対し、中世後期ころから源氏絵の大場面化が進み、描かれる章段も著名なものに集約されていく傾向が認められる。これらを他の作例も交えて調査検討を進めていくことが今後の課題となる。上記の成果は7年度以降の展示等に活かしていく。	
	
7年1月6日、及び2月13日の特別調査の様子	
【備考】	

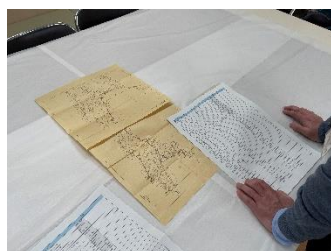
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館には寄託品も含め、『源氏物語』を主題とした作品が多く所蔵されるが、これらを悉皆的に調査する機会はなかった。源氏絵はやまと絵、物語絵の中心的主題である。本研究の成果は、源氏絵研究にとどまらず、近年注目を浴びる近世やまと絵研究にも資する点もある。加えて、従来あまり展示活用されてこなかった作品についても知見を深めることができ、今後の展示への活用の見込みが立ったことも成果として挙げられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究、展示公開という見込みを立てることができている。とりわけコレクションの再評価という点では大きな意義があった。調査については、館内の研究員での調査とともに、京都国立博物館の研究員を招聘して実施することも叶い（7年1月6日実施）、中期計画の4年目として、多角的な検討を進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	f. 特別調査「考古」第2回		
【事業概要】 南サハリンにおける考古遺物は発掘調査による資料が増えつつあるも、今なお第二次世界大戦前に行われた遺跡踏査による資料が重要な価値をもっている。総合的な調査研究のはじめとして、戦前に採集された館蔵品のサハリン出土資料の調査を実施する。これらの調査研究の成果をもとに、当館での平常展、特集、特別展に活かすことを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	海外展室長 品川欣也
【主な成果】 (1) 調査の概要 当館が所蔵する南サハリン出土の考古資料のほぼ全てが戦前に遺跡踏査などによって採集されたもので、その多くは徳川頼貞氏寄贈資料からなる。その内容は、数量が約 170 件からなり、種別が多い順に石器・土器・骨角器から構成される。今回の調査では、まず時期判別の基準となる土器の型式同定を行い、石器や骨角器を器種別に分類を進め、全体像の把握に努めた。 (2) 調査の成果 今回の調査を進めた考古資料の時期は、鈴谷式期（前 4 世紀～6 世紀）から南貝塚式期（10～12 世紀）に及ぶものである。名称や出土地名、年代など基礎的な情報更新を進めた。調査の結果、一部の資料は東京大学総合研究博物館所蔵品と同一機会に集められたものもあることが判明したため、今後同地における既往の調査成果との照合や、周辺地域との比較検討をより一層進める必要がある。なお、上記調査で得られた成果は、7 年度以降の展示等に活用していく予定である。 外部機関調査参加者：東京大学 熊木俊郎・福田正宏・夏木大吾、横浜市ユーラシア文化館 高橋健			
			
出土遺跡や場所の検討		骨角器の器種判別の様子	
【備考】			

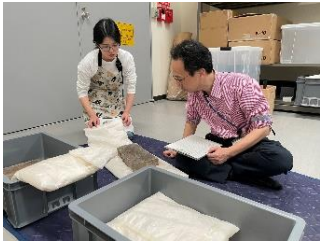
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館には南サハリン出土の考古資料が数多く所蔵されるが、これらを悉皆的に調査する機会にはなかった。同地におけるアイヌ民族資料については図版目録が刊行され周知されていたが、考古資料については多くが未公表であったが、今回調査成果を受けて公開の目途が立った。 本研究の成果は、南サハリンにとどまらず北海道など周辺地域の考古資料との比較検討を行うことでより資料的な価値が深まり、今後の展示への活用が見通しが立ったことも成果として挙げられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、調査研究に基づいたデータベースの充実を行い、展示・公開への見込みを立てることができた。 とりわけ従来活用頻度の極めて低かったコレクションの再評価という点では大きな意義があった。調査については、館内の研究員での調査とともに、外部機関の研究者を招聘して実施することもでき（7年2月7日実施）、多角的な検討を進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別調査「東洋」第1回		
【事業概要】 東洋特別調査（東洋列品にみられる銘文等文字資料の調査研究・当館所蔵三国時代土器の調査）			
【担当部課】	調査研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉 東洋室長 三笠景子
【主な成果】 (1) 調査概要 (東洋列品にみられる銘文等文字資料の調査研究) - 当館所蔵品及び寄託品はじめ、機構各館所蔵の東洋列品にみられる銘文や付属品等の文字資料に関する調査を進めた。6年度はパーラ朝彫刻並びに東南アジア彫刻作品の銘文調査を行った。 調査日は以下のとおり。7年2月3日、19日、20日、3月27日 (当館所蔵三国時代土器の調査) - 当館所蔵の三国時代土器について調査・研究を実施し、最新の研究成果も反映しながら遺物の製作時期や製作地等を再検討し、展示や情報公開にむけた基礎情報の整備を行うことを目的とした。6年度は特に新羅地域の土器に関する調査を行った。 (2) 調査の成果 (東洋列品にみられる銘文等文字資料の調査研究) - パーラセーナ、サンスクリット碑文、インド美術史の研究者との協同調査によって、東洋彫刻の銘文に関する基礎データを蓄積した。あわせて、インド、東南アジア彫刻の共同調査を通して制作年代の再検討を行った。 成果については、作品解説等に反映するとともに、論文や調査報告として『MUSEUM』誌等で発表する。 (当館所蔵三国時代土器の調査) - 三国時代の土器研究者との共同調査を通じて、土器の型式や製作技法等の特徴から遺物の年代や製作地域を推定した。これらの成果については論文等で報告し、展示解説の内容にも反映させる。  7年3月25日 東洋考古調査  7年2月3日 東洋彫刻銘文等調査			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでインド彫刻の銘文調査は行われたことがなかったが、古代言語の専門家との調査を行うことで、列品及び寄託品についての新たな知見が得られた。また、当館所蔵の三国時代土器について最新の研究成果を反映しながら製作時期や地域について再検討し、作品情報を更新できた。これにより同時代作品の研究を進める目的が達成できた。7年度以降は作品解説等に本研究成果を加えるなど、観覧者が作品への理解をより深められる展示につなげていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵品をはじめとする文化財に関する基礎的、かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができています。7年度以降も調査研究の蓄積と報告を継続していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究		
【事業概要】 29年度から実施している関東地域の社寺に伝存する文化財の悉皆調査。新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から2年度以降、一時中断していた東京都目黒区の祐天寺所蔵文化財に対する調査を昨年度より再開し、その継続調査を行った。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査の概要 本年度は、これまで調査を行ってこなかった工芸（染織）、彫刻作品の調査を行った。 ・工芸（染織）については、大奥ゆかりの正室・姫君が奉納したと考えられる染織等6件を調査した。 ・彫刻については、堂内に安置される彫刻を含み、5日間で17件の彫刻を調査し、撮影を行った。 (2)調査の成果 ・祐天寺に所蔵される染織関連作品としては、5代将軍綱吉の娘である鶴姫の名号と仕立てに用いられた葵紋付の金襴、金襴の五条袈裟、6代将軍家宣の側室である天英院が祐天寺に奉納した座具が確認された。それらは、寺伝で明確な記録が残されていないことから、今後、詳細に調査を行い、年代の検討を行う必要がある。 ・彫刻に関しては、計測・撮影などを行い、補彩など、作品保存状況についても確認を行った。また、祐天上人坐像については、祐天寺研究室のご協力を得て館内に持ち込み、CTによる撮影を行った。台座内の調査も行い、納入文書の調査も行った。			
 阿弥陀堂内で阿弥陀如来像を調査する様子			
【備考】 調査日数：のべ6日（工芸：5月2日・彫刻：5月7日、6月7日、10月2日、11月18日、12月10日） 調査点数：工芸（染織） 6件、彫刻 17件 延べ参加人数：7名			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルス感染症に対する感染防止ガイドラインに従う中で、2年度以降、一時中断していた祐天寺所蔵文化財に対する調査を再開して今年度が2年目にあたる。 今年度は新たに工芸品の調査を開始することができた。また、コロナウイルス流行前に予備調査で止まっていた彫刻の調査を開始することができた。着実な成果をあげつつ調査を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画2年目まで新型コロナウイルス感染症の影響で実施できていなかった調査を再開し、再開して2年目の調査についても、主な成果に上げたように少しずつではあるが確実に進展している。次年度以降の計画も、祐天寺と協議をしつつ、各分野との調整しながら調査を継続している。中期計画を着実に進められているといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 収蔵品等の有形文化財に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約12万件の収蔵品について、調査・研究を順次行い、有効に文化資源を活用できるように、毎年、計画的に館員調査研究を行う。5年度募集した調査研究計画を基に、館員が収蔵品に関連する調査研究を外部機関等に出向いて行う調査である。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 6年度は以下の館員調査研究を執行した。その成果は7年度以降の展示等に活用される。 ・安土桃山時代の館蔵唐織の復元技術に関する調査 ・館蔵キリシタン関係遺品の調査 ・館蔵・寄託中国彫刻の調査 ・所蔵出土金貨・銀貨の計測と分析 ・中国印譜の調査研究 ・正倉院宝物の模写・模造の研究 ・当館所蔵「里帰り」陶磁に関する調査研究 ・浮世絵版画の調査研究 ・館蔵品劣化事例の調査研究 ・東京国立博物館所蔵三国時代土器の調査 ・スマトラ島ランブン伝世染織作品に関する調査 ・古代ユーラシア大陸の染織品の移動に関する研究 ・文化財の復元模造品を用いた展示・教育普及に係る調査研究 ・兜跋毘沙門天像の研究 ・日本彫刻史の研究 ・「子育て世代」来館促進に関する基礎調査 ・海のシルクロードにおける古代彫刻に関する調査 ・古代・中世の古窯跡群の比較研究 ・日本美術展示にみる現代「日本」観の研究 ・上海博物館所蔵絵画作品の調査 ・欧州における染織作品の保存修復に関する調査 ・世界の博物館におけるデジタルコンテンツの実績と現状に関する調査 上記調査のうち「世界の博物館におけるデジタルコンテンツの実績と現状に関する調査」においては、新規デジタルコンテンツの開発と制作を目的とし、韓国（韓国国立中央博物館ほか）、香港（香港故宮文化博物館ほか）、台湾（国立故宮博物院ほか）計12館で、各館の最先端の技術を用いたデジタルコンテンツの導入実績と戦略に関して調査を行った。調査によって東アジア地域におけるデジタルコンテンツの強化事業について知見を得ることができた。7年度には本館特別3室、法隆寺宝物館のデジタルコンテンツのリニューアルが控えているが、そちらのコンテンツ制作にこのたびの経験と知見を活かしたい。			
【備考】			



世界の博物館におけるデジタルコンテンツの実績と現状に関する調査
(国立臺灣文学館との意見交換)

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業により、通常、本館に展開される通常展示では難しい、様々な当館のコレクションの展示が、特集などの企画により、可能となる。その意味で、館員調査研究の意義は大きい。6年度は特に、各分野における22件の調査を実施することができた。7年度以降、本調査研究の成果が当館の展示や教育普及活動等に活用される。年度計画は順調に実施できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度より、予算枠の中で館員調査研究を行うのではなく、5年度に館員調査研究計画を研究員に募集し、その計画に基づいて調査研究を実施する方針に切り替えた。また、追加配分により、館員調査研究を追加で募集し、実施した結果、当初の計画以上に館員調査研究を数多く執行することができた。7年度以降もこの方針で行い、計画的な館員調査研究を進めて行く計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	東洋民族に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課工芸室長 猪熊兼樹
【主な成果】			
(1) 調査概要			
・台湾の台東、蘭嶼、烏來、角板山、澤仁里の各地において、台湾原住民の集落や工房を訪れて、建築・器物・衣服などの用途・分類及び伝統生活文化に関する調査を行った。 ・台東・国立台湾史前文化博物館、台北・順益台湾原住民博物館、烏來・烏來泰雅民族博物館などの施設において、台湾原住民族の資料の展示活用に関する調査を行った。			
(2) 調査の結果得られた知見			
・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、台湾原住民（特にプヌマ族、タオ族、タイヤル族）の建築・器物・衣服の分類や用途に関する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、台湾原住民の資料について展示活用に資する知見を得た。			
(3) 調査研究の成果			
・6年度の調査では、プヌマ族、タオ族、タイヤル族の集落や工房を訪れて、当館が所蔵する台湾原住民の資料の用途・分類及び伝統生活文化に関する有意義な知見を得ることができた。また博物館などの施設を訪れて、展示を見学し、各施設の職員に取材を行うことで、当館が所蔵する台湾原住民を展示活用するうえで有意義な知見を得ることができた。これらの成果は今後の平常展あるいは特集陳列における展示に活かす。			
			
台東・プヌマ族の集落での調査		蘭嶼・タオ族の船工房での調査	
			
		角板山・タイヤル族の苧麻栽培の調査	
【備考】			
調査メンバー：猪熊兼樹（工芸室長）、福島修（特別展室主任研究員）、廣谷妃夏（登録室アソシエイトフェロー）			
調査日程：台湾（台東、蘭嶼、台北、烏來、角板山、澤仁里）10月8日～10月15日			
本調査は、ザ・アール・サーニ・コレクション研究支援事業の支援を受けた。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の東洋民族列品のうち、台湾原住民資料については、台湾での現地調査が行われてこなかったが、5年度から6年度にかけて当館の研究員による現地調査によって、台湾原住民資料に関する基礎的な情報を充実させることができた。 また当館が所蔵する台湾原住民資料のうち、特にプヌマ族、タオ族、タイヤル族の建築・器物・衣服の分類や用途に関する知見を得た。更に、当館が所蔵する台湾原住民資料の展示活用に資する知見を得た。展示活用ができていなかった東洋民族列品について、現地調査を行い、その分類や用途について知見を得たことにより今後、特集陳列などを行う目途が付いたことは大きな成果である。 5年度と6年度の調査結果は、7年度以降の常設展示および特集展示に反映する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する東洋民族列品については、中国資料・韓国資料・東南アジア資料・南洋資料・台湾原住民資料などから構成されている。これらの資料は、東洋館の平常展および特集陳列などにおいて展示活用が期待されるため、その分類整理を進めている。 かねてより台湾原住民資料については当館の研究員による現地調査を計画してきたが、5年度に体制が整えることができたので実現した。これによって展示活用できる資料が充実すると考えている。 6年度には、5年度に調査ができなかった地域や原住民の集落などの調査を行なった。7年度には、これまでの調査の成果に基づいて、台湾原住民資料に関する特集陳列を計画しているなど、中期計画を順調に遂行できている。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称		特集「行道面 ほとけを演じるための仮面」に関する調査研究	
【事業概要】社寺の法要で用いられた仮面である行道面について調査し、その成果を展示した。当館が所蔵する高野山金剛峰寺の鎮守、丹生都比売神社の一切経会で使用した面と、これらを描いた江戸時代の高野山学侶宝蔵古器及楽装束図を共に展示し、比較した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課 教育普及室長 川岸瀬里
【主な成果】 (実施概要) 寄託品を含め、行道面、追難面の調査を行ない、その中から、優品、特徴のある仮面を選び特集展示を開催した。また、展示作品のうち9面を描いた狩野晴川院養信筆「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」とともに展示する事で、江戸時代の仮面の状態、また幕府の文化財調査の実態も示すことができた。展示室でのスライドショーやブログを活用し、見どころをわかりやすく伝えた。 (主な成果) 行道面はほかの仮面と異なり題材がほとんど仏教尊像であるため、仏師が造ったものが多い。しかし一部の面の中に精粗、作風の異なるものもあり、工房制作だったことが推測できる。高野山天野社伝来の追難面は造形が仏像とは異質で、仮面専門の作家の可能性が考えられる。造形から作者の想定を進めることができた。 また、江戸時代の模写と比較すると、現状と欠損部などが異なり、欠損もしくは補修時期などの想定をすることができ、今後の研究の課題が広がった。			
			
展示室の様子			
【備考】特集「行道面 ほとけを演じるための仮面」(本館14室、4月2日～5月26日) 展示件数：16件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仮面は現在の展示体系にはないため、展示機会が多いとはいえないが、平安時代に成立し、寺社の祭礼で使われた行道面は祭礼の様子、その地域の信仰とそれを見るために参加する人々の思いも感じることが出来る資料として重要である。 仏像彫刻との比較を通して、行道面の造形の特徴を見出すことができた。 今回の調査で得た仮面に関する基礎データは、彫刻史はもちろん、法会や芸能の研究などにも寄与できるものである。こうしたことから評定をBとした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品調査の実施、調査研究を行い、その成果発表として展示を行うことができた。ただし、今回の調査はあくまで所蔵もしくは寄託されている行道面、追難面に限られており、今後神社等に奉納された面など東京国立博物館以外に所蔵される面や、歴史資料等との比較検討を実施することで、更に研究を深めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「親と子のギャラリー よりそう動物たち」に関連する調査研究		
【事業概要】 恩賜上野動物園、国立科学博物館との三館園連携企画「上野の山で動物めぐり」に関連した特集展示。16回目となる6年度は、「家族・仲間」をテーマとして『よりそう動物たち』と題し、展示を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室主任研究員 横山梓
【主な成果】 (1)事前調査 「家族・仲間」に関する館内収蔵作品の選定。各分野収蔵庫にて実見調査を実施。 (2)特集展示の実施 例年平成館企画展示室で開催していたが、6年度は5月14日（火）～6月16日（日）に本館2階特別2室にて、特集展示を開催。出品件数全28件。展示にあわせたリーフレットを作成、配布。会期中には、1089ブログにて2回、展示の見どころを発信した。 (3)「上野の山で動物めぐり ～ひとりでくらすか、みんなでくらすか」特別講演会の実施 コロナ禍以降オンライン実施となっていた講座を対面に戻すにあたり、コロナ禍前の人数限定のツアー形式より多くの方に参加いただけるように、全面的にリニューアルし大講堂での講演会形式として参加者を大幅に増やした。会期中にあたる5月19日（日）に当館大講堂にて、動物園の解説員（小泉祐里氏）、科学博物館の研究員（川田伸一郎氏）、当館研究員（横山）が講師として登壇し、それぞれの専門に則した視点から、動物の「家族、仲間」について解説とトークセッションを行なった（全90分）。受講者数238名。講演後は、アンケートを実施した。 (4)キッズデーでのギャラリートークの実施 会期中5月26日（日）のキッズデーにおいて、子どものためのギャラリートーク「よりそう動物をみてみよう」を実施した（全2回）。 参加者は、全部で87名（①35名、②52名）。			
  			
展示室の様子 特別講演会の様子 ギャラリートークの様子			
【備考】 (3)アンケート結果 満足度96% （「十分満足」「まあ満足」）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究では「動物」をテーマに、当館収蔵品の分野（材質）を超えて広く取扱い、一堂に会するという特徴をもち、知られざる収蔵品を紹介する好機でもある。加えて、自然史系博物館・展示施設との連携という点においても、館内でも他に例がない。6年度については、「家族、仲間」という動物のくらし方、生態系に着目することで、美術工芸品の多様な見方を提案することができたと考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品の事前調査を行い、特集展示にてその成果を提示することもできている。 中期計画の4年目にあたる6年度においては、対面での特別講演会とギャラリートークを、どちらも4年ぶりに行なった。特に講演会においては、動物園や科学博物館との連携という点を生かし、当館を初めて訪れるという聴講者が多く、新規の来館者を増やすという成果をあげることができ、これは特筆すべき成果であった。7年度以降も、継続して本連携企画及び関連特集展示を実施し、収蔵品の調査研究のさらなる発展に寄与させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集「阿弥陀如来のすがた」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「阿弥陀如来のすがた」の開催を目的として、対象となる収蔵品および寄託品について調査を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課主任研究員 西木政統
【主な成果】 (1) 実施概要 ・本特集は、西木政統（同上）、増田政史（学芸企画部企画課研究員）が担当し、館蔵・寄託品のうち阿弥陀如来を表した彫刻作品を中心に展示し、古代から中世にかけて展開した阿弥陀信仰をたどる特集展示を開催するため、収蔵品および寄託品について事前調査を行った。 ・各時代における阿弥陀如来像の調査を通じて出品作品を選定しつつ、仏師快慶（?～1227 以前）が得意とし、鎌倉時代以降に流行した三尺（約 90 センチ）の阿弥陀立像は全点に X 線 CT 撮影を実施した。こうした調査の成果を踏まえて作品解説を執筆し、CT によって判明した構造技法の特色は解説パネルとしてその成果の普及に努めた。 (2) 主な内容 ・阿弥陀像としては日本最古とされる法隆寺献納宝物の N-144 阿弥陀三尊像に始まり、アジアを代表する壁画であった法隆寺金堂壁画のうち第六号壁（本特集では A-1470-6 の模本を展示）や、A-10575 の仏画なども活用し、各時代の典型的な遺品によって阿弥陀信仰の変遷を展示することができた。 ・「東京国立博物館ニュース」777 号（5 月 20 日）の「特集」で紹介するとともに、「東博のお仕事①調査研究」において本調査のうち C-19 阿弥陀如来立像の CT 調査について報告した。なお、後者の記事は読者アンケートでもっとも注目を集めるなど（221 人中 92 人）、調査研究事業の普及につながった。 ・「1089 ブログ」に「仏像を特別な存在にするために」（6 月 5 日）を執筆した。			
 展示風景  「東京国立博物館ニュース」777 号 			
【備考】 特集「阿弥陀如来のすがた」 会期：5 月 21 日～7 月 7 日 会場：本館 特別 1 室 総出品数：12 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	浄土宗開宗850年を記念する特別展「法然と極楽浄土」に関連して、極楽浄土を象徴する阿弥陀信仰の展開を、解説パネルも多用しながらわかりやすく伝えたとともに、X線CT撮影など科学分析の成果も盛り込んだ。広報媒体への執筆やブログ等による多角的な情報発信を心がけ、その内容には最新の知見を反映することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。今後も収蔵品及び寄託品の調査研究を継続しつつ、多角的な情報発信を心掛けたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「吉野と熊野―山岳霊場の遺宝―」に関連する調査研究		
【事業概要】 当館には山岳霊場として名高い吉野及び熊野に関わる多数の出土資料が所蔵されている。これらの地域が世界文化遺産に登録されて20年となるのに合わせ、金峯山経塚出土品、那智山経塚出土品という2大コレクションに、吉野・金峯山信仰の拠点である奈良・大峯山寺からの寄託品を加え、特集「吉野と熊野―山岳霊場の遺宝―」(5月26日～7月15日)と題する展覧を開催することとし、これに係る調査研究を行った。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	清水 健
【主な成果】 金峯山経塚出土品及び奈良・大峯山寺からの寄託品について整理を行い、資料の同定を行うとともに出土地や出土の経緯を確認し、館内データベースの登録を改めるなどした。また、カラー写真のない資料も多かったことから、展示資料の写真撮影を行い、館内データベースに登録した。展示においては、あいさつ文や解説パネルを通じて、世界文化遺産としての意義や展示の基底をなす修験道の紹介、それぞれの遺跡や代表的・象徴的な展示資料の紹介などを写真を交えて行い、理解の促進に努めた。また、これらの内容を含んだリーフレットを作成し、観覧者へ無償で配布した。 この他、1089 ブログにて、吉野・金峯山信仰を象徴する存在である蔵王権現を紹介する記事を配信し、研究員によるスライドトークでは、本展と深く関わる東京・西新井大師総持寺蔵線刻蔵王権現像(本館3室にて展示)を鮮明な画像で映示し、展示ではなかなか見られない細部まで詳しく紹介した。さらに、月例講演会では「吉野・熊野に宿る神仏と造形」と題して、展示の背景をなす吉野・熊野信仰全体に及ぶ内容について講演し、展示内容を補完し、一層理解が深まるように計らった。			
			
リーフレット表紙		会場風景 (1089 ブログ「わたしのカミは左利き？」より)	
【備考】 展覧会会期：5月28日～7月15日。会場：本館14室。作品件数60件。A4版2ツ折リーフレットを発行。1089 ブログ掲載1回。月例講演会1回(6月8日)。研究員によるスライドトーク1回(7月9日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託品の整理や再確認、既出情報の整理・改訂、写真の新規撮影と登録などを行うことができ、今後研究を深める上での基盤整備が進められたのは大きな成果である。また、世界文化遺産登録の周年を行うことで世間の関心を引きつけ、山岳信仰やその美術についての理解が増進され、普及に一層貢献できたことと推察される。さらに、展示においては、他館への貸出等の困難な資料も数多く展覧することで、実資料を通じて多様な研究情報を公開できたことも有意義であったと思われる。 一方、時間の制約やマンパワーの不足によって、関連資料の網羅的な調査・研究まではなしえなかった。また、会場の制約から公開できる資料も限られ、全貌を伝えるまでには至らなかった。今後も調査・研究を重ねて研究情報の充実と公開を図り、関連資料の活用を進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託品についての調査・研究の成果を、展示を通じて公表することができ、一定の目標が達成されたものと思料される。7年度以降も一層館蔵・寄託資料の調査・研究や整理を進め、新たな切り口や視座を提供することで研究の発展に資するとともに、展示や博物館情報の充実を図り、積極的に発信を行うなどして、広く普及に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 特集「人間国宝・平田郷陽の人形—生人形から衣裳人形まで—」に関連する調査研究		
【事業概要】 二代平田郷陽は1955年、重要無形文化財「衣裳人形」保持者(人間国宝)に認定された創作人形作家である。父・初代平田郷陽が三代安本亀八を師匠とし、見世物や博覧会などで展示された生人形を職業としていたことから、自身もまた、生人形作家としてその人生をスタートした。人形に芸術性をもとめ、特に子どものあどけない表情や女性の仕草を美しくとらえた造形は、生人形制作で培われた確かな写実性に基づいている。戦後は日本工芸会(日本伝統工芸展)を中心に、伝統的な衣裳人形からの脱却を試み、抽象的なフォルムを持つ木目込人形へと向かう姿勢を紹介した、本展では4つのテーマで郷陽の創作人形の世界を紹介し、郷陽がリードしてきた創作人形における伝統と革新の一時代を紹介した。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査の概要 4年度に寄贈を受けた平田郷陽の作品を、時代によって移り変わる製作の傾向にも留意しながら、製作過程の中で生まれた資料なども含めて詳細な調査を行った。先行研究も参考にしながら、製作の原点となった生人形と郷陽の作家性、芸術性について研究を深めた。 (2)展示の成果 郷陽の制作の軌跡がうかがえるように当館の生人形資料も取り入れながら、製作時期の傾向を4つのテーマに分類してわかりやすく紹介した。ご遺族から寄贈をうけた名品を一堂に紹介する機会となり、多くの郷陽ファンの他、日本の人形に関心のある海外の来館客にも近現代における日本の人形文化を紹介した。展覧会の内容は当館のブログで紹介し、また、郷陽の代表作の数々を詳細に画像入りで紹介したオールカラーのリーフレットを作成し、可能な範囲で日英表記とし、来館者に会場で提供した。			
			
展示風景写真		リーフレット	
【備考】 展覧会会期：7月17日～9月1日、会場：本館14室、展示件数：26件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平田郷陽は日本の伝統的な人形を芸術に高めたパイオニアである。これまでの当館の調査研究は雛人形や郷土人形といった伝統的な日本人形が中心であったが、平田郷陽作品の遺族からの貴重な代表作および資料の寄贈を受けたことにより、江戸時代から近現代へと続く日本の人形文化研究へと広がった。郷陽作品の基準作を、当館に所蔵される生人形など幕末の日本における人形文化とのつながりの中で展示することで、その歴史の流れを見せる重要な成果が生まれた。さらに、これまで知られていなかった郷陽の初期の作品の展示はSNSでも話題となり、今後の人形研究に影響を与え、新たな研究テーマを提示する契機となった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、新たな収蔵品である寄贈品の調査を行い、その研究成果を特集という形で公に紹介し、日本美術史における人形芸術の意義について訴えることができた。当館の収蔵品を保管する寄贈品の調査研究は、収蔵品に新たな価値を加え高めていくために必要不可欠である。その研究成果を紹介するための特集であり、その意義は大きい。7年度以降は、この展示をもとに得られた成果をもとに、さらに専門性の高い調査研究を進めていく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集「江戸時代の図譜文化―堀田正敦編『禽譜』とその魅力」に関連する調査研究		
【事業概要】東京国立博物館（以下、当館）が所蔵する図譜コレクションの形成過程、また各図譜の編纂・作成過程・内容の分析を通じた、日本図譜文化の歴史の変遷の研究。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室研究員 長倉絵梨子
【主な成果】			
(1)実施概要			
・当館所蔵の図譜コレクションには、江戸時代後期に爆発的に流行し作られた作品が多く収められている。江戸時代の図譜文化を知るに十分な質量を担保できることから、継続的に調査研究を行っており、特に今年度は図譜の歴史の変遷に注目した調査研究を行った。なおこの調査研究は、5年度に開催した特集「虫譜づくりの舞台裏―栗本丹洲著『千虫譜』とその展開（5年6月20日～8月20日）の開催準備における調査研究の成果も引き継いで行った。			
(2)主な成果			
・上記の調査研究の成果として、特集展示「江戸時代の図譜文化―堀田正敦編『禽譜』とその魅力」を開催した。図譜の制作者や内容の歴史的な変遷を示す作品を選定し、図譜が時代とともに変化していく具体的な様相や鑑賞時の楽しみ方を紹介した。			
・大名がつくった図譜の作例として、堀田正敦編『禽譜』（全6帖）を展示した。横約7メートル、縦約1.5メートルのケースに2帖ずつ展開し、通期で全帖紹介した。			
・本特集では、和書のあたらしい展示方法として、壁付ケースに縦置きすることが出来た。			
・「1089」ブログに「もうひとつの図譜の魅力―特集「江戸時代の図譜文化―堀田正敦編『禽譜』とその魅力」番外編」（10月17日掲載）を掲載した。			
   (展示風景) 展示室（部分）堀田正敦編『禽譜』（全6帖）の展示和書の展示			
【備考】			
特集「江戸時代の図譜文化―堀田正敦編『禽譜』とその魅力」			
会期：8月6日～10月6日 会場：本館 15室 総出品数：25件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究では、中国から日本に伝わった図譜の日本における歴史の変遷に注目したところ、その結果、図譜の内容や担い手の変遷を提示することができた。また、動植物などの図譜だけでなく、石譜、印籠譜、泉譜も対象としたことで、図譜文化の広がりも具体的に示すことができた。筆致や署名に注目したことで、制作者の特定も試みた。調査の過程において、当館コレクションの形成過程により踏み込めたことは特筆できる成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館の図譜コレクションの調査研究により、改めて当館の所蔵品の質量が、我が国の図譜文化の分析に耐えうるということが再認識された。今後も引き続き展示や出版物等々を通して調査の成果を公開できると考えている。館外の学術機関（東京大学や永青文庫等）所蔵の図譜も分析対象とし、より横断的な調査・研究を行っていききたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 「没後 100 年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集展示「没後 100 年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」の開催を目的として、対象となる収蔵品および寄託品、また東京文化財研究所所蔵の資料について調査を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	東京文化財研究所研究員・学芸研究部併任職員 吉田暁子
【主な成果】 (1)実施概要 ・本プロジェクトは、吉田暁子(同上)、塩谷純(東京文化財研究所上席研究員・学芸研究部併任職員)が担当し、画家・黒田清輝の没後 100 年を記念して、代表作である《智・感・情》(重要文化財)を中心に、同時代の洋画家による絵画作品の特集展示を行うため、事前調査を行った。また美術と軌を一にして進展した美術史研究に目を向け、東京文化財研究所の収蔵する黒田清輝日記や、黒田の遺言に基づき同所の前身である美術研究所の創設に尽力した矢代幸雄による研究資料についても事前調査を行った。 ・全出品作品のカラー図版と主要作品解説、章解説、作家解説を掲載した図録を刊行し、理解促進に努めた。 (2)主な内容 ・《智・感・情》は「裸体画」という明治期の日本にもたらされた画題を根付かせ、国際的な評価をも受けた画期的な作品であることを、同時代の画家吉田博による裸体画《精華》などとともに紹介したほか、明治期に海外へ渡った数少ない女性画家であるラギーザ玉や、当時の「美術」の枠組みを超える野心作を発表した織田東禹などの試みを紹介し、日本における近代美術黎明期の画家たちの「冒険」を重層的に紹介した。 ・研究会「織田東禹《コロボックルの村》をめぐって」(9月6日、東京文化財研究所)、月例講演会「近代絵画の冒険 -黒田清輝と東博の近代絵画コレクション」(10月12日、東京国立博物館)を開催し、前者では展示作品の文化的価値を掘り下げる学際的な研究交流、後者では鑑賞者に広く展示の魅力を伝える普及活動を行った。			
			
展示風景		研究会風景	
【備考】特集展示「没後 100 年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」 会期：8月10日～10月20日 会場：本館 特別1・2室 総出品数：35件			

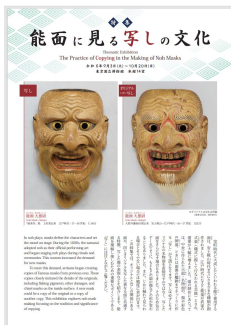
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	黒田清輝没後100年を記念する特集展示として、黒田の代表作であり重要文化財に指定されている《智・感・情》などの作品を、当時の時代背景を明らかにしつつ、「冒険」という親しみやすい切り口から紹介した。また文化人類学、考古学、文化資源学の専門家を招き、美術史学を専門とする責任者とともに研究会を開催し、出品作に関連した学際的な研究の進展を促すことができた。本プロジェクトによって得られた成果をもとに、責任者は7年度以降、『美術研究』への寄稿をはじめとするさらなる調査研究と成果発表を行う予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、絵画作品の基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、黒田記念館ではなく本館でより広い鑑賞者に向けて紹介した6年度の成果は特筆すべきものとして、中期計画の遂行に寄与できている。 東京文化財研究所に本籍を置く併任職員としての東京国立博物館本館での展示というイレギュラーな試みであった本プロジェクトは、関連部署の職員の多大なる協力を得て実行できたものの、事務処理などにおける困難を伴った。今後はより効率的な連携について検討していく必要があると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「能面に見る写しの文化」に関連する調査研究		
【事業概要】 能面は江戸時代までに様々な種類が創作され、江戸時代以降は古面、名物面を傷や銘、時には焼印までそっくりにする「写し」が主流となる。能面の写しには、多くの美術工芸の分野で行われた写しとは異なる点がある。本特集では、オリジナルと写し、同じオリジナルを写した異なる面に共通する特徴、写した傷の表現などを紹介した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課 教育普及室長 川岸瀬里
【主な成果】 (1)実施概要 継続実施してきた作品調査の成果を、「写し」という観点から精査することで、能面の写しの諸相を見られる作品を選び、展示を行った。リーフレットを制作し、展示室内での解説パネルやスライドショー、公式ウェブサイトでのブログを通じて、見どころを広く、またわかりやすく伝えることにつとめた。 (2)主な成果 X線CT撮影によって得られた情報を紹介しながら、能面の写しの他の美術工芸とは異なる特徴や、能面の写しにいくつかの系統があることを示した。原品にそっくりな写しと、原品を見ながら作ったとは思えない写しなどその精度には幅がある。この揺らぎの原因はいくつかあると思われる、新たな研究課題として提示した。			
			
リーフレット表紙		展示の様子	
【備考】 特集「能面に見る写しの文化」（本館 14 室、9 月 3 日～10 月 20 日） 展示件数：22 件			

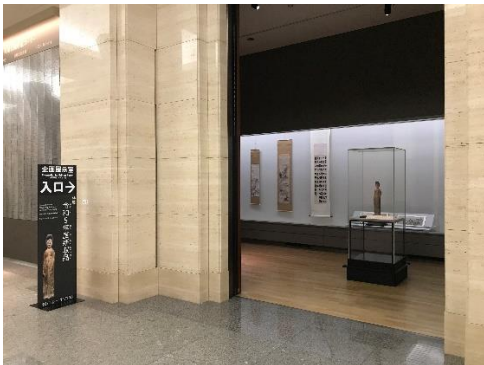
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	能面における写しの重要性は認識されてきたものの、名物面と呼ばれる古面と、写しを実際に比較する機会は多くない。そのため、本特集展示も、写された面と写した面などを比較しながら写しを理解する機会として貴重であったといえる。 本研究は当館所蔵の金春家伝来名物面などの特徴を何度も調査して確認したうえで、写しと実際に比較して行われた。これまで積み重ねてきた能面調査で得た成果も活用したからこそ実現したものである。 本研究で示した名物面の特徴と写しの特徴、あるいは写しの系統などについては、今後の能面研究でも役立つものと思われる。こうしたことから評定をBとした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、作品の調査研究を行い、その成果発表として展示を行うことができた。 ただし、今回の調査ではあらたな課題も多く見出された。能面の制作についてはいまだ不明な点も多く、芸能、歴史研究にも寄与できる課題である。今後は更に研究を深め、課題に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称		特集「令和5年度新収品」に関連する調査研究	
【事業概要】 5年度に新たに収蔵品に加わった文化財のうち、寄贈分・購入分より主だった作品を公開し、新収品を通じて文化財収集の意義を紹介した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部保存科学課主任研究員 大橋美織
【主な成果】 (1)実施概要 ・本特集は、大橋美織（同上）、西木政統（学芸研究部列品管理課主任研究員）が担当し、5年度に寄贈・購入によって収蔵した作品について事前調査を行い、出品作品を選定した。 ・作品担当者の助言に従いながら調査研究を進め、各担当者が最新の研究成果を反映した作品解説を執筆した。 (2)主な内容 ・作品担当者と展示作品や展示方法、展示期間などを協議しつつ、平常展調整室やデザイン室と協力しながら各分野を代表する作品によって新収品を紹介する展示ができた。 ・会期中の10月7日、寄贈者を招待して寄贈者感謝祭を実施した（出席者18名）。各作品担当者によるギャラリートークを行うとともに、寄贈者との懇談を通して収集事業の普及に努めた。 ・「東京国立博物館ニュース」778号（8月20日）の「特集」で概要と主な作品の一部を紹介した。 ・「1089 ブログ」に「東博の仲間になった作品たち——令和5年度新収品」（10月21日）を執筆した。			
			
展示室入口		展示室風景	
			
		「東京国立博物館ニュース」778号	
【備考】 特集「令和5年度新収品」 会期：10月1日～11月10日 会場：平成館 企画展示室 総出品数：22件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度の新収品のなかから適切な寄贈・購入作品を選定し、これを紹介することで、博物館の重要な業務の一つである収集事業の意義についても周知することができた。また、東京国立博物館ニュースやブログといった広報媒体への執筆を通して、積極的な情報発信を心掛けた。今後も新収品の紹介を通して収集について理解を求めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「日本を中心にして広くアジア諸地域等にわたる文化財」を収集するという当館の方針に基づいて収蔵された文化財について、収集を通して行われる基礎的かつ総合的な調査研究の成果を踏まえながら広く紹介するなど、中期計画を遂行できている。今後も収集過程における調査研究を継続しつつ、多角的な情報発信もまじえて収集事業の理解促進に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「やきものを彩る金と銀」に関する調査研究		
【事業概要】 金彩・銀彩という陶磁器の装飾方法を取り上げ、中国やイスラーム圏、ヨーロッパにおける製陶及び日本の製陶の歴史を比較し、各々の展開をたどることにより、とくに日本における表現の独自性に注目したもの。			
【担当部課】	調査研究課東洋室	【プロジェクト責任者】	三笠景子
【主な成果】 4年度に完了した科学研究費若手研究「日本陶磁における金銀彩の特殊性について」では、日本陶磁のみならず、イスラーム陶器や中国陶磁などに視野を広げて、金銀彩が施された多彩な陶磁器の調査、及び作家からの聞き取りを行うことができた。本研究の成果として、当館所蔵のコレクションに基づいて中国と日本における賦彩の展開をたどりながら、近世以降現在に至るまで金銀彩を積極的に採用してきた日本陶磁の独自性を紹介する展覧を本館14室にて10月22日～12月1日まで行った。			
【備考】 展示件数 35 件。			
			
14 室展示風景			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、2017年度鹿島美術財団研究助成「日本陶磁における銀彩の美術史的意義について」を端緒とし、若手研究「日本陶磁における金銀彩の特殊性について」へと発展させたものである。17世紀後葉の京焼、伊万里焼のみならず、乾山や道八、永楽保全・和全といった江戸時代中、後期の諸陶工による作例のほか、国内所蔵の中国陶磁、イスラーム陶器にも範囲を広げて調査を行ってきた。金彩・銀彩に注目した研究は日本の仁清作品についていくつか知られるが、本研究の場合、中国陶磁やイスラーム陶器との比較からその独自性や発展性について言及した点は特筆すべきである。以上より、当初の計画通りの成果を獲得できたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ひとつの装飾技法を通じて、他地域の陶磁器との比較から日本の陶磁器の持つ独自性や魅力を明らかにした点は新しい。中国や朝鮮、日本といった地域の壁を越えて、東アジアにおける陶磁器の歴史を俯瞰する必要があり、本研究を通じてそうした課題に取り組み、中期計画の4年目として所期の目標を達成できていると考える。7年度は近代に対象を広げて調査を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特集「モダンきもの一名門「大彦」の東京ファッション」に関連する調査研究		
【事業概要】 明治8年(1875)創業の大彦は、初代・野口彦兵衛(1848-1925)の手がけるきものデザインや染の技術によって一世を風靡し、東京名物のひとつとして親しまれた。彦兵衛の次男である野口眞造(1892-1975)は、大正14年(1925)に大彦二代目を継いだのち、大彦染織美術研究所を立ち上げ、父が収集した江戸時代の小袖「大彦コレクション」(現在は当館蔵)の優品から復元を試み、その技術と意匠の実証的研究を行なった。その上で、眞造は現代にふさわしい意匠と染織技術を考案し、今までにないモダンなきものを生み出した。眞造がプロデュースし、独自の友禅染技術を駆使した大彦のきものは美術衣裳と呼ばれた個性あふれるモダンきものを特集を通して紹介した。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査の概要 4年度に野口眞造の遺族より寄贈をうけた、昭和期を中心とする東京の呉服商「大彦」のきものを調査し、同時に寄贈を受けた関連資料と作品とを関連付けながら研究を進めた。江戸時代の小袖のコレクションが近現代のきものデザインに与えた影響、また、大彦染の独自性が生まれた背景などを調査した。 (2)展示の成果 寄贈を受けた作品は、これまで当館ではほとんど展示されることのなかった近現代のきものを中心であったことから、見慣れない来館者にもわかりやすいテーマを設定して展示を工夫した。「東京名物とよばれた大彦染」「染と織を究めて」「初代・野口彦兵衛の小袖蒐集」「大彦のモダンきもの」「二代・野口眞造が目指した染織」のテーマに分けて、10月29日～12月8日日本館特別1・2室で展示した(展示作品33件)。また、調査研究の成果を反映した展覧会図録を作成、販売し、展覧会期間中、534冊売上があった。			
			
本館特別2室 展示風景		展覧会図録	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集は、4年度に親族より当館に寄贈された近現代の大彦のきものについて、当館が所蔵する初代大彦・彦兵衛が蒐集した江戸時代を中心とする小袖のコレクション「大彦コレクション」と二代・野口眞造の模写との比較によって大彦の技術とデザインの源泉をたどり、その後のモダンデザインの展開を紹介する貴重な機会となった。昭和期における東京モダンで個性的な友禅染の技術と意匠を紹介する初めての試みとなった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、新たな収蔵品である寄贈品の調査を行い、その研究成果を特集という形で公に紹介し、日本服飾史における近現代のきものをファッションとしてとらえ、その歴史的・文化的意義について示した。当館の収蔵品・寄贈品の調査研究は、収蔵品に新たな価値を加え高めていくために必要不可欠である。その研究成果を紹介するための特集であり、その意義は大きい。7年度以降は、他機関が所蔵する大彦資料の調査なども進めながら、さらに専門性の高い調査研究を進めていく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集「中国書画精華—宋・元時代の名品—」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「中国書画精華」は、毎年秋に東洋館8室で開催される名品展である。6年度は、宋・元時代の名品の魅力紹介をテーマとした。			
【担当部課】	学芸部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室主任研究員（兼 東洋室） 植松瑞希
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間：11月12日～12月22日 ・開催場所：東洋館8室 ・出品作品数：53件 ・担当者：植松瑞希、六人部克典（学芸研究部調査研究課東洋室研究員）、猪熊兼樹（学芸研究部調査研究課工芸室長） (2)成果内容 ・本事業の関係作品について撮影をし、伝来を示す鑑蔵印・題跋・付属品等の整理を行った。 ・出品作品のうち、TA-140 寒江独釣図、TA-141 雪景山水図、TA-297 猿図、TA-326 雪景山水図、TA-344 山水図、TA-355 雛雀図、TA-364 栗鼠図、TA-487 唐絵手鑑筆耕園、TA-633 梅花双雀図については、鑑蔵印・題跋・付属品等の全テキストの釈文を作成し、研究アーカイブズ上のデータベース「中国書画録」にて公開した。 ・上記調査研究をふまえ、当館所蔵寄託の中国書画等のうち、53件を選定し、展示した。 ・初学者向けの「見どころ紹介」パネルを作成した。 ・1089 ブログにおいて本事業の成果を発信した。			
			
展示風景		データベース「中国書画録」	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国の宋・元時代の書画は、中華圏では非常に重視され人気のあるジャンルだが、近年の日本では馴染みがなく、国内外で温度差があった。本事業ではそのギャップを埋めるべく、パネルやブログを通じて日本人来館者向けの解説を充実させることで、宋・元時代の作品の魅力を伝えることができた。また、所蔵作品の基礎情報も蓄積・公開して、学術拠点としての当館のプレゼンスを高めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵の中国書画作品の魅力の周知、基礎情報の蓄積・公開を達成したため、中期計画は問題なく遂行できている。今後も同様の調査研究を継続していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究 カ 特集「遊牧のくらしとテキスタイルーバローチを中心にー」に関する調査研究		
【事業概要】 当館所蔵の松島きよえ氏（1922～92）収集のアジア遊牧民染織コレクションより、パキスタン、アフガニスタン、イランにまたがるバローチスターンを中心に暮らす人々、バローチについて調査研究を行う。その調査内容を特集展示にて広く発表し、遊牧のくらしを彩ったラグの魅力を伝え、理解を深めてもらう機会とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	文化財活用センター研究員 沼沢ゆかり
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間・開催会場：11月12日（火）～7年2月16日（日）、東洋館13室、出品作品数17件 ・担当者：沼沢ゆかり（同上）、小山弓弦葉（調査研究課長）、廣谷妃夏（登録室アソシエイトフェロー） (2)主な内容 ・3年度より、当館担当者（同上）及び客員研究員（文化学園服飾博物館・村上佳代氏、慶應義塾大学・鎌田由美子氏）による当館の松島きよえコレクションの悉皆調査を行った。3か年の成果のひとつとして、本特集展示を開催した。 ・バローチの作品に用いられている技法を、模式図を用いて解説しつつ、松島きよえ氏が撮影した1960～1990年代の現地写真を掲出することで、バローチのくらしと染織品の関わりをわかりやすく紹介した。 ・加えて、バローチと深く関わりのあるブラーフイーと呼ばれる人々、類似する文様が織り表されたアフガニスタンの作品を展示し、バローチや遊牧民染織の多様性を紹介した。 ・中央大学総合政策学部講師・政策文化総合研究所研究員村山和之氏より現地の情報を聞き取り、より正確な地図を作成し、概要文の表現にも留意した。 ・リーフレットを作成・配布し、1089ブログでも本特集を発信した。			
			
展示風景①		展示風景②	
			
		リーフレット	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館は、近年「トライバルラグ」として注目が高まっているアジア遊牧民染織を、一括して所蔵している日本有数の博物館である。したがって、正確な作品情報を、社会に積極的に発信することが求められており、日本国内での研究がいまだ少ない当該分野においてはなおさら重要である。3年度から行った客員研究員を交えた松島きよえコレクションの悉皆調査、及び有識者への聞き取りは初めての試みであり、誤りのない情報公開に努めた意義は大きい。本特集を通じ、調査成果の一部を展示やリーフレット、ブログで広く公表することができた。また、アジア遊牧民染織に関する基礎研究にも寄与する、調査データを蓄積することができた。これらは非常に大きな成果であると考えA判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品の東洋染織に関する調査・分析を行い、基礎的情報を整理・蓄積し、その成果を展示・広報を通じて、広く一般社会に発信することができた。本事業は当館の中期計画を遂行するものである。7年度以降も、悉皆調査を経て得られた知見をもとに、別の地域にも焦点をあて調査研究を継続して行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集「日本の伝統模様「雪」」に関連する調査研究		
【事業概要】 日本の工芸に表わされる模様をテーマとした展示の第2回として「雪」を取り上げる。冬の到来を告げる「雪」は、室町時代後期頃より工芸にデザインされるようになった日本独特の模様の1つである。降る雪の様を模様にした「はつれ雪」「雪輪模様」のほか、「雪持柳」「雪持笹」などは、雪が降った朝、植物に降り積もった雪に情趣を感じた日本人のところが映し出されている。江戸時代末期になると西洋の自然科学の知識が日本にも導入され、雪の結晶が模様を表わされるようになった。温暖化によって四季感が失われつつある今、日本の四季模様の1つである「雪」の模様を取り上げることで、自然が織り成す四季を表現してきた日本の伝統模様を、子どもたちや海外からの来館者に伝える機会としたい。室町時代から江戸時代にかけての漆工・陶磁・金工・染織などの工芸品に表現されるさまざまな雪の模様を通して、自然の形を模様にする日本独特の美意識を見つめ直す機会としたい。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課課長 小山 弓弦葉
【主な成果】 (1)調査の概要 日本の伝統的な工芸である漆工（蒔絵・螺鈿）、金工、陶磁、染織に表現された雪の模様がそれぞれの技法によってどのように表現されるのか、また、時代によって、雪の表現が如何に変化していくのかを比較調査した。 (2)展示の成果 本展示で日本の伝統模様の中でも特に日本独特の美意識から生まれた「雪」の模様を日本の工芸品に表わされた模様を通して紹介することにより、国内外の一般の来館者に日本の伝統文化を周知する機会となった。展覧会の内容は当館のブログで紹介した。また、雪の模様をわかりやすく図入りで紹介したリーフレットを作成し、可能な範囲でバイリンガル表記とし、来館者に会場で提供したのみならず、今後の博物館教育プログラムにも役立つような形態にした。 (3)ワークシートの配布、スタンプワークショップの実施 ①ワークシート「東博雪見 雪のもようをさがしてみよう」の配布 雪のもようをイラストや日本語・英語テキストで紹介し、14 室の作品と照らし合わせながら鑑賞するワークシートを作成し、会場で3,000 部を無料配布した。 ②ワークショップ「東博雪見 雪のもようデザインしよう」 会期中7年1月26日（日）のキッズデーにおいて、子どもたちに向けて「雪のもようのスタンプワークショップ」を実施した。参加者は、未就学児を中心とした計311名。			
			
【備考】 会期 7年1月2日（木）～2月16日（日）、会場 本館14室、展示作品数 23件			リーフレット



リーフレット

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査によって得られた成果は、海外から訪れる来館者にとっても日本文化を知る契機となるため、リーフレットの内容もできる限り英文で掲載し、理解が深められるように配慮した。また、リーフレットの内容は、今後の教育普及プログラムにも活用できるように配慮した編集とし、データも再利用できるようにした。また、今回はより年少者に親しんでもらうために、ワークシートを製作し、スタンプワークショップを実施した。今後も、日本の別の伝統模様をテーマに特集と組むことにより、多彩な日本の伝統模様をわかりやすく詳細に紹介するコンテンツを蓄積することができる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本美術を通して日本文化を紹介し普及していく当館の事業にとって、四季や自然に対する日本人の美意識を反映させた日本独特の伝統模様を紹介することに意義がある。さらに、日本の歴史的にもさまざまな展開を見せる多様な工芸の技術から生まれる繊細で美しい模様の表現を紹介することができた。 7年度も継続的に日本の伝統模様の1つのテーマで調査し、その成果を来館者に紹介する特集をすることで、日本の工芸文化の魅力を広く深く紹介する機会を広げていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「博物館に初もうで ヘビーなパワーを巳たいの蛇」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「博物館に初もうで」は毎年の恒例となった企画で、年初に開催することから多くは当該年の干支をテーマに、各分野を横断して作品を紹介するものである。7年が巳年にあたることから、当館所蔵品・寄託品のうちヘビに関わる作品を各分野の研究員の協力を得て収集、選定し、それぞれの文化的背景を検討した。こうした基礎的な調査をもとに「ヘビーなパワーを巳たいの蛇」と題する特集展示を企画し、絵画や工芸品、考古資料を通して、古今東西の人びととヘビとの文化的関りを紹介することができた。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部ボランティア室長 小野塚拓造
【主な成果】 (1)調査の概要 本事業は小野塚拓造（同上）と村瀬可奈（学芸研究部絵画・彫刻室 研究員）が、各分野の担当者の協力を得て実施したものである。各分野担当者の協力を得て、館蔵品および寄託品の中から、絵画、工芸品、歴史資料、考古資料、民族資料・資料といった多岐にわたる作品・資料を集め、関連文献を参照しながら、ヘビにまつわる文化史について総合的に検討を重ねた。検討成果を特集展示のコンセプトに収斂させ、選定した作品の実見調査を進めるとともに、必要に応じて新たに写真撮影を実施した。 (2)調査の成果 調査をもとに選定した51件の作品を、「シンボルとしてのヘビ」「ヘビのかたち」「ヘビと祈り」「物語のなかへビ」の4つのグループにまとめて紹介する特集展示を企画した。特集展示は、古今東西の人びとが身近な生き物であるヘビをどのように捉え、それぞれの文化的脈絡の中でどのように表現してきたのかを、文化財を通して概観する貴重な内容となった。これまでに活用されてこなかった作品を積極的に紹介できたこと、よく知られている作品も新たな切り口から紹介できたことも成果となった。主要な作品画像と章解説を付したリーフレットを発行し、リーフレットのデータをウェブ上にも掲載することで、成果を広く公開することができた。			
			
リーフレット		特集展示会場	
【備考】 特集「博物館に初もうで ヘビーなパワーを巳たいの蛇」（7年1月2日～1月26日）総出品数：51件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「博物館に初もうで」特集は恒例となった企画で、6年度は当館所蔵品のうちヘビに関する作品を、各分野に従前の調査・研究に基づいて紹介することができた。展示を構成する4つの章は、調査成果を博物館になじみのない観覧者でも親しみやすいよう、分かりやすく展開したものである。ヘビにまつわる特集展示から見えてきた文化財面白さを、リーフレットやブログを通して、広く社会一般に発信できた点も評価に値する。7年度以降も調査研究に基づく特集展示を継続して進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、当該年の干支にちなんだ作品を中心とした展示を実施した。年初に博物館を楽しむための馴染みに企画として定着しており、これまで継続して行ってきた成果の蓄積は大きい。7年度以降も、6年度と同様に、館内の各分野担当者との連携をはかりつつ調査研究を進めることが必要で、今後も展示だけでなくさまざまな媒体を利用した方法で成果を発信することが求められる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究 オ 特集「拓本のたのしみ—明清文人の世界—」に関する調査研究		
【事業概要】 書の拓本とそれをめぐる明・清時代の文人の活動に焦点をあて、当館の収蔵品・寄託品から、碑拓法帖と明清文人による関連資料を調査研究し、特集展示を開催して、書の拓本に魅せられた明清文人の世界を紹介する。本事業における特集展示は、当館と台東区立書道博物館の連携事業の一環として実施する連携企画展示とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課東洋室研究員 六人部克典
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間、場所：7年1月2日～3月16日、東洋館8室 ・担当者：六人部克典（同上）、植松瑞希（学芸研究部調査研究課絵画彫刻室主任研究員）、猪熊兼樹（学芸研究部調査研究課工芸室長） (2)主な内容 ・当館担当者と台東区立書道博物館担当者（鍋島稲子氏、中村信宏氏、春田賢次郎氏）が連携を図り、本事業の関係作品について調査研究を実施して、画像及び資料情報を収集、整理した。 ・当館では、関連する東洋書跡、東洋絵画等129件を選定し、「はじめに一文人と拓本」「拓本あれこれ」「碑拓法帖の優品」「鑑賞と研究」「収集と伝来」「おわりに一文人の世界」の6部構成により展示した。 ・当館と台東区立書道博物館の主要な展示作品等121件を収録する関連図録（144頁、当館展示作品37件）において、当館担当者が執筆、編集協力を行った。 ・連携講演会「拓本のたのしみ」（7年2月15日、平成館大講堂）及び1089ブログで本事業の成果を発信した。			
			
展示風景		関連図録	
			
連携講演会		1089 ブログ	
【備考】 ・連携企画展示：「拓本のたのしみ—王羲之と欧陽詢—」7年1月4日～3月16日、台東区立書道博物館 ・関連図録：『拓本のたのしみ』7年1月2日、公益財団法人台東区芸術文化財団			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	碑拓法帖は、従来、中国書法史の重要な研究テーマとされてきた。本事業では、その鑑賞・研究・収集・伝来に係る明清文人の関連資料を合わせて対象として、碑拓法帖について受容面を含めて多角的に調査研究し、当館の収蔵品・寄託品中の関係作品について情報を整理することができた。 また、特集展示を通して主要な作品を公開し、関連図録・講演会・ブログ等により、研究成果を広く発信することができた。台東区立書道博物館との連携事業という点では、両館が同時期に同一テーマで開催する連携企画展示の第22回として継続的に実施し、中国書画に関する研究成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国書画分野の文化財に関する基礎的な情報整理など調査研究の成果を蓄積し、展示・教育普及・広報等の活動を通して社会一般に発信し、中期計画を遂行できている。7年度以降も収蔵品・寄託品を主として調査研究を継続し、その成果をわかりやすい形で広く発信したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 特集「おひなさまと日本の人形」に関連する調査研究		
【事業概要】 3月3日の桃の節句にあたり、館蔵品の雛飾りや御所人形や衣裳人形、三つ折れ人形など日本の人形の特集展示を開催している。高度な技術をもって制作された、種々の人形を調査研究し、その成果を、繊細で美しいものを尊ぶ日本の文化について、理解を深めてもらう機会とする。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	文化財活用センター研究員 沼沢ゆかり
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間・開催会場：7年2月18日（火）～7年3月23日（日）、本館14室、出品作品数45件 ・担当者：沼沢ゆかり（文化財活用センター研究員・工芸室研究員）・小山弓弦葉（調査研究課長） (2)主な内容 ・雛飾りの源流といわれる天児・這子から、立雛や古式次郎左衛門雛、芥子雛に加え、松江藩松平家伝来の雛道具など、雛人形の成立から発展までを見通せる展示を行った。 ・雛人形に加えて、宮廷のお土産人形として知られる御所人形や、「浮世人形」とも呼ばれ当時の風俗を紹介する衣裳人形、季節に応じて衣服を着替えさせて子供たちが遊んだ三折れ人形も展示することで、繊細でかわいらしいものを尊ぶ日本独特の文化・美意識を紹介した。			
			
展示風景		展示風景	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は、江戸時代の人形のコレクション多く収蔵しており、これらを有効に活用し、日本の伝統文化を来館者に紹介する本事業は必要不可欠である。また、日本の季節感や節句に関わる展示は、海外の来館者に日本文化を広く伝える重要な契機であり、継続的に行っていくべき事業と考える。 雛人形、衣裳人形といった日本の高い工芸技術を生かし製作された人形の調査研究は、数多くの人形のコレクションや工芸作品を所蔵する当館にとって重要な研究課題であり、これまでも継続的に展示を行ってきた。人形の大規模な寄贈とコレクションの拡充もつながっており、今後も本事業を継続する必要性があると考えます。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本の四季や伝統としても守り伝えるべき人形文化について、継続的に調査研究を行い、その成果を展覧事業や広報活動などを通して社会一般に発信している。本事業は当館の中期計画を遂行するものである。7年度以降も、所蔵の人形作品の調査研究や展示を継続していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究 カ 館蔵の埴輪等資料に関する調査研究学芸研究部調査研究課考古室		
【事業概要】 当館が戦前から所蔵する神奈川県横浜市の瀬戸ヶ谷古墳出土品と記録類を含む関連資料の総合調査である。当該古墳から出土した埴輪群の再検討と再整理を通じて所蔵品を的確に把握し、総合文化展等の展示や他の所蔵品との比較検討等の調査研究に活用する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課考古室	【プロジェクト責任者】	考古室長 井出浩正
【主な成果】 (1)調査の概要 瀬戸ヶ谷古墳は神奈川県横浜所に所在する、関東地方南部の6世紀後半を代表する全長約40メートルの前方後円墳である。昭和18年及び同25年に、当時の当館職員や地元研究者が中心となって発掘調査を実施しているものの、戦前戦後の混乱を受け、出土品の大部分は当時のまま未登録・未整理の状況にあり、館蔵品となった一部を除きほとんどが活用されていない。そのため、賛助会寄附金「瀬戸ヶ谷古墳出土埴輪の調査研究等」の助成を受け、3年度より館蔵作品の再検討と、再整理を目的とする出土品や記録書類等を含む総合的な調査研究を実施している。 (2)調査の成果 6年度は主に、①発掘調査時の記録資料の吟味と既刊の調査概要や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとの出土埴輪の数量把握と埴輪の分類(円筒埴輪、人物埴輪、器財埴輪等)、③分類した埴輪破片の接合検討等を実施した。 ①については、古墳が所在する横浜市歴史博物館の協力もあり、発掘当時の地権者のご子孫宅を訪問し、調査当時の手掛かりとなる記録や資料等が伝来したかどうか、聞き取りを行った。その結果、発掘に関する図面、関係者とのやり取りを示す手紙、来訪者名簿などが丁寧に管理されていることが判明した。当館には写真など断片的な資料がわずかに残されているのみであり、これらの資料によって、発掘当時の埴輪の出土場所や出土個数、出土時の状況など、瀬戸ヶ谷古墳をより具体的に復元することが可能となった。併せて瀬戸ヶ谷古墳の現状を踏査した。 ②、③については、接合検討を継続しつつ、円筒埴輪や器財埴輪、人物埴輪など、埴輪の種類の特定制と形状復元を行うことができた。特に朝顔形埴輪とよばれる円筒埴輪の接合検討を進めることができ、個体数や器形復元を推測することが可能となった。			
【備考】			



瀬戸ヶ谷古墳周辺の踏査
(古墳は中央斜面付近)



瀬戸ヶ谷古墳周辺の踏査
(古墳は中央斜面付近)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	6年度は①発掘調査時の記録資料の吟味や概要報告書や当時の日誌等の精査、②発掘調査区ごとに出土した埴輪の数量の把握と埴輪の分類（円筒埴輪、人物埴輪、器財埴輪等）、③分類した埴輪破片の接合検討を中心に計画を実施した。 ①については、発掘調査当時の状況を知るための調査であり、当時の地権者のご子孫宅へ訪問、聞き取り調査を行うなど、当館所蔵の出土品をより具体的に把握するうえで重要な調査となった。訪問に先立ち協力いただいた横浜市歴史博物館を含め、他機関や個人に資料の実見・調査の協力を得ることができ、当館の取り組みに対する理解と共有を図ることができた。これらにより古墳をより具体的に復元できたことは大きな成果である。②については、アルバイトの大学院生や学生の協力を得て、5年度から検討している調査区ごとの出土埴輪の数量や埴輪の種類の特定制作業を継続的に実施した。③については、これまで当館の所蔵作品の中で確認されていない新たな器財埴輪や、展示中である当該古墳出土埴輪の一部の可能性のある破片等の検出等、活用に向けた着実な基礎作業が進捗していると評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は当該事業の4か年目に位置づけられる。3年度に着手した出土埴輪の洗浄とコンテナ箱への簡易的な仕分け作業を踏まえ、4年度以降の保管箱ごとの埴輪の分類と分類を経た埴輪の接合を継続した。出土した埴輪の悉皆的な接合検討を進めつつ、特徴的な器形を有する埴輪や、特定の埴輪の抽出と集中的な接合検討を実施できる段階に入ったと評価できる。瀬戸ヶ谷古墳の出土品と全容の復元に向けて、引き続き中期計画に基づき適切に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 近畿地区を中心とする社寺文化財の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 京都国立博物館では、文化財の保存と活用に資すべく、昭和54年度より主に近畿地区所在の社寺を対象に伝存文化財の悉皆調査を行っている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室長 降矢哲男
【主な成果】 (1)2年度より継続的に実施している大徳寺塔頭・龍光院を対象寺院として、書跡・絵画・工芸を中心に10日間(8月28日～9月1日/2月5日～9日)の調査を実施した。調査件数は108件である。 (2)調査は完了していたが報告書は未刊行であった建仁寺塔頭(禅居庵・大中院・久昌院)の調査成果の一部を『社寺調査報告』34として刊行するための編集作業を行った。印刷・製本は7年度に行う予定。 (3)過去に実施した社寺調査の調書・写真を整理するとともに、調書データの電子化を進めた。			
【備考】 (1)龍光院の社寺調査 ・龍光院は大徳寺156世の江月宗玩(1574-1643)を実質的な開山とする禅宗寺院。非公開寺院であるが、国宝曜変天目をはじめとする指定文化財を多数有する。 ・龍光院での実地調査は調査スペースの関係上、通常の社寺調査よりも参加人数を絞って実施した。 (2)過去の社寺調査におけるデータの整理 ・過去に実施した社寺調査の未刊行分の調書や写真資料等について整理を行い、未刊であった建仁寺塔頭の調査成果の一部を『社寺調査報告』34として刊行するための編集作業を行った。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寺院側の全面的協力もあり、昨年と同様に10日間の実地調査(龍光院)を実施することができた。また、報告書刊行に向けて継続的に実施してきた写真整理及び調書データの電子化を取りまとめ、『社寺調査報告』34として刊行するための編集作業を行うことができた。以上、事業そのものを着実に推し進めることができたため、Bと評価する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に示した「有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究」事業の一環として、2年度より大徳寺塔頭・龍光院所蔵文化財の悉皆調査を継続しており、6年度は陶磁・金工・漆工・染織をはじめとした工芸を中心に、調査・撮影を行った。書跡・絵画について全ての撮影・調書の作成を完了したため、報告書の刊行に向けての準備を着実に進めている。7年度は工芸を中心に調査を継続することとしている。また、未刊の『社寺調査報告』の編集作業を行い、調査成果を公開する準備を進めているところであり、Bと評価する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、とくに古代・中世の日本人がどのように本文を読み下していたか、という日本語の有り様が判明する。京都国立博物館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を通して得られた成果を、展示、講演、刊行などを通して公表する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室主任研究員 上杉智英
【主な成果】 (1)訓点の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、計6回の調査を実施した。 (2)調査作品は「妙法蓮華経」や「性霊集」「起信論義記」「法華経玄賛」（以上、館蔵品）など13件に及び、今後の研究にも資するよう撮影を行った。 (2)本研究と密接にかかわる聖教を特別展で展示し、関連する講演会や図録掲載論文・解説を通して調査成果の公表に努めた。		 「妙法蓮華経」調査風景	
【備考】 ・調査回数及び件数6回・13件 ・成果の公開（出版物）『特別展「法然と極楽浄土」展覧会図録』（4月16日） ・成果の公開（発表）宇都宮啓吾「聖教と修験－修験の拠点から見たネットワーク」（関西軍記物語研究会第110回例会、7月14日） ・成果の公開（論文）宇都宮啓吾「仁和寺を巡るヲコト点展開史の問題について」『訓点語と訓点資料』153（9月） ・成果の公開（展示）平成知新館特別展「法然と極楽浄土」（10月8日～12月1日） ・成果の公開（講演会）「特別展「法然と極楽浄土」に学ぶ」（浄土宗教学院公開講座、令和7年2月7日）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査を順調に実施することができ、4年度（調査回数及び件数5回・15件）、5年度（調査回数及び件数4回・10件）よりも調査回数・撮影件数ともに増加し、一点一点堅実に成果を蓄積している。併せて、調査成果の公開も展示・講演会・発表・論文・図録の刊行を通して着実に実施できているため、所期の目標は達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目である6年度は、これまでの基礎的・探究的な調査及び研究の蓄積を踏まえ、展示・講演会・発表・論文・図録の刊行と調査研究成果の多面的な発信ができており、着実に中期計画を遂行していると考えられるため、Bと評価する。7年度以降も引き続き調査・研究を推し進め、文化財の収集・保存修理・展覧等の事業に反映させていくこととしている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 旧家伝来の工芸品に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 関西圏を中心に、旧家に伝来する工芸品の調査を実施することにより、地域の暮らしの在り様を物質的な側面から探る。作品の管理・保存への助言を行うとともに、寄贈・寄託・貸与に結び付け、博物館の収蔵品と展示の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【主な成果】 ・科学研究費の研究課題として採択された岡山県の野崎家所蔵文化財の悉皆調査を6月、8月、10月、12月、7年1月、2月に実施した。調査は野崎家塩業歴史館と共同で行い、収蔵管理及び展示についての助言も行った。 ・野崎家塩業歴史館の収蔵品に関連する他館の作品調査も行いその成果を学叢にまとめた。 ・11月に京都府、12月に大阪府の旧家からの依頼を受けて金工品の調査を実施し、その内1件を寄託受入した。 ・12月に京都市の旧家の依頼により、染織品の調査を実施した。			
【備考】 野崎家調査4回12日間 作品調書180件、調査画像約1,800カット 金工調査2回2日間 作品調書2件、調査画像20カット 染織調査1回1日間 作品調書5件、調査画像50カット			
			
		野崎家塩業歴史館関連作品調査風景	
		野崎家塩業歴史館漆器調査風景	

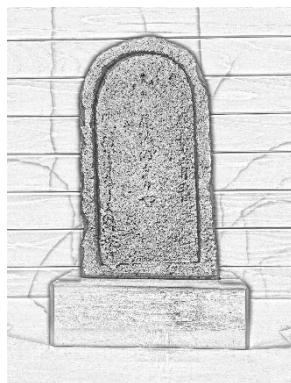
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年の生活様式や社会環境の急激な変化により、地域共同体において中心的な役割を果たしてきた旧家では、邸宅や蔵の建て替え、転居などが進み、収蔵する美術工芸品についての調査が急務となっている。本プロジェクトの目的は、この社会的要請に応え、旧家の暮らしの物質的な基礎データを蓄積し、失われゆく伝統的な生活文化を記録し、今後の研究へつなげることである。本研究では、美術作品の調査とともに、旧家のかつての生業の聞き取り調査等も行い、歴史学・民俗学的な観点からも、美術品をめぐる文化の全体像の把握に努めている。6年度も科研費研究課題である「備前児島の野崎家に伝わる文化財の総合調査：塩田王の美術コレクション」(研究代表者永島明子・基盤研究A)を中心に作品の基礎データ収集を進め、作品の調書や画像を蓄積することができた。また、京都市内の旧家の調査依頼に応え、金工作品1件の寄託に結び付けた。7年度以降も、引き続き基礎データを蓄積するとともに収蔵品の充実に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都文化を中心とした文化財を収集・展示対象とする当館において、基礎的な研究の一翼を担う事業である。7年度以降も調査を継続し、所蔵者による文化財の収蔵管理への助言を行うとともに、当館への寄託や寄贈へと結びつけ、展示や収蔵品の充実を図る。中期計画の4年目として、順調に課題を遂行できている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究 (4)-①-1))		
【事業概要】 京都国立博物館所蔵の京都周辺出土の考古遺物を中心に基礎的な整理作業や写真撮影を行い、その研究成果を展示などで一般の方や研究者に向けて広く発信した。また、地方公共団体や大学と連携をとりながら、協力・助言を行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	考古室長 石田由紀子
【主な成果】 (1) 京都周辺出土の考古遺物に関連する調査研究として、6年度から新たに京都市内で出土した平安宮や平安京の瓦窯から出土した瓦磚類の一括資料(寄託品)を取り上げ、出土量の把握、部位や出土場所の特定など基礎的な整理作業を進めた。これらの資料はプラスチックコンテナにして約200箱という膨大な量であり、来年度以降も継続して整理作業を進める。 (2) 京都府相楽郡和束町原山古墳出土品(京博蔵)に対し、『和束町史』編纂に関する協力・助言を行った。 (3) 当館に寄託されている京都の寺院から出土したキリシタン墓誌2点(いずれも寄託品)について、3次元計測やひかり拓本を実施した。これら成果物の一部は令和7年春の特別展「日本、美のるつば—異文化交流の軌跡—」の図録に掲載する予定である。			
			
キリシタン墓誌のひかり拓本			
【備考】 調査 (1) 整理作業および調査8日間 (調書作成、写真撮影) (2) 原山古墳出土品 写真撮影299カット (3) ひかり拓本2点、3次元計測(フルモデル)2点 成果の公開 (3)『日本、美のるつば—異文化交流の軌跡—』 7年4月刊行予定			

年度計画に対する総合的評価

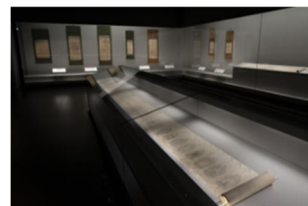
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度から新たに平安宮や平安京の瓦窯から出土した瓦磚類の整理作業に着手した。膨大な量の資料ではあるが、計画的に写真撮影や基礎的な整理作業を進めることができた。これらは平安宮・京の宮殿などの屋根に用いられた重要な考古資料であり、継続的に調査することで、近い将来、京都に関わる考古資料の展示にも大いに活用できると考えている。 また、ひかり拓本や三次元計測など、新しい技術を導入した調査を実施し、その成果の一部を特別展の図録に活用することができた。加えて、前年度に引き続き、地方自治体の町史編纂に関する協力を行った。 以上から、着実に事業は進捗していると考えている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料の整理を計画的に進め、その成果を展示などに活用することは、京都周辺出土の考古資料を多く所蔵する当館の重要な任務である。6年度は考古遺物の整理・調査を着実に進め、ひかり拓本など新たな技術の導入を試みることができた。7年度以降もこれらを計画的に進め、また地方自治体等との連携要請に対しても今後も積極的に応えてゆく。以上から、中期計画を順調に遂行できていると考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)所蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 特集展示・特別企画に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 (1) 豊臣秀次公 430 回忌 特集展示「豊臣秀次と瑞泉寺」(会期: 6 月 18 日～8 月 4 日) 瑞泉寺が所蔵する豊臣秀次一族に関わる作品を中心に、同寺の寺宝を公開。 (2) 修理完成記念 特別公開「重要文化財 縹糸威胴丸」(会期: 6 月 18 日～8 月 4 日) 館蔵品の重要文化財「縹糸威胴丸」の修理完了を記念した特別公開。 (3) 上田コレクション収蔵記念 特集展示「密教図像の美」(会期: 8 月 7 日～9 月 8 日) 故人の遺族より譲渡・寄贈いただいた密教図像コレクションを展示。 (4) 新春特集展示「巳づくしー干支を愛でるー」(会期: 7 年 1 月 2 日～2 月 2 日) 7 年の干支、巳(蛇)をテーマとした収蔵品による新春恒例の展示。 (5) 特集展示「新時代の山城鍛冶ー三品派と堀川派ー」(会期: 7 年 1 月 2 日～3 月 23 日) 慶長期(1596～1615)以降の刀剣、新刀期における山城鍛冶の双璧をなす三品派と堀川派の名品を展示。 (6) 特別公開「名刀再臨 ー時代を超える優品たちー」(会期: 7 年 1 月 2 日～3 月 23 日) 新たに寄贈・寄託を受けた刀剣 3 口の重要文化財を特別公開。 (7) 特集展示「雛まつりと人形」(会期: 7 年 2 月 15 日～3 月 23 日) 伝統的な年中行事である雛まつりを、人形を通して紹介する恒例の展示。	
【担当部課】 学芸部 【プロジェクト責任者】 企画室長 羽田聡	
【主な成果】 (1) 豊臣秀次 430 回忌に合わせ、瑞泉寺が所蔵する作品を通じて、秀次の生涯と瑞泉寺開創の経緯を再検証した。 (2) 修理が完了した重要文化財の甲冑を展示するとともに、修理の過程や課題等について発信した。 (3) 個人蒐集にかかる日本最大級の密教図像コレクション展示し、その歴史的価値と美術的価値について紹介した。 (4) 分かりやすい解説文の設置により、子どもから大人まで幅広い層が楽しめる入門的な展示とした。 (5) 山城鍛冶の代表である三品派と堀川派の作品を対比することで、新刀の知られざる魅力を紹介した。 (6) 長らく所在不明となっていた刀剣 3 口の公開を通じ、文化財の魅力と国立博物館の文化財保護活動を紹介した。 (7) 関西風の御殿雛飾りに至る雛人形の変遷を紹介し、各種雛人形の特徴を周知した。	
【備考】 (1) 42 件を展示。辞世和歌 20 幅の図版を掲載した図録を作成。 (2) 重要文化財 1 件を展示。甲冑とその修理について紹介したリーフレット(日・英)を作成。 (3) 23 件を展示。寄贈 4 件、譲渡 19 件で構成されるコレクションの全図版を掲載した図録を作成。 (4) 重要文化財 3 件を含む 18 件を展示。多言語による低年齢層向けワークシートを配付。 (5) 重要文化財 1 件、重要美術品 4 件を含む 35 件を展示。 (6) 重要文化財 3 件を展示。 (7) 57 件を展示。雛人形の変遷と京人形の諸相を紹介したリーフレットを作成。修理完成記念 特別公開「重要文化財 縹糸威胴丸」リーフレット(英)表紙 (1)から(7)のいずれも関連講座を実施。	



上田コレクション収蔵記念
特集展示「密教図像の美」
展示風景



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度計画では当初、4件の特集展示と1件の特別公開を予定していたが、刀剣に関わる(5)(6)の展示が加わり、計7件を開催した。あわせて、図録やリーフレットの作成、関連講座の開催を通じ、文化財、さらには国立博物館の役割について、国の内外を問わず、幅広い来館者への理解促進を図ることができたと考えるため、所期の目標を大きく上回る成果が得られていると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	作品の分野に特化したものから横断的に扱ったものまで、バランス良く開催し、多様な成果を提供し、多くの人に日本美術の魅力を発信することができた。特に、これらの開催時期には、来館者全体に占める外国人の割合が40%を越えており、増加するインバウンドに対応している。実績が中期計画策定時に想定していた開催件数(4から5件)を上回る点を加味し、所期の目標を大きく上回る成果が得られていると判断した。7年度も計画的に調査研究を進め、展示を魅力あるものとすべく努力する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 日本近代における中国書画の受容に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 館蔵の中国書画コレクションは、上野理一や須磨弥吉郎の旧蔵品など、日本近代に活躍した実業家の優れた蒐集の成果を継承するものが中核をなしている。明治期に航路が開かれて以降、直接人とモノが往来するようになった時期に行われたこれらの中国書画の蒐集は、江戸時代以前のものとは性格を異にしており、歴史・文化的な意義を多分に含んでいる。本事業では、館蔵の中国書画コレクションの形成や受容に関連する書簡や記録類など膨大な資料を整理し、目録化や図録の刊行によって基礎データとして活用できるようにすることで、これらの作品群の特色を生かした多角的なアプローチの可能性を拓き、将来の展覧会等での発信につなげていく。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 森橋なつみ
【主な成果】 ・長尾雨山旧蔵の中国書画関連資料の調査・撮影、目録との突合作業（2か月に1回程度、計4回） 当館に保管されている長尾雨山の関連資料群については、『長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究』（呉孟晋、科学研究費成果報告書、2018年3月）に大半が目録化されているが、膨大な量のため、遺漏がないか再確認する突合作業を行っている。また刊行後に見出された資料も多いため、追記作業を重ねている。6年度は表装された書画類の確認を終えた。 ・図版目録刊行に向けた須磨コレクション作品の目録整理・編集協議 当館が所蔵する須磨弥吉郎氏旧蔵の中国書画を中心とした「須磨コレクション」は、1000余件の規模を誇り、全体像に迫る情報公開のため、図版目録の出版を目指して準備を進めている。6年度は目録掲載用の画像を整理し、必要に応じて撮影を行った。また、図版目録の構成について調査協力者の呉孟晋氏（京都大学）と協議を重ねた。			
【備考】			



長尾雨山旧蔵 碑石拓本及び雨山款記

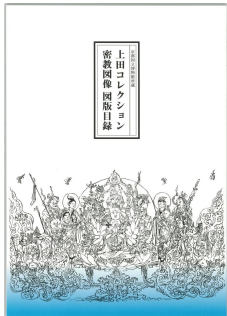
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	長尾雨山旧蔵の中国絵画関連資料については、5年度までは書簡類、文房具を中心してきたが6年度は表装された書画を中心に旧目録との突き合わせ、約100件の確認を終えた。雨山資料の調査については5年度より回数が減ったが、整理対象としていた資料の確認をほぼ完了できた。また、須磨コレクションの図版目録については掲載予定の画像の60%程度まで整理を進め、着実な進捗があったと言える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	長尾雨山については、6年度中に専論の単著の刊行や展覧会開催など、ますます関心の高まりを見せており、外部からの要望に対しては個別の調査対応などで協力を行い、資料の活用や情報公開に努めた。さらに、6年度までの作業で書簡、文房具、書画類については確認ができたので、7年度は公開に向けた作業を行う。また、須磨コレクションについても残りの画像の整理と目録に掲載する情報を整え、出版に向けた準備を進める。いずれの調査研究も一定の進捗と見通しを得ることができたと言えるため、B評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ 書跡及び絵画の伝来と散逸に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 ある作品が生み出されてから、今に到るまでにたどった歴史を考えるに当たり、「伝来」と「散逸」は「誰が所蔵していたのか」「どのように受容されてきたのか」といった、それぞれに固有の情報と繋がるため、重要なキーワードとなる。これらについて、作品及び附属品、あるいは関連資料により得ることのできる知見から、書跡及び絵画のアーカイブ充実を図り、今後の調査研究活動に供する。あわせて、成果を展示、講演や刊行など、博物館における関連事業へと還元する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	企画室長兼美術室長 羽田聡
【主な成果】 (1)調査は5回実施し、重要文化財「四十二章経 蘭溪道隆筆」や「大悲心陀羅尼并四十二臂図像 紙背久安五年具注曆」(以上、当館)、国宝「禅院額字并牌字」や国宝「山水図 李唐筆」(以上、寄託品)など、書跡と絵画の作品20件に及んだ。 (2)調査作品のうち密教図像群は、個人としては日本最大級のコレクションを形成した蒐集家の遺族から譲渡・寄贈されたものである。当館への収蔵前は公開の機会がほとんどなかったことに鑑み、展示に併せて図録を作成するため、詳細なデジタルデータを撮影した。 (3)こうした作品調査と並行して、中国から日本にもたらされた文物＝唐物のうち、特に絵画(唐絵)の価値観変容に関する文献学的なアプローチを行い、資料集や自治体史など活字化されている古文書や古記録から、これらに関する記述を収集し、その一部を口頭で発表した。 (4)調査を通して得られた知見を公開する手段として、以上のような展示・発表・刊行を行ってきたが、6年度は密教図像コレクションに関する特集展示を行ったため、特に仏画分野で顕著な成果を上げることができた。	
  「墨蹟―禅僧の書」展示風景 『密教図像図版目録』	
【備考】 ・調査回数 5回20件 撮影コマ数 約150カット ・成果の公開(展示) 上田コレクション収蔵記念特集展示「密教図像の美」(8月7日～9月8日) 名品ギャラリー「墨蹟―禅僧の書」(7年1月2日～2月9日) ・成果の公開(発表) 羽田聡「戦国の世と曲直瀬道三」(京都国立博物館夏季講座、7月26日) 大原嘉豊「上田コレクションの密教図像の価値」(京都国立博物館土曜講座、8月24日) ・成果の公開(刊行) 図録『上田コレクション密教図像図版目録』(京都国立博物館、8月)	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査対象とした作品で1件の中に大量の古文書が含まれる作品はなかったため、その分、調査件数は増加している。ただし、プロジェクトの性格上、単純に数値のみで判断はできず、他の要素、すなわち博物館における関連事業への還元については、展示・発表・刊行の全てにおいて、これまでと同等の成果を得ており、所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品を中心に据えた諸活動を行う博物館にあって、これらに関わる情報を充実させていくことは、文化財の継承にも繋がるため、根幹に位置する重要な作業であるが、時間を要する。中期計画4年目となる6年度も、着実に、そして多面的な成果の発信ができているため、所期の目標を達成していると判断した。7年度も引き続き、国立博物館の強みを活かした横断的な成果を提示できるよう努める。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 愛知県立芸術大学が進める当館蔵普賢菩薩像・当館蔵春日鹿曼荼羅の模写制作のため、各作品の原本熟覧及び手板色合わせ等の調査をそれぞれ2回ずつ実施した。 (2) 東京藝術大学が進める信貴山縁起絵巻模写制作のため、同絵巻（延喜加持巻・尼公巻）の原本熟覧及び手板色合わせ調査を2度実施した。同模写制作にあたっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－光学調査編－』『同報告書－研究・資料編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。 (3) 広島市立大学が進める当館蔵大道一以像の模写制作のため、同作品の原本熟覧及び手板色合わせを実施した。 (4) 京都市立芸術大学が進める当館蔵普賢菩薩十羅刹女像の模写制作のため、同作品の原本熟覧及び手板色合わせを実施した。			
			
		京都市立芸術大学による当館蔵普賢十羅刹女像の復元模写制作 (12月18日)	
【備考】 調査回数：7回（愛知県立芸術大学4月17日・5月31日・9月27日、東京藝術大学5月27日・9月26日、広島市立大学9月18日、京都市立芸術大学12月18日） 調査作品数：5件（当館蔵普賢菩薩像1幅、当館蔵春日鹿曼荼羅1幅、信貴山縁起絵巻（延喜加持巻・尼公巻）2巻、当館蔵大道一以像、当館蔵普賢十羅刹女像）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	愛知県立芸術大学・東京藝術大学・広島市立大学・京都市立芸術大学による復元模写制作のため、当館の所蔵品・寄託品の熟覧・色合わせ等の作品調査を積極的に受け入れ、当館及び東京文化財研究所の光学機器を用いた顔料・料絹の調査データを提供した。その結果、当館収蔵の仏画作品に関する復元模写制作の精度を飛躍的に向上することが可能となり、模写制作を通じて得られた当該文化財の顔料・基底材等の知見を蓄積することができたことから、左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期計画の4年目として、精度の高い光学的調査・熟覧の成果に基づいて彩色に用いられる顔料や料絹等の基底材に関する復元的考察を加え、その成果を芸術系大学が進める復元模写制作に反映するという目標を達成することができた。以上のような成果を蓄積していくことは、絵画作品を中心とする文化財の素材研究にも大きく寄与するものであり、中期計画に沿った事業として順調に推進できたことから、左記の評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 古代・中世の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 我が国には、寺院を中心に古代・中世の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、仏教学以外の分野での利活用は低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代・中世の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の蓄積と提示を目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長 斎木涼子
【主な成果】 (1) 写経等の調査 ・当館文化財保存修理所に修理寄託されている金峯山寺所蔵の紺紙金字経について、所蔵者・文化庁担当者とともに、修理中の料紙の解体・復元により新たに認識された奥書の文字及び表紙見返し絵を確認し、また今後の修理方針などについて検討、提案した (9月9日、10月22日)。 ・達中寺(奈良県)所蔵の平安時代の古写経(大般若経)について、現地で調査を行った (11月1日)。その後の検討により、調査対象の写経は、8年度の特別展において展示される予定となった。 ・薬師寺所蔵の経巻(寄託品)について、所蔵者及び学識者とともに調査を行い、書写年代や素材などについて検討を行った (11月29日)。成果は今後、所蔵者発行の文化財目録等に反映される予定である。			
			
		中寺における調査の様子	
(2) 聖教の調査 ・仁和寺聖教調査(文化庁主宰)に、職員2名を派遣した(7月30日、8月1日、2日)。 ・勧修寺所蔵の聖教(寄託品)について、文化庁書跡担当者とともに調査を行った(10月30日)。 ・園城寺所蔵の智証大師関係文書典籍(寄託品)の保存修理事業が進んでおり、修理作業の進む文書等を、智証大師関係文書典籍保存活用専門委員会の他委員とともに、修理工房で実見し、修理過程で得られた新知見を共有した(12月2日)。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寄託品や、当館文化財保存修理所修理寄託品を中心に、古代・中世の写経・聖教の調査を着実に実施できた。外部識者を交えての調査も機会を捉えて実施し、件数としては例年並みであったが、上に記したとおり新たな知見や、今後の修理、展示の方向性を検討する機会が得られた。また、所蔵者への調査結果や所見の提示を行うことも実行できた。 館外に所在する文化財の調査についても、展覧会への出陳などにつながっており、着実に成果を上げることができたため、B評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度においても、館内及び館外の活動を通じ、文化財の調査と研究を着実に実施することができた。研究成果は展覧会の作品解説や図録をはじめとする館の出版物のほか、新聞・雑誌等の外部機関の発行人への寄稿など、様々な形で発信している。このことから、中期計画で定めた、調査・研究成果の展覧事業への反映も、順調に実施できていると言える。特に6年度は、奈良県内に伝来する平安時代の紺紙金字経について調査を進め、今後継続的に研究を進めることで、展覧会などを通じその成果を報告する見込みである。写経と聖教を数多く所蔵する研究機関として、学術的、また教育普及に寄与できる情報を提供し続けるため、今後も地道な調査活動を継続していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関、社寺等が所蔵する作品にも及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館のある奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	工芸考古室 主任研究員 三本 周作
【主な成果】 (1) 館蔵品の調査 ・「伎楽復元衣装」(収蔵品番号 673～676、685～687、697～699、716) について、5 年度に引き続き東京国立博物館名誉館員・沢田むつ代氏(染織史／当館客員研究員)の指導を得て調査を実施した。6 年度で全点の調査を終えた。 ・「塔鉢形合子」(収蔵品番号 984)、「金銅羯磨」(収蔵品番号 1081) の調査を実施し、材質や構造についての知見を得た。成果は6 年度の名品展にて紹介した。 ・大阪市立美術館・菊地泰子氏(漆工史)と協同で、「円机」(収蔵品番号 983) の調査を実施し、構造や技法についての知見を得た。成果は今後の名品展にて紹介する予定である。 (2) 寄託品の調査 ・成城大学准教授・安永拓世氏(絵画・工芸史)と協同で、「桐蒔絵手箱及び内容品(古神宝類のうち)」(和歌山・熊野速玉大社蔵) の調査を実施し、構造や技法についての知見を得た。調査成果は当館夏季講座(8 月)における同氏の講演で紹介された。今後も、7 年度に予定されている当館特別展「超国宝」などにおいて紹介する。 ・「金銅火焰宝珠形舍利容器」(奈良・宝山寺) 等、寄託品の近世の舍利容器 3 件の調査を実施し、材質、構造、技法についての知見を得た。成果は6 年度の名品展において、「近世の舍利容器」の特集展示の形で紹介した。 ・「雲版」(徳島・浄智寺蔵) について蛍光エックス線調査を実施し、金属組成の分析を行った。成果は当館保存修理指導室・鳥越室長を中心として日本文化財科学会第 41 回大会(7 月)において紹介された。また6 年度の名品展においても紹介した。 (3) 展覧会への出陳にかかる調査 ・特別展「空海 KŪKAI」に出陳された「金銅密教法具」(京都・教王護国寺(東寺)蔵) 等の調査を実施し、材質、構造、技法についての知見を得た。成果は一般社団法人マンガラプロジェクト主催シンポジウム「密教の源流」(5 月) 及び「奈良国立博物館だより」130 号(7 月) 及び6 年度のサンデートークにおいて紹介した。 ・和泉市久保惣記念美術館副館長・橋詰文之氏(金工史／当館客員研究員) とともに、特別陳列「泉屋博古館の名宝」に出陳された「銀象嵌仙蓋形水瓶」の調査を実施し、材質、構造、技法についての知見を得た。成果は同展の図録にて紹介した。 ・特別展「超国宝」に出陳予定の「古神宝」(奈良・薬師寺蔵) の調査を実施し、材質、構造、技法についての知見を得た。成果は同展の図録にて紹介する予定である。 (4) 海外での調査 ・インドネシア・ジョグジャカルタにおいてボロブドゥールを中心とした仏教遺跡の調査を実施し、石彫像の表現様式や技法等についての知見を得た。成果は6 年度のサンデートークで紹介した。 ・科研基盤研究(C)「在米の仏像と仏具およびアーカイブ調査-寺宝の流出と古美術商、収集家の関係とその実態」(研究代表者：多摩美術大学 木下京子氏) の一環として、アメリカ・シカゴ美術館及び国立アジア美術館において、在外の日本仏教工芸作品の調査を実施した。 (5) その他 ・和泉市久保惣記念美術館副館長・橋詰文之氏(金工史・当館客員研究員) とともに、6 年度購入候補作品 2 件の調査を実施し、材質、構造、技法についての知見を得た。この成果により、本 2 件の評価が定まり、6 年度での購入が実現した。 ・岐阜県関市が主催する市内寺院の文化財調査に加わり、梵鐘、懸仏等の仏教工芸品の調査を実施し、材質、構造、技法等についての知見を得た。 ・宮内庁正倉院事務所主催による、上代の筵を対象とした特別調査に調査員として参加し、材質、構造、技法等についての知見を得た。	
【備考】	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・6年度は、館蔵・寄託品を調査する機会を複数回設け、個々の作品の材質、構造、技法、表現様式についての知見を蓄積することができた。これらの作品を管理し、その情報の発信源となる当館として、作品の基礎情報の整理はもっとも重要な作業であり、この点で一定の成果を上げることができた。 ・6年度は、展覧会の出陳作品や県外寺院の宝物を調査する機会にも比較的恵まれ、その成果を展覧会図録や会場パネル、講演等を通じて発信することにも力を注ぐことができた。従来、一般にあまり知られていなかった作品も多く含まれており、その紹介の機会として有意義であった。 ・在外の文化財調査の機会も持つことができ、作品に関する知見を蓄積できたとともに、海外研究者との交流が深められたことも大きな成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画では、収蔵品をはじめとした文化財の基礎的・総合的な調査研究とその発信に重点が据えられている。その4年目である6年度も、引き続き館蔵・寄託品の調査を実施して基礎データの精度を上げるとともに、成果の発信も強化することができた。 また、これまでほとんど紹介されてこなかった作品についても、調査成果を踏まえた展示を通じ、発信できたことは、館蔵・寄託品の活用という観点から大きな前進であった。協同調査を通じて、国内外の研究者との交流も一層強化できた。 以上の点から、中期計画を着実に実行できていると判断し、B評価を付した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 寺院出土品の調査研究		
【事業概要】 寺院出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 中川あや
【主な成果】 (1)館蔵品・寄託品等の調査 ・滋賀県南滋賀廃寺出土人面鬼瓦に関して製作技法の確認、類品の調査を行い、7年度に実施予定の修理に必要な情報を収集した。 ・奈良県竹林寺境内の忍性墓出土品（文化庁蔵）について、調査、写真撮影を実施した。 ・法隆寺賢聖院出土品（法隆寺蔵・昭和40年代調査品）の基礎情報を収集し、整理方針の検討を行った。 ・重要文化財元興寺塔跡土壇出土品（元興寺蔵）、中宮寺塔心礎上面出土品（中宮寺蔵）について、外部識者ととともに調査を行った。成果は6年度公表予定である。 ・寺院関連作品として、火葬墓出土蔵骨器、墓誌の調査を行い、蔵骨器については名品展（6年12月7日～7年1月13日、2月8日～3月16日）において展示し、成果を公表した。 (2)展覧会における出品候補作品の調査 ・7年度の特別展「超 国宝」の準備として、東大寺金堂鎮壇具、興福寺金堂鎮壇具、飛鳥寺心礎納置舍利容器及び荘厳具、崇福寺心礎納置舍利容器及び荘厳具、鞍馬寺経塚遺物の調査を行った。成果は特別展図録上で公表予定である。 (3)他機関所蔵作品の調査 ・鳥取県大御堂廃寺出土品について調査を行い、周辺寺院の出土品との比較の上で得られた新知見について成果を公表した。			
【備考】 ・中川あや「大御堂廃寺をめぐる祈りの世界」『大御堂廃寺 仏教の華ひらく はじまりの寺』展覧会図録 倉吉博物館 ・中川あや「大御堂廃寺をめぐる祈りの世界」大御堂廃寺展記念講演会第2回（6年9月8日）			



蔵骨器の展示公開



蔵骨器の展示公開

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館における調査研究は仏教美術を軸としており、考古部門では多様な寺院出土品に関して調査・研究を進めることができた。当館出土品や寄託品にとどまることなく、展覧会における出品候補作品、他機関所蔵作品についても積極的に、また、出土品の時代も飛鳥時代～鎌倉時代にまで広範囲に調査を行った。まとめた成果については、展示、展覧会図録、紀要等で迅速に公表を行うことができたため、B評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、仏教美術の中軸とも言える寺院出土品の調査研究を積極的に行った。また、合わせて成果の公表も行うことができ、計画は着実に実行できている。さらに、5年度までとは異なる新たな調査に複数件着手ができたことも評価できる。以上の理由から、中期計画の4年目として、当初の目標を達成していると判断し、B評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1)
【事業概要】 覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品の中から、南都地域（奈良市及びその周辺地域）伝来又は南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線CTスキャン調査を通じ、データの収集・蓄積を行う。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	美術室長 岩井 共二
【主な成果】 (1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記の通り。 (2) 調査を通じて日本古代から中世までの彫刻に関する構造・技法について、X線CTスキャン調査やファイバースコープなど最新光学機器を駆使することによって、像内銘文の発見や表面観察では判定できない構造など、従来知り得なかった学術的知見を得ることができた。 (3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。一部については、6年度及び7年度の刊行物に発表する。 【作品名】 安祥寺五智如来（阿闍・宝生）4/15/中宮寺菩薩半跏像（4/16）/香雪美術館地藏菩薩立像（4/19）/安祥寺五智如来（阿弥陀・不空成就）（4/22）/館蔵阿弥陀如来坐像（4/22）/香雪美術館阿弥陀如来立像（4/24）/安祥寺五智如来（大日）（5/7）/金剛峯寺諸尊仏龕（5/13）/普門院釈迦如来及諸尊像（5/13）/玉龍寺女神坐像（5/20）/元興寺弘法大師坐像（5/20）/金剛峯寺大日如来坐像（5/20）/長弓寺地藏菩薩立像（5/23）/安倍文殊院文殊五尊像（5/24）（5/31）/奈良市個人蔵天部立像（5/29）/本山寺宇賀神像（6/17）/館蔵増長天立像・多聞天立像（7/2）（7/4）/（7/11）/（7/12）/新収蔵品聖徳太子二歳像（8/1）/法華寺十一面観音立像納入品（8/1）/新長谷寺二天立像（8/7）/新長谷寺十一面観音像（8/8）/元興寺八雷神面（8/24）/吉水神社神像群（9/27）/興福寺弥勒仏坐像（10/29）/天理参考館乾漆伎楽面（11/6）/海住山寺僧形坐像（11/7）/高德院地藏菩薩像内納入品（11/7）/文化庁伎楽面（12/9）/個人蔵伎楽面（12/9）/東大寺伎楽面6面（12/9）/霊山寺十一面観音立像（12/3）/館蔵不動明王二童子立像（12/3）/林小路町自治会弥勒菩薩立像（12/3）/深大寺慈恵大師坐像（12/11）/弘仁寺虚空菩薩立像（12/18-20）/長泉寺阿弥陀如来立像（2/18）/個人蔵金剛夜叉明王立像（3/18）/法住寺不動明王坐像（3/25）	
【備考】 新規撮影された静止画像やX線CTスキャン画像は、特別展「奈良国立博物館開館130年記念特別展 超 国宝一祈りのかがやき」（7年4月19日～6月15日）をはじめとする会場の展示解説や図録、研究紀要への掲載、修理事業のための状態把握、今後の収集候補作品調査、次期展覧会及び写真提供への対応、学術研究の進展など諸方面に寄与するものである。	



館蔵増長天立像 X線CT調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	6年度も実測、撮影、3D計測、X線CTスキャンなど多岐にわたる方法で調査を行い、6年度及び7年度に開催する特別展の展示解説等に活用できる、貴重な資料を得ることができた。また、文化財の安全な活用に資する成果も多分に含んでおり、7年度以降の特別展、特別陳列のみならず、講座や報告書等にも反映させることができる。特に、撮影写真は、7年度開催の特別展「超 国宝」のポスター等の広報物にも広く活用することができた。 さらに、調査した作品のうち、奈良市内の弘仁寺虚空菩薩立像は、これまで外観からの調査では補修箇所を全容を解明できなかったが、X線CTスキャン調査により、当初部分と補修箇所が明らかになり、南都地域文化財の解明に大きく貢献できた。この他にも、各像の詳細な調査を実施し、データを収集及び蓄積することによって、多大な研究成果が得られた。以上の実績により、Aと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	6年度も5年度に引き続き、奈良市域を中核とする南都に伝来又は南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、X線CT等の光学的修法による調査を行い、データの収集・蓄積に十二分の成果を上げることができた。また、その中でも、弘仁寺虚空蔵菩薩像について、これまで未知の状態だった構造・補修箇所を明らかにすることができた点は、高く評価できる。このように中期計画の4年目として、研究成果の展示・公表・蓄積に取り組むことができただけでなく、新たな知見も得ることができたことから、所期の目標を大きく上回る成果を上げることができたと判断し、A評価とした。7年度も例年同様のペースで調査・撮影を進めつつ、新たな研究成果を発表できるよう努めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア X線CTスキャナ等による文化財の構造や製作技法に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 本事業では、X線CTスキャナ及び3Dデジタイザ等を使用した調査によって各種有形文化財の構造及び製作技法を明らかにすること、並びに得られた成果を展覧事業及び教育普及活動に活用することを目的とする。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1)「銭弘俣八万四千塔」の科学調査 10世紀に多数製作された「銭弘俣八万四千塔」のうち、福岡・誓願寺所蔵の作品について、3Dデジタイザ、X線CTスキャナ、蛍光X線分析装置による調査を行った。銭弘俣塔は型を用いて製作されている一方、使用された型は複数種類あることが分かっている。得られた調査結果を指標とし、他の作品の構造や成分と比較することで、銭弘俣塔の製作状況を明らかにしていく予定である。 (2)「菊の白露蒔絵調度」の構造調査 特別公開に伴い借用した徳川美術館所蔵の「菊の白露蒔絵調度」のうち文台、香盆、「菊折枝蒔絵調度」のうち元結箱、大角赤手箱、鏡台について、所蔵者との共同研究の一環としてX線CTスキャンを実施した。その結果、文台に関しては、天板は2枚接（はぎ）で、両側に台形の端喰（はしばみ）を入れていること等、各作品の木地構造や制作技法に関わる知見が得られた。 (3) その他 上記の他、阿弥陀如来坐像、五銖銭鑄型等の借用品のX線CTスキャンにより、作品の状態確認、構造調査、納入品の調査を行った。また、上記銭弘俣塔の3Dデータを元に、3Dプリンタを用いてレプリカを出力した。	
【備考】 ・X線CT調査件数57件、調査回数116回 ・3Dデジタイザ調査件数20件、調査回数63回 ＜論文・学会発表等＞ ・渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち櫛箱、小角赤手箱、手箱（胡蝶蒔絵）の木地構造および制作技法のX線CT調査」日本文化財科学会第41回大会、東京（7月） ・大西智洋、後藤里架、渡辺祐基、和泉田絢子、志賀智史、デ・ルカ・レンゾ、宮田和夫「日本二十六聖人記念館所蔵『日傘』の材質・構造調査と製作地の推定」日本文化財科学会第41回大会、東京（7月） ・折山桂子、田中麻美、志賀智史、和泉田絢子、渡辺祐基「福岡・誓願寺所蔵銭弘俣八万四千塔 調査報告」紀要『東風西声』20号、154(85)-146(93)（7年3月） ・川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について(5) 化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髻箱）」紀要『東風西声』20号、144(95)-131(108)（7年3月）	



銭弘俣八万四千塔のCT調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は、X線CT及び3Dデジタイザを合わせてのべ77件の文化財等の調査を実施し、保存状態及び製作技法に関する情報を得ることができた。得られた成果は、図録や紀要への掲載及び学会発表等を通じて公表し、また、レプリカの作成によって展覧事業にも活用した。また、6年度は、これまで故障により使用できなかったイメージングプレート画像読取装置を更新したことで、X線透過撮影（ラジオグラフィ）による調査も実施可能とした。以上から、年度計画を予定通り遂行したと判断し、B判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画4年目である6年度は、文化交流展示に伴う借用品を中心に、各種文化財の構造及び制作技法に関わる調査を推進した。また、得られた成果の公表及び展示への活用にも努めた。さらに、X線透過撮影も再稼働可能となったことから、7年度も各種分析装置を使用し、調査を継続する。また、7年度は中期目標最終年度であることから、展示・教育普及事業、学会発表、論文投稿等を通じた成果の公表も重点的に行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 特集展示「さわって体験！本物のひみつ」に関する調査研究		
【事業概要】 特集展示「さわって体験！本物のひみつ」は4年間開催してきた体験型展示で、様々な障がいを持つ方々にも楽しんでいただくことを目指すものである。6年度は規模を拡大しての実施であったことから、会場設計や演示具、体験の方法や安全面について調査研究を行って実施した。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 齋部麻矢
【主な成果】 ・体験を楽しむ仕掛けを改良するため、障がいを持つ当事者の方々への聞き取りや、各種ミュージアム及び文化施設の体験展示を調査した。また今回は夏休み期間中でもあり、子どもたちが入りやすい展示空間の形成にも配慮した。 ・本物の文化財と体験作品を並べて展示し、点字付き題箋や手話動画、ナビレンスによる解説、触知図の設置、車いすが入りかつ低い展示台を設置するとともに、車いすや白杖の動きに支障が無いよう、十分な空間を取って移動、体験できることを目指した。また入室しやすい雰囲気と危険回避のため展示室の照明を最も明るくし、壁も明るい色で統一するとともに、「文化財のひみつ」をイラストによるクイズ形式で掲示し、「楽しくおしゃべりしながら体験できる展示」を構成した。また広報用に点字付きチラシや触察図なども配布し、ウェブサイト到手話動画を公開した。 ・5年度に東京国立博物館が制作した螺鈿の触察ツールを借用し、体験の幅を広げるとともに、大野城心のふるさと館の体験展示と連携したスタンプラリーを実施した。 ・視覚障がい者に展示を楽しんでいただく対話型鑑賞会を開催して好評を得た。また、新たな体験作品の開発や体験展示の常設などの要望があり、今後の検討課題とした。7年度以降の実施に当たっては、さらに当事者の意見を聴きながら他施設との連携も視野に内容を充実していきたい。			
【備考】 ・特集展示「さわって体験！本物のひみつ 2024」：7月17日～10月14日 於文化交流展示室第9室 ・体験コーナー：8コーナー（レプリカ、触察ツール、実物など） ・体験者数：約26,000人（手袋消耗数から換算）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	通常「観覧」することが困難な視覚障がい者に文化財を身近に感じてもらうとともに、広い会場で開催したことで車椅子使用者をはじめ、障がいがある人もない人も誰もが気兼ねなく楽め、好評を得た。また新たに試みたクイズやイラストによって子どもや外国人も能動的に楽しめ、文化財への理解と興味を深めることができたことなど、年度計画を大きく上回る成果を上げていると判断し、左記の評定とした。 体験作品の常設展示については今後の課題として館内で検討を進めるとともに、新たなツールや展示手法、連携施設の模索については7年度の展示に向けて引き続き調査研究を行う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、中期計画に依拠しつつ、レプリカや再現文化財、本物で来館者が能動的に体験する手法を調査研究し、文化財の教育普及活動に資する展示とすることができた。来館者の評価も良く、障がいを持つ方々の来館も多かった。また県内博物館との連携事業によって相乗効果があり、子どもや家族連れ、外国人にも興味を持ってもらうことができた。以上の成果から、中期計画を大きく上回る成果と評価し、左記の判定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 特集展示「人吉球磨の玉手箱」に関する調査研究		
【事業概要】 九州国立博物館では、九州の様々な地域特有の歴史と文化を紹介する特集展示を開催している。6年度は、日本遺産にも認定されている人吉・球磨地域の文化財を展示し、その特有の歴史を紹介するとともに、令和2年の豪雨災害からの復興を支援することも目的とした（会期：10月22日～12月15日）。開催に先立ち、熊本県教育委員会及び人吉球磨地域の各市町村教育委員会や、所在する寺社の協力を得て、各種文化財の調査を実施し、その研究成果を図録や講座等で公表した。			
【担当部課】		展示課	【プロジェクト責任者】 課長 齋部麻矢
【主な成果】 ・今回の展示では、幅広い分野の文化財を旧石器時代から現代まで紹介すること、また地域の全市町村の文化財を展示すること、被災から復活した文化財を紹介することを柱とし、異なる専門分野からなる5人の研究員で展示作品を選定する体制を作った。4年から関係機関や寺社に開催主旨を説明、調査研究を依頼し同意を得た。 ・地元市町村と協議及び調査を行い、慶應義塾図書館所蔵の重要文化財「相良家文書」などを加え、最終的に60件の展示作品を選定した。所蔵者は非常に好意的で、積極的な協力を得た。 ・上記の調査の成果及び、これまでの調査成果に基づき図録の作成や講座を実施し、これには地元の文化財担当者も参加、地域の文化財愛護精神の機運を盛り上げるきっかけとした。 ・関連事業として、リレー講座2回（11月16日、11月30日、講師：九州国立博物館研究員3人、地元市町村担当者4人）、ミュージアムトーク（11月12日）を開催するとともに、「ウンスンカルタ体験イベント」（10月26日参加者15人）、「きゅーはくにくまモンがやってくる!」（11月17日 参加者70人）、「内村光良監督映画『夏空ダンス』無料上映会（株式会社FILM協力）」（11月24日 参加者40人、12月1日 参加者66人）、人吉球磨物産展（11月16日・17日）などのイベントを開催した。 ・YouTubeのkyuhaku channelでは、展示主旨を伝えるとともに、展示作品の解説を行い、人吉球磨の魅力を広く紹介した。 ・展示期間中は一般の来館者はもちろん、人吉球磨各市町村から団体の観覧があり、地元文化財の素晴らしさを改めて感じていただいた。			
【備考】			

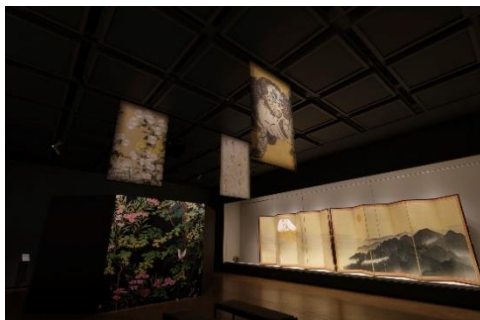
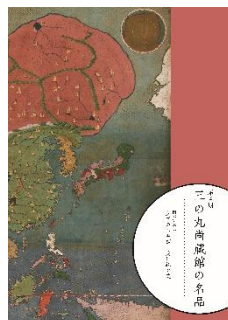
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、「相良氏の700年」の人吉球磨の歴史だけでなく、3万年前～現代までの文化形成の様相を総合的に紹介する初めての試みであり、「隠れ里」だけではない交易の歴史や、特有の地形の中で育まれた独特の文化について紹介し、様々な分野の作品を展示することで多様な観覧者の興味を引くとともに、文化財の被災とその修理や復旧についての理解を深めることができた。また地元の文化財担当者が主体的に参加することで、最新の研究成果や地元ならではの情報を反映することができ、地域の文化財愛護の機運を高めることができた。以上のことから、年度計画を大きく上回る成果を上げていると判断し左記の評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、地域特有の作品を展示することで、九州の文化形成の一端を紹介し、歴史・伝統文化の理解促進に資する事業とすることができた。特に地元担当者や寺社との協力の元に調査研究をすることで、最新の研究成果を作品展示、図録、講座に反映することができた。人吉球磨地域の歴史を総合的かつ本格的に紹介する第一歩として、今後の地域の調査研究、文化財の活用・公開に反映することで、文化財愛護の精神を促進する契機になると考える。以上のことから、中期計画を大きく上回る成果を上げていると判断し、左記の判定とした。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称		開館記念展「皇室のみやび」に関する調査研究	
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館では6年度春から開館記念展「皇室のみやび」第4期「三の丸尚蔵館の名品」を開催する。本展では、収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】		学芸部	【プロジェクト責任者】学芸部長 建石 徹
【主な成果】 (1)調査の概要 当館には皇室に代々伝えられてきた美術工芸品が収蔵されている。なかでも明治時代以降に行われた献上による数々の美術工芸品が含まれていることが特徴である。これらの作品には日本美術として高く評価される名品が含まれており、近年国宝・重要文化財に指定された作品もあり、これらを改めて調査し、成果として発表した。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、展覧会「三の丸尚蔵館の名品」で展示した。会期は5月21日～6月23日、前後期の展示替により総件数14件26点を展示した。また、図録を刊行するとともに、代表的な作品を解説する「展示室de一品トーク」を開催した。 ・5月24日 《閑庭鳴鶴・九重ノ庭之図刺繍屏風》高島屋呉服店 小林彩子 ・5月28日 国宝《唐獅子図屏風》右隻：狩野永徳 左隻：狩野常信 上嶋悟史 ・6月7日 《朝陽霊峰》横山大観 田中純一郎			
			
展示室の様子		作品解説の様子	
			
		刊行した図録	
【備考】 担当：小林彩子、岡本隆志、上嶋悟史			

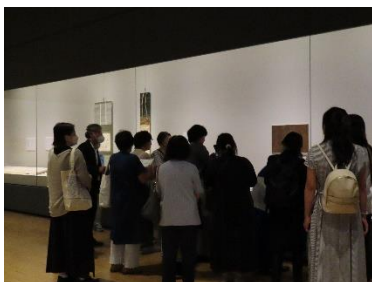
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	皇室に受け継がれた貴重な収蔵品を調査・研究し、それを開館記念展の展示・出版事業に活かすなど着実に成果をあげた。本企画では、開館記念展の最後を飾る企画として、新たに国宝・重要文化財に指定された収蔵品を改めて紹介した。多くの来館者を迎えた時宜を得た展覧会となった。当館の収蔵品の調査は重要なテーマであり、今後の展示公開のためにも継続的・積極的に調査を進めていく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	展覧会「いきもの賞玩」に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館では展覧会「いきもの賞玩」を開催する。本展では、収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石 徹
【主な成果】 (1)調査の概要 当館に皇室から代々伝えられてきた美術工芸品には、小さな生き物を表した工芸品や絵画、書跡などが数多く収蔵されている。また、諸外国との交流のなかで、各国の貴重な品々が収蔵されていることも当館の大きな特徴である。これらの収蔵品を調査し、子どもたちの夏休み期間に合わせて成果として発表した。調査にあたっては、①書跡・絵画、②工芸、③海外との交流とその国を表すもの、の三点に着目して進め、展覧会での章立てに発展させた。 特に研究成果も未発表で、これまでの展覧会でも未公開であった「磁石応用四季草虫図衝立」について研究を進め、その成果を本展で初公開した。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、展覧会「いきもの賞玩」で展示した。会期は7月9日～9月1日、前後期の展示替により初公開の収蔵品を含めて総件数52件を展示した。また、図録を刊行するとともに、代表的な作品を解説する「展示室 de 作品解説」を開催した。 そのほか、以下のとおり発表した。 ・「当時最先端の磁石 伝統と融合」（磁石応用四季草虫図衝立）井上真里奈 7月7日 読売新聞 ・「弾む筆彩る花鳥の表具」（和歌色紙 伝飛鳥井雅経筆）島谷弘幸 7月21日 毎日新聞 ・「雍人親王 海外の美術品に関心」（コリントス式アンフォリスコス）三島大暉 8月17日 読売新聞 ・「鍛錬がなした近衛家熙の美意識」（十二月花鳥和歌 近衛家熙筆）島谷弘幸 8月18日 毎日新聞			
			
展示室の様子		作品解説の様子	
			
			
		チラシ 刊行した図録	
【備考】 担当：清水緑、高梨真行、三島大暉、井上真里奈、野中愛理 ・閉館後に20名限定で研究員が展示を解説する特別鑑賞会を開催した。 7月26日（金）参加者19人／8月30日（金）参加者19人 ・展覧会期間中には、「いきもの賞玩」ワークシート「〇〇いたよ！」を無料配布した。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	夏休み期間に合わせ、子どもの来館者にもわかりやすい、収蔵品に描かれた生き物等に焦点を当てた企画とした。これまで公開されたことのない作品も多く調査し、初公開として紹介することができた。夏休みに合わせた子ども向けのワークシートと連動して分かりやすい解説や拡大した写真パネルを配置するなど工夫を凝らした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおり研究を推進し、展覧会で公開した。引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	展覧会「花鳥風月一水の情景・月の風景」に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館では展覧会「花鳥風月一水の情景・月の風景」を開催する。本展では、収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 (1)調査の概要 当館に皇室から代々伝えられてきた美術工芸品には、四季折々の自然の美しさを表す工芸品や絵画、書跡などが数多く収蔵されている。調査にあたっては収蔵品の中でも水と月が表現された作品を対象とし、秋の名月の季節に合わせてその成果として発表した。その中では活用履歴のない作品も多く含まれ、本展で初公開となったものもあり、研究成果の促進につながった。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、展覧会「花鳥風月一水の情景・月の風景」で展示した。会期は9月10日～10月20日、初公開の収蔵品を含めて総件数27件を展示した。また、図録を刊行するとともに、代表的な作品を解説する「展示室 de 作品解説」を開催した。 そのほか、以下のとおり発表した。 ・「変化する料紙と空間的センス」(安宅切本和漢朗詠集 伝源俊頼筆) 島谷弘幸 9月15日 毎日新聞 ・「制作21年 気品に満ちた「雪月花」」(「雪月花」上村松園) 野中愛理 10月6日 読売新聞 ・「目と手で磨いた格調美」(近江八景和歌 近衛家熙筆) 島谷弘幸 10月21日 毎日新聞			
			
展示室の様子		チラシ	
			
		刊行した図録	
【備考】 担当：清水緑、高梨真行、三島大暉、井上真里奈、野中愛理 ・閉館後に20名限定で研究員が展示を解説する特別鑑賞会を開催した。 9月27日(金) 参加者19人／10月18日(金) 参加者20人			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	水と月というテーマに関連する作品を対象に調査し、その中でも厳選した作品を紹介した。今回の調査によって《瀧山水蒔絵短冊箱》などの作品を初公開として紹介することができた。今後も展示公開のために継続的・積極的に調査を進めていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画とおり調査をすすめ、展覧会で公開した。 引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。 今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	展覧会「公家の書ー古筆・絵巻・古文書／皇室の美術振興ー日本近代の絵画・彫刻・工芸」に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館では展覧会「公家の書ー古筆・絵巻・古文書／皇室の美術振興ー日本近代の絵画・彫刻・工芸」を開催する。本展では、収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 (1)調査の概要 皇室から代々伝えられてきた当館の収蔵品には、皇室による伝統文化の継承や当代美術の振興を示す作品が多く収蔵されている。これらの収蔵品を調査し、成果として発表した。調査にあたっては、①平安時代から江戸時代までの公家によって書かれた書跡・書状・古文書、②明治時代から昭和時代にかけて皇室が美術に対する保護奨励のため買上とした絵画・彫刻・工芸に着目して進め、展覧会での章立てに発展させた。 また、手鑑類について、これまで紀要や収蔵品目録でまとめられた研究成果を展示情報などに活用して、本展で初公開した。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、展覧会「公家の書ー古筆・絵巻・古文書／皇室の美術振興ー日本近代の絵画・彫刻・工芸」で展示した。会期は10月29日～12月22日、前後期の展示替により初公開の収蔵品を含めて総件数38件を展示した。また、図録を刊行するとともに、代表的な作品を解説する「展示室 de 作品解説」を開催した。 そのほか、以下のとおり発表した。 ・「時を超え伝承 力強さと字形」(国宝「春日権現験記絵巻」第17一乗院良信筆) 島谷弘幸 11月18日 毎日新聞 ・「稲穂とスズメ 遊び心豊かに」(稲穂に群雀図花瓶 一対) 岡本隆志 12月1日 読売新聞 ・「全体のリズムと調和」(国宝「金沢本万葉集」) 島谷弘幸 10月21日 毎日新聞			
			
展示室の様子		チラシ	
			
		刊行した図録	
【備考】 企画：高梨真行、岡本隆志、田中純一郎、山田千穂、木村真美 ・閉館後に20名限定で研究員が展示を解説する特別鑑賞会を開催した。 11月29日(金) 参加者20人			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	宮内省買上以来、初公開となる太田喜二郎《並木道》をはじめ、これまで公開されたことのない作品も調査し、修理過程で得た成果等を含め展覧会で紹介した。図録ではコラムによる作品紹介も掲載し、展示には料紙の種類や原料についての解説を加えるなど、より分かりやすい解説を工夫した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	展覧会「瑞祥のかたち」に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館では展覧会「瑞祥のかたち」を開催する。本展では、収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 (1)調査の概要 皇室から代々伝えられてきた当館の収蔵品には、皇室による伝統文化の継承や振興を示す作品が多く収蔵されている。これらの収蔵品を調査し、成果として発表した。調査にあたっては、①皇室伝来の書跡・絵画・工芸品の中で吉祥をモチーフにした収蔵品、②江戸時代から近代にかけて活躍した作家による日本美術の名品、に着目して進め、展覧会でのストーリーのある構成に発展させた。また、研究を進めた成果として9件の収蔵品を本展で初公開した。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、展覧会「瑞祥のかたち」で展示した。会期は7年1月4日～3月2日、前後期の展示替により初公開の収蔵品を含めて総件数46件を展示した。また、コラム5本を含む図録を刊行した。 そのほか、以下のとおり発表した。 ・「鼈甲細工 皇室と長崎結ぶ船」(宝船「長崎丸」江崎栄造)五味聖 1月5日 読売新聞 ・「長大な絵巻に色添える力量」(「小栗判官絵巻」巻8上)島谷弘幸 1月20日 毎日新聞 ・「臨機応変 井上馨の筆」(五言絶句「松上鶴」井上馨筆)島谷弘幸 2月17日 毎日新聞			
			
展示室の様子		チラシ	
			
		刊行した図録	
【備考】 担当：五味聖、小林彩子、上嶋悟史 ・ギャラリートークとして「展示室 de 作品解説」を開催した。1月10日参加者78人、2月7日参加者112人 ・閉館後に20名限定で研究員が展示を解説する特別鑑賞会を開催した。 7年1月31日 参加者19人、2月28日 参加者20人(定員20人) ・こども鑑賞会「はじめのいっぽ」 小学3～6年生を対象とし、展示・普及課の研究員が解説する「こども鑑賞会」を開催した。(定員8名) (1月13日7名/1月19日5名)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	皇室に受け継がれた貴重な収蔵品を調査・研究し、それを展示・出版事業に活かすなど着実に成果をあげた。これまで公開されたことのない作品も調査し初公開として紹介した。当館には、慶賀に関わる作品が多く収蔵されており、引き続き研究・公開を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館には、慶賀を題材とした作品が多く収蔵されており、引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	地方展開展に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。当館の収蔵品を用いた地方展開展を全国の美術館・博物館で開催しており、それらに合わせて収蔵品の調査研究を進め、これらの成果を公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 (1)調査の概要 皇室から代々伝えられてきた当館の収蔵品には、行幸に関する資料等、皇室と地方の関わりを示す地域ゆかりの文化財が多く収蔵されている。これらの収蔵品と各地方との関わり等を調査し、全国各地の美術館・博物館にて成果として発表した。令和6年度は、香川県、北海道、岐阜県、新潟県にゆかりのある収蔵品の調査を進め、展覧会の開催に発展させた。 (2)調査の成果 調査研究を進めた作品を精選し、以下の展覧会で成果を発表した。 ・香川県立ミュージアム「皇居三の丸尚蔵館名品選 美が結ぶ 皇室と香川」会期：4月20日～5月26日（担当：木村真美・清水緑・山田千穂・野中愛理） 中世から近代の絵画の名品、近代の工芸や彫刻から香川県をはじめとする四国にゆかりのある作品を中心に調査をすすめ、展覧会で公開した。図録の編集・執筆に協力し、講演会により研究成果を発表した。（4月20日 記念講演会 「日本の書の成立と楽しみ」島谷弘幸、5月11日「若冲花鳥画の魅力」朝賀浩） ・北海道近代美術館「皇居三の丸尚蔵館展 皇室の至宝 北海道ゆかりの名品」会期：9月21日～10月27日（担当：上嶋悟史・五味聖・木谷知香） 北海道と京都・江戸とのつながりを示す近世の名品や、北海道行幸啓にまつわる作品、北海道ゆかりの作家の作品などを北海道近代美術館の学芸員と協力し調査を進めた。特に、皇室や幕府と関わりを持った松前の絵師・蠣崎波響の作品をはじめ、近世絵画や近代の皇室技芸員による作品、北海道ゆかりの作家の作品を調査し、展覧会で発表した。また、図録の編集・執筆に協力し、講演会により研究成果を発表した。（9月21日「美が結ぶ―皇室と北海道」五味聖、10月12日「絵画がつかない人々―蠣崎波響を中心として」上嶋悟史） ・岐阜県美術館「清流の国ぎふ」文化祭 2024 皇居三の丸尚蔵館特別協力「PARALLEL MODE：山本芳翠―多彩なるヴィジュアル・イメージ」会期：9月27日～12月8日（担当：田中純一郎・加藤広樹・芳澤直之） 皇室と岐阜をつなぐ明治洋画のなかで、特に山本芳翠の作品の調査を進めた。収蔵品のうち《勾当内侍月詠之図》は、芳翠初期の最も重要な作品として調査をすすめ、本展で初公開となった。図録の編集・執筆に協力し、講演会により研究成果を発表した。（11月10日「山本芳翠と皇室、宮内省」田中純一郎） ・新潟県立美術館「皇室の名宝と新潟 一皇居三の丸尚蔵館収蔵品でたどる日本の技と美」会期：7年2月7日～3月16日（担当：細川晋太郎・清水緑） 近世絵画の名品をはじめ、近代の油彩画や日本画、工芸作品など約50件の調査を進め、展示に発展させた。また、明治天皇の北陸巡幸や新潟ゆかりの作家による絵画や工芸品など皇室と新潟の関わりに着目し、展示した。図録の編集・執筆にも協力し、講演会・作品解説会を開催した。（7年2月8日講演会 細川晋太郎、7年2月24日作品解説会 細川晋太郎）			
【備考】			



北海道での展示作業の様子



北海道での展示作業の様子

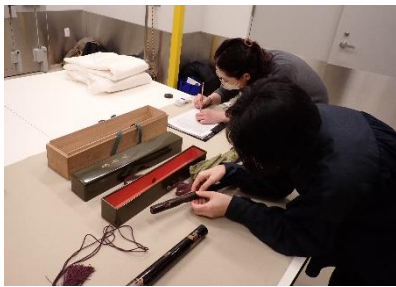
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では、工事期間中も多くの方々に収蔵品を公開するため、皇室文化への国民の理解の促進、地方文化の振興による地方創生、国内外への日本の美の発信の観点から積極的な地方展開を進めており、計画どおり研究・公開を進めた。当館の地域ゆかりの収蔵品の調査は重要なテーマであり、今後も継続的・積極的に調査を進めていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	収蔵品等の有形文化財に関する調査研究		
【事業概要】 当館の収蔵品に関する調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 概要：当館収蔵品に関する関係史料の外部調査等を進めた。今年度は、以下の施設で収蔵品に関連した調査を実施した。 ・香川県立ミュージアム（6月10日・11日）…国宝 詩懷紙 藤原佐理筆の調査 ・新潟市文書館（9月11日～13日）…当館収蔵写真の目録刊行に向けての比較調査 ・京都市京セラ美術館（9月12日・13日）…三代清風與平に関する作品京都市京セラ美術館に寄託された個人コレクションの調査 ・陽明文庫（10月8日）…近衛家熙筆「玉泉帖」及び「与本国使請共帰啓写」などの調査 ・株式会社川島織物セルコン（12月10日）…迎賓館室内装飾用美術染織の調査 ・東京国立博物館（11月14～15日・2月20～21日）…当館収蔵品に関連する同館所蔵楽器の調査 ・熊本県立美術館（11月25日～27日）…同館寄託富重写真館所蔵写真の調査 ・京都府個人宅（12月19日・20日）…中原哲泉関係図面・資料の調査 また、海外の王室コレクション及び当館の収蔵品と関連する日本美術等を有する美術館の収蔵品の調査を行った。			
			
当館収蔵品に関連する同館所蔵楽器の調査の様子 (東京国立博物館)		フランスでの調査の様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	皇室に受け継がれた貴重な収蔵品を調査・研究し、それを展示・出版事業に活かすなど着実に成果をあげた。個人の研究を推進する一方で、国内外の王室コレクションや収蔵品と関連がある作品を有する宮殿や美術館との交流と収蔵品管理や展示に関する意見交換、資料調査を推進した。当館の収蔵品の調査は重要なテーマであり、今後の展示公開のためにも継続的・積極的に調査を進めていく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	引き続き、収蔵品の調査を行い当館の収蔵品の価値を発信していく必要がある。今後も宮内庁や文化庁と協力し、収蔵品に関する研究の充実を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「法然と極楽浄土」に関する調査研究		
【事業概要】令和6年(2024)に浄土宗開宗850年を迎えることを記念し、開祖法然とその弟子にまつわる寺宝の数々を一挙に紹介する展覧会を開催した。本展覧会は、東京・京都・九州の3会場で開催したものであり、東京会場である当館ならではの特色を出すべく、関東における浄土宗関連作品の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課書跡・歴史室研究員 長倉絵梨子
【主な成果】			
(1)実施概要			
本展覧会は、浄土宗開宗850年を記念し開催したもので、全国の浄土宗寺院の協力を得て、開祖法然やその弟子たちゆかりの寺宝の数々、そして鎌倉時代に限らず江戸時代までの浄土宗史を紹介することができた。			
(2)主な成果			
本展覧会は、東京での開催ののち、京都国立博物館、九州国立博物館での巡回を予定したもので、3会場の地域の特色を出すため、本展覧会では、増上寺(東京都港区)所蔵の「三大蔵経」や「浄土宗諸法度」、祐天寺(東京都目黒区)所蔵の祐天筆「宝塔名号」、弘経寺(茨城県常総市)所蔵の「浄土三部経」など、関東の寺宝も展示した。特に増上寺所蔵の「三大蔵経」については、収納箱も併せて展示し、経典がどのような状態で収められ今に伝わっているのかを視覚的に紹介することができた。なお、東京では初公開となった国宝「綴織當麻曼陀羅」(奈良・當麻寺蔵)、修理後初公開となった国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図(早来迎)」など、前例のない見どころも出すことができた。			
			
展示会場①		展示会場②	
			
		展覧会ポスター	
【備考】			
会期：4月16日(火)～6月9日(日)(70日間) 総出品数：126件 会場：平成館特別展示室			
・ジュニアガイドの配布			
・記念講演会「知恩院蔵『早来迎』、修理で分かった名画の秘密」開催(5月10日)			
・記念講演会「会期後半にみてほしい 法然と極楽浄土展7つのポイント」開催(5月23日)			
・イベント「国宝「綴織當麻曼陀羅」絵解き」開催(4月21日)			
イベント「ハイヒールを履いた僧侶が語る『浄土宗の修行で学んだ、心が安心する教え』」開催(5月26日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会の開催にあたり、全国の浄土宗寺院の協力を得て、広範囲な調査を行うことができた。特に北関東における調査については、徳川家ゆかりの寺宝を見出すことで、幕府政策と浄土宗との関係について知見を得ることができた。単に鎌倉時代から江戸時代までの浄土宗史を辿るだけでなく、江戸幕府の政策に絡めて調査や展覧会を実施できたことは、従来の浄土宗関連の展覧会ではなかったことである。また、京都・九州と巡回する展覧会であることから、各地域の寺宝を視野にいれた調査をすることができ、日本における浄土宗の様相について重層的な知見を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会の開催に伴う寺宝の調査研究により、展覧会に先立つ事前調査の重要性が極めて大きいことが再確認された。また、所蔵寺院との対話の中から得られる知見も極めて重要であることが確認された。その結果を展覧会や図録等で反映するとともに、今後も中期計画に基づき調査研究を継続し、成果を紹介していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別企画「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」に関連する調査研究		
【事業概要】 特別企画「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」の開催を目的として、対象となる収蔵品について調査を行うとともに、古典作品と現代美術を併置する展示の事例研究を行う。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部上席研究員 鬼頭智美
【主な成果】 (1)実施概要 ・本企画は、鬼頭智美（同上）、品川欣也（学芸企画部企画課海外展室長）、荻堂正博（学芸企画部企画課デザイン室研究員）が担当し、現代美術家・内藤礼による空間作品の制作・公開に向けて、その作品空間で縄文時代の考古遺物を展示するための事前調査や展示具作成のための材料の検討を行った。また、主に海外の美術館・博物館で行われている古典作品（古美術）と現代美術作品とを併せて展示している事例について調査・研究を行った。 ・現代美術家の眼で選んだ考古遺物 7 件を作家の構想に合わせて展示できるよう、作品保存及び展示効果の面などから多角的に検討、重要文化財「足形付土製品」の 3D モデルを用いた展示具や免震装置の検討、さらに比較的長い展示期間に耐えうる展示環境の検証を行った。その結果に基づき考古遺物を普段より低い位置で自然光のもと安全に展示することができた。これらを含め記録集を作成した。記録集の内容は、当館研究情報アーカイブズで閲覧可能とした。 (2)主な内容 現代美術家が当館とその歴史・収蔵品と出会い向き合ったことで生まれたこの企画により、現代美術家の眼で収蔵品を選び提示することで、新たな見方、気づきを得てもらい、今までにない鑑賞体験を提供した。その結果、当館の従来の客層とは異なる方々にも東博を周知する機会となり、また利用者の層を拡大する成果となった。			
			
展示予定文化財調査（4月25日）		第2会場展示風景 撮影：畠山直哉	
【備考】 特別企画「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」（6月25日～9月23日）、同展図録出版（8月28日発行） 記念トークイベント（7月15日）、月例講演会「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」との出会い（8月17日） エルメス財団主催 大学生向けワークショップ（8月19日） ※エルメス財団は本企画特別協力			

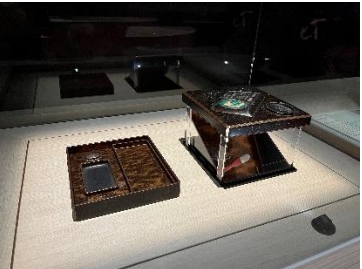
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の収蔵品調査を通じて美術家による考古遺物の新たな見方や解釈に触れることができたほか、作家の視点で考古遺物を選定、収蔵品活用の充実につながった。展示具開発にあたっては新たに3D撮影を実施、収蔵品の新たな画像データを得て、3Dモデルを活用し、適切なものを制作できた。また、時代の離れた文化財同士を組み合わせる展示の調査により、歴史的文化財をいかに現代の人とつなげるかという試みの実践に役立つこととなった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映できたことにより、中期計画を遂行できている。今後も収蔵品及びその活用事例の調査研究を継続しつつ、多角的な情報発信を心掛けたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	海外展「三国三色ー東アジアの漆器」に関連する調査研究		
【事業概要】 韓国・日本・中国の国立博物館 3 館による共同企画展覧会に係る当館所蔵漆工品の調査および展示			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室 福島修
【主な成果】 (1) 調査概要 ・本展では東アジア三国の漆文化を紹介するにあたり、その独自性を端的に見せるため、各国を代表する技法を中心に出品作品を検討した。韓国の螺鈿、日本の蒔絵、中国の彫漆がこれにあたる。日本の漆工はさらに諸外国との関係や茶の湯の流行、装身具の発達など歴史的に漆芸が特徴的な発展を示した事象をテーマに加え、選定にあたった。作品選定及び調査、輸送、点検、展示は福島修、猪熊兼樹が担当した。 (2) 調査の成果 ・本展第三部「日本の漆器」について、出品作品の点検、輸送、展示を行った。 ・本展に関連して出版された図録に章解説及び作品解説を執筆した。章解説は福島修、作品解説は福島修、猪熊兼樹が担当した。 ・本展会期中、9月6日(金)に会場の国立中央博物館（韓国）にて学術フォーラムが開催された。福島修が登壇し、研究発表を行った。			
			
【備考】 会場：国立中央博物館（韓国）常設展示室 1 階 特別展示室 会期：令和 6 年（2024）7 月 10 日(水)～9 月 22 日(日) 総展示件数：46 件 国別出品件数：韓国 16 件、日本 15 件、中国 15 件			

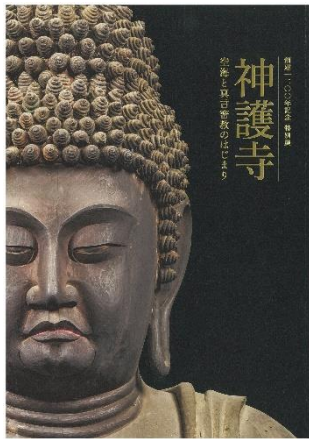
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東アジア三国は同じ種類の漆を使用する点でアジアにおける漆文化の中でも一つのまとまりを示している。一方でその漆の使用法には大きな視点の違いがあり、それが各作品の違いに結実している。本展における日本側の意図は、こうした三国の文化的な独自性を鮮明にしながら、その密な交流を通じた人々の関心や憧憬、文化的受容の足跡を示すことであった。たとえば「獅子牡丹堆起漆塗大香合」のような作品を展示することで、同じ空間に展示される中国の彫漆との深い関係が示される。同作の特殊な技法については前年度に行った調査を通じて明らかとなった。 本展は当館所蔵品だけでなく、韓国・中国の代表的な技法を用いた作品とともに展示することで、こうした研究成果をより効果的に普及する機会となった。この成果を踏まえ、今後は館蔵品調査を継続するとともに既知の技法の再検討とその文化的背景を考察したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展にかかる調査の過程で館蔵品の歴史的な位置づけがより明確化したとともに、会場において韓国・中国側の出品作と比較することで日本漆工の特質を韓国の観覧者に印象づけた。会場の点数制限のため十分な説得力を持ち得なかったテーマもあるが、総体として見れば、三国で独自の道を歩みつづ漆という素材を共有し、影響し合ってきた東アジアの漆文化のあり方の一端を示すことに成功した。7年度以降は継続調査を通じてこうした文化現象のより深い理解を目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 創建1200年記念特別展「神護寺—空海と真言密教のはじまり」に関する調査研究		
【事業概要】 6年夏に開催された創建1200年記念特別展「神護寺—空海と真言密教のはじまり」に関わる調査研究。本展は空海や真言密教とゆかりの深い、京都・神護寺の歴史を、神護寺所蔵作例を中心に紹介するものである。本事業では、展覧会に出品された主要な絵画作品および、江戸時代に制作された模写作品の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	教育普及室研究員 古川攝一
【主な成果】 (1)調査の概要 展覧会出品作品のうち、高雄曼荼羅の図像を鎌倉時代に写した「高雄曼荼羅図像」（東京国立博物館蔵）、江戸時代に制作された高雄曼荼羅の原寸大模本である「両界曼荼羅」（神護寺蔵）、中世やまと絵を代表する「山水屏風」（神護寺蔵）、「伝藤原光能像」（神護寺蔵）、「文覚上人像」（神護寺蔵）、このうち江戸時代の模本である「伝源頼朝像・伝平重盛像・伝藤原光能像模本」（東京国立博物館蔵）、大正時代に制作された「山水屏風模本」（東京国立博物館蔵）、「薬師如来立像」の調査、撮影を実施した。 (2)調査の成果 当館に所蔵される上記の江戸時代の模本を集中的に調査することができ、原本との比較検討の手がかりを得られた点は特筆される。すなわち、江戸時代における神護寺所蔵作例の評価、位置づけを考察する契機となった。成果の一端は、展覧会図録や、会期中に行われたシンポジウム、講演会で公表することができた。			
			
7月24日に行われたシンポジウムの様子		展覧会図録	
【備考】 展覧会会期：7月17日～9月8日、会場：平成館特別展示室、出品作品：104件（展示替有）			

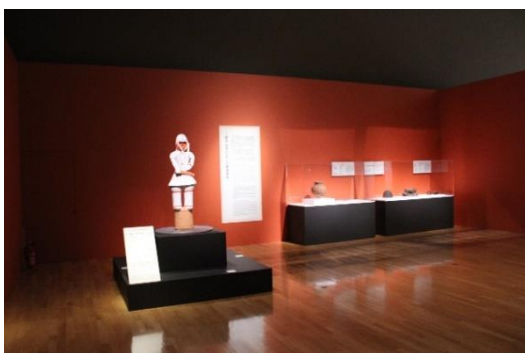
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展展示作品と関連する列品の調査が進められた点は評価される。とりわけ、今回は当館列品の特色の一つである模写作品を対象とし、調査を進めたことで今後の活用の幅が広がるものと思われる。今回のように原本が日本美術史を代表する作品である場合には、模写者の視点から原本の評価、受容史を考察する重要な手がかりとなり、本研究成果は今後の作品研究、展示に大いに資するものと思われる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画4年目の調査研究として、模本も対象にした列品の基礎研究を行った。今後は特別展に関わる作品のみならず、模写者が共通する他の作品、原本との比較検討が可能な作品を中心に、7年度以降も調査研究を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	挂甲の武人 国宝指定 50 周年記念 特別展「はにわ」に関連する調査研究		
【事業概要】 特別展「はにわ」は、東京国立博物館が所蔵する日本で最初に埴輪として国宝に指定された「埴輪 挂甲の武人」の国宝指定 50 周年を記念して開催した展覧会である。国内外の約 50 箇所に及ぶ所蔵・保管先から埴輪等を借用し、国外ではシアトル美術館所蔵品、国内では東北地方から近畿地方にかけての各借用作品の状態確認や計測などを目的として、事前調査を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課考古室	【プロジェクト責任者】	考古室主任研究員 河野正訓
【主な成果】 本展覧会は日本国内を代表する出土品を紹介する展覧会であり、宮内庁書陵部や群馬県立歴史博物館など各所蔵・保管機関の全面的な協力を得て調査を進めることができた。とりわけ埴輪の中には、脆弱な作品が含まれており、事前調査を実施することで安全な輸送方法を検討することができた。さらに、出土品を詳細に観察することで、古墳時代当時の色彩を復元するなど、調査研究によって得られた情報は大きい。 また、所蔵先に隣接する古墳についてもあわせて踏査を行った。現地で撮影した古墳など風景写真は、展示会場や展覧会図録等に活用されており、展示空間や展示方法、演出など、来館者に直感的により理解しやすい展覧会を提供することができたと評価できる。			
			
展示風景（国宝「埴輪 挂甲の武人」と兄弟埴輪）		展示風景（調査研究で彩色復元した挂甲の武人）	
【備考】 特別展「はにわ」（10 月 16 日～12 月 8 日） 総出品数：124 件 ミニギャラリートーク with はに丸（10 月 19 日） 障害のある方のための特別鑑賞会（11 月 11 日）			

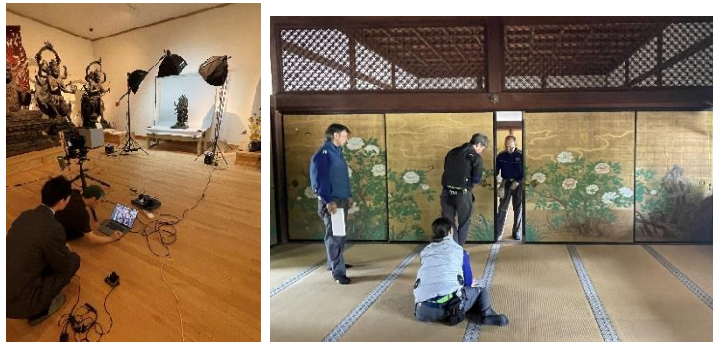
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現地調査にあたっては各所蔵・保管先からの協力を得て、予定通り調査を実施することができた。特に、所蔵・保管先と隣接する古墳についても踏査することができ、古墳時代の各地域社会における古墳と埴輪の役割について理解や見識を深めることができた。 本展覧会のような埴輪展は、約50年ぶりに当館にて開催するものであり、約50年間の埴輪研究や古墳研究の蓄積というものを、現地調査における各博物館や資料館の展示や図録等から知ることができた。 各種調査による成果の中でも、色彩復元やシアトル美術館のものも含め5体の挂甲の武人を史上初めて一堂に集めるなど東博で開催する50年ぶりのはにわ展として大きな成果を上げることができた。これらは、本展覧会の図録や展示に反映することができ、最新研究を反映した深みのある展覧会となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会の開催に伴う調査研究により、展覧会に先立つ事前調査の重要性が極めて大きいことが再確認された。特にシアトル美術館からも埴輪を借りることができ、海外にある作品については、輸送・借用手続き・調査研究の研究史など日本の博物館とは異なる事情もあるがゆえに、事前に丁寧な基礎調査が必要であると考えられる。 国内のみならず海外の来館者が多く観覧する当館の国際的な役割として、中期計画に基づき、日本列島固有の文化を象徴する埴輪についての作品調査を継続的に今後とも進めてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 開創1150年記念 特別展「旧嵯峨御所 大覚寺—百花繚乱 御所ゆかりの絵画—」に関連する調査研究		
【事業概要】令和8年(2026)に旧嵯峨御所大覚寺が開創1150年を迎えるに先立ち、優れた寺宝の数々を一挙に紹介する展覧会。本プロジェクトでは展覧会に出品される大覚寺の寺宝を中心に、関連作品の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 金井裕子
【主な成果】 (1)実施概要 本展では主な出品者である大覚寺に加え、宮内庁(御物「嵯峨天皇像」、北野天満宮(重要文化財「太刀 銘 安綱(名物 鬼切丸(髭切))」などの所蔵・保管機関の全面的な協力を得て、絵画、書跡、歴史資料、彫刻、金工、漆工、建築、考古のほぼ全ての分野において事前の悉皆調査を実施することができた。 (2)主な成果 特に障壁画240面については、現在まで非公開・未出品だった襖絵や壁貼付絵が多く、これの調査および新規撮影を行ったことで、建造物の移築跡、襖絵の移動や改変の経緯が明らかになるなど、多くの知見を得ることができた。また帳台構の蒔絵については、研究史で述べられていた制作時期をさらに遡る古様が確認でき、展覧会構成にも大きな影響を与えた。加えて、彫刻は当館においてX線やCTの撮影を行うことで新たな知見を得られたことも特筆できる。 これら寺宝について事前に悉皆調査を行ったことで、文化財への理解が深まり研究が進められただけでなく、安全な輸送や展示方法を検討することができた。併せてこれらの知見は展示会場パネルや展覧会図録、連続講座やイベント等に活用されており、展示空間や展示方法、演出など、来館者に直感的により理解しやすい展覧会を提供することができたと評価できる。			
			
事前調査風景			
【備考】 会期：7年1月21日～3月16日(49日間) 総出品数：58件 会場：平成館特別展示室 刀剣プレミアムナイト(7年1月25日)、刀剣撮影ナイト(7年2月8日、14日) 連続講座「百花繚乱 大覚寺の名宝」(7年2月28日・3月1日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査にあたっては各所蔵先、保管先からの協力を得て、予定通り調査を実施することができた。特に、大覚寺障壁画について悉皆調査は初めてのことで、歴史を検証する上で欠かせない理解や見識を深めることができた。また大覚寺の寺宝を扱う展覧会自体も約30年ぶりであり、これまでの研究成果の蓄積を、現地調査において裏付けることができた点も大きい。加えて、長年非公開で合った御物(宮内庁保管)「嵯峨天皇像」も約30年ぶりの出品となり、調査研究を進めることができたのは大きな出来事であった。これらの成果は、本展覧会の図録や展示に反映し、最新研究を反映した深みのある展覧会となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展覧会の開催に伴う調査研究により、展覧会に先立つ事前調査の重要性が極めて大きいことが再確認された。特に障壁画については、修理前後の比較や、改変跡の確認など、図版などでは明らかにすることができないさまざまな情報を取得することができた。この結果を展覧会で発表するとともに、7年度以降も中期計画に基づき調査研究を継続し、その成果を広く発信していきたいと考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「蔦屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児」に関する調査研究		
【事業概要】7年度春に開催する特別展「蔦屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児」にかかわる調査研究。本展は、江戸時代の傑出した出版業者である蔦屋重三郎の活動の全体像を紹介するものである。本プロジェクトでは展覧会に出品される江戸時代の版本や浮世絵、肉筆画の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松嶋雅人
【主な成果】			
(1)実施概要			
蔦屋重三郎が手掛けた出版物（版本、浮世絵）や関連する肉筆画の調査・撮影を行い、本展出品作品の選定を行った。所蔵品のうち、「婦女人相十品・ポッピンを吹く娘」喜多川歌麿筆（A-10569-546）、重要文化財「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」東洲斎写楽筆（A-10569-471）、重要文化財「市川鯉蔵の竹村定之進」東洲斎写楽筆（A-10569-470）については、NHK とともに 8KCG 撮影を行ったほか、4K 撮影技術を使用した共同研究を行った。			
担当者は、松嶋雅人（同上）、大橋美織（学芸研究部保存科学課保存修復室）、長倉絵梨子（学芸研究部調査研究課書跡・歴史室）、村瀬可奈（学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室）。			
(2)主な成果			
本調査によって、蔦重の出版物にみられる造形的な新しさや社会的意義、出版史上の功績を明らかにした。4K 撮影技術による NHK との共同調査では、歌麿や写楽の雲母摺大首絵や彩色摺版本の制作技法を詳細に観察し、そこに蔦重の出版物が目指したリアリズムが表れていることが確認できた。この成果は本展覧会の展示会場および図録で発表する予定である。			
			
展覧会チラシ		8KCG 撮影	
【備考】			
展覧会会期：7年4月22日～6月15日、会場：平成館特別展示室、出品作品：259件（展替有）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	版元・蔦屋重三郎の研究はこれまで江戸文学の分野においてさかんに行われていたが、本研究では文学と絵画の両分野を調査対象とすることで横断的な研究が可能となった。いずれも自館の作品を活用することで、彫や摺の技法研究でも新たな成果を見出すことができ、7年4月より開催する本展覧会で広く紹介する準備を整えることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	よく知られた歌麿や写楽の優品だけでなく、これまで研究や展示の機会がなかった多様な絵師の浮世絵や、黄表紙、洒落本といった版本の基礎情報を整えることができた。この結果を展覧会で発表するとともに、7年度以降も調査研究を継続し、その成果を広く発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称		海外展インドネシア日本国交記念企画展「染と織の道」に関連する調査研究	
【事業概要】 インドネシア国立博物館で開催される当館所蔵染織品の展示にかかる調査			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課 小山弓弦葉
【主な成果】			
(1)調査概要			
・本展では、多彩な模様を染める技法として発達した「友禅染」や絞り、沖縄の紅型、西陣で発展した唐織や金襴などの日本の染織を中心に展示を構成し、インドネシアの代表的な染物であるバティックやソンケット（金糸織物）などと比較しながら、両国における染と織の伝統と現代を紹介する。染織文化財の展示に適した施設であるかどうか、開催予定の展示室の使用環境等の調査を行った。			
(2)調査の成果			
・会場であるインドネシア国立博物館の展示環境について調査した。その結果、搬入口が小さいなどの問題点が見いだされたものの、今後改善されるとのことであった。また、展示会場の温湿度管理を確認するため、要所にデータログを設置した。			
・調査成果も踏まえ、インドネシアの代表的な染物であるバティックやソンケット（金糸織物）などと比較しながら、両国における染と織の伝統と現代を紹介するために、引き続き展示計画や調査計画を検討する。			
(3)ほか			
・展覧会に際し、協約書の内容などについて、インドネシア国立博物館、文化総局と協議した。			
・関連イベントについて、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターと協議した。			
・在インドネシア日本大使館に協力を要請した。			
			
インドネシア国立博物館での協議		作品搬入口の確認	
【備考】			
会 期：2025年10月25日（土）～12月7日（日） ※10月24日（金）開会式			
会 場：インドネシア国立博物館			
主 催：東京国立博物館、インドネシア国立博物館			
※年度計画上では令和6年度開催予定であったが先方都合により7年度に延期となった。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本とインドネシアは海の交易を通して、染や織などの技術的交流がみられる。それぞれに国が持つ伝統的な染織技術を通して互いの国の文化的交流を見いだせるような展覧会を目標に調査研究及び協議を行った。特に、伝統的な文化をどのように現代につなげていくかが双方の課題として挙げられた。2025年10月開催にむけて、協約書の締結、具体的な展示内容、展覧会準備のためのスケジュールなどについて、調査研究及び協議を続けたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	令和6年度は、インドネシアにおいてはじめて開催される日本有形文化財の展示ということもあり、双国の文化事業に対する位置づけの違いなどから展覧会会場の選定など難しい面もあったが、協議を重ねることによって実現に向けて道筋をつけることができた。次年度以降は、限られた予算を有効に活用しつつ、アジア圏の中における双国の染織文化の位置づけを紹介すべく内容や運営について協議を進め、展覧会の実現にこぎつけたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ア 特別展「法然と極楽浄土」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「法然と極楽浄土」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室主任研究員 井並林太郎
【主な成果】 浄土宗開宗 850 年を契機として企画された本展の準備においては、各寺院の多大なる協力を得ることができ、出品作品の事前調査を巡回 3 館(東博、京博、九博)の研究員によって連携しながら意欲的に行うことができた。調査はしばしば 3 館合同で行われ、各専門・各地域の知見を共有しながら進められたことで、浄土宗通史の総合的な展示を目指す本展の内容をより豊かなものにすることができた。 東京会場が 4 月に開幕したため、本展の事前の調査研究としては昨年度までの内容がその主要な部分となる。その主な成果としての図録は、浄土宗史を通覧する上で有用なだけでなく、個々の解説に調査で得られた知見を盛り込むことで、初学者から専門家までが広く参照すべき文献となった。 ただし、6 年度においても、京都会場へ向けて、基礎的な知識から最新の専門的知見までを平易かつ魅力的に発信する方法についてさらなる検討を進めた。目玉となる国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図(早来迎)」(知恩院蔵)や国宝「綴織當麻曼陀羅」(當麻寺蔵)の理解を深める展示パネル(多言語)の掲出、「當麻曼陀羅」の内容理解を親しみやすく助けるワークショップ「とびだせ!たいまマンガラ」の実施、法然の生涯を表したマンガや京都の浄土宗寺院の位置が分かる地図の付いた「法然と極楽浄土マップ」(日英)の作成等、展示や教育普及において若年層やインバウンドも含む来館者の理解促進を図る工夫を行った。通例の記念講演会やゲストを迎えたトークイベントも含め、一般の来館者に難解と思われるがちな仏教美術の意義・魅力をわかりやすく伝えることに努めた。 より学術性の高いイベントとしては、10 月 27 日に仏教美術研究上野記念財団シンポジウム「浄土宗を中心とした祖師信仰とその造形」を開催し、浄土宗における肖像制作について、事前調査の成果を生かした最前線の知見を学界に示した。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展では、事前の調査等によって得られた出品文化財の知見について、初学者から専門家までを対象として意識しながら、その意義・魅力を様々な手法で広く発信することに努めた。図録をはじめとして、昨年度に収集した研究データは本展開催に向けて主催者間で共有・整理されているが、浄土宗の通史を取り扱った初めての展覧会で蓄積された各種資料は今後も美術史・宗教史・日本史等に波及する有益な研究資源として活用されることが期待される。調査・出品の機会に当館への寄託となった文化財も少なくなく、今後の調査研究に向け発展的な役割も果たすことができたことから本展にかかわる調査研究の成果は計画を大きく上回る水準に達したと考え、A評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	京都には浄土宗の重要な寺院が集中しており、本展においてそこに伝来する文化財(当館寄託品も含む)を改めて調査・展示する機会を得たことから、各分野における研究が大きく進展した。その成果の発信に努めたことは上記のとおりであるが、これは今回で完結するものではなく、本展を契機にそれらの寺院・文化財に対する知見が深められたことで今後の当館の研究や展示にも生かされるべきものであることは言うまでもない。京都に位置する当館の文化財調査という継続的・発展的な活動に資する成果を十二分に得られたことから、A評価とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 イ 特別展「日本、美のるつばー異文化交流の軌跡ー」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「日本、美のるつばー異文化交流の軌跡ー」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 永島明子
【主な成果】 本展は、大阪・関西万博が開催されるのを機に、交流をテーマに日本の美術の歴史を捉えなおす、全分野にまたがる展示であり、国宝 19 件、重要文化財 53 件、海外借用作品 2 件を含む約 200 件の文化財を活用・展示する予定としている。7 年 4 月の開幕に向けて、各分野の研究員が展示候補の作品を絞り、必要に応じて各所蔵先へ作品調査に赴き、必要に応じて図録用の高精細な画像を新撮した。例えば、長崎歴史文化博物館ではオランダ製のガラス瓶を、長崎市のサン・ドミンゴ教会跡では花クルス文の屋根瓦を担当研究員が調査し、当館の撮影技師が図録用の画像を撮り下ろした。岡山県の野崎家塩業歴史館、京都の本満寺、曼殊院、国際日本文化研究センターなどでは、会期近くに行う作品集荷に先立って出品作品を借用し、当館での撮影を行った。東京国立博物館、九州国立博物館、神戸市立博物館、京都の萬福寺、京都の祇園祭の山鉾保存会などでは、作品の状態、運搬や展示の方法を確認するための事前調査を行った。こうした調査で得た知見に基づき、図録用の作品解説をそれぞれの研究員が執筆した。調査内容を整理して第一回の記者発表を通常より半年早く東京で行えたこと、京都でも第二回の記者発表を重ねたこと、二段階のプレチラシと本チラシを相次いで作成したこと、カラー図版と同じページに解説を載せるために通常より早い時期に作品解説が揃ったことで、研究成果について館外への周知を充実させることができ、講座やワークショップ、各種雑誌記事や 4 本のテレビ番組など、社会一般への公開に向けた準備を着実に行うことができた。			
【備考】			



国際日本文化研究センター図書館閲覧室における借用作品選定のための調査の様子



国際日本文化研究センター図書館閲覧室における借用作品選定のための調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会実施に向けて調査・研究を重ね、新規購入の収蔵品や初公開の作品を含む多様な作品を取りそろえ、時節にあったテーマの元に展覧会を組み立てることができた。よく知られた作品も交流というコンテキストに置いたことで、これまでとは違った視点でその特性を捉え直すことができた。こうした成果を7年度の展示・図録・講座などで公表できるよう着実に準備を進めている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。この点で、京都の社寺の所蔵品や祇園祭で用いられる懸想品を含む文化財をについて充実した調査研究を進めることができ、寄託後初公開や修理後初公開となる品を含めて早々に図録の編集を行い、その内容を広報にも生かしたことは、当館の展覧事業・教育普及活動の拡充に寄与するものであり、十分な成果を達成できたと言える。また、本展ではボストン美術館からの作品借用を予定し、画像資料について中国に広東省の私立美術館である深圳望野博物館からの協力を得ており、国内外の博物館との連携という点においても中期計画目標に沿った事業の実施を遂行できていると言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2)特別展等の開催に伴う調査研究 ウ 特別展「宋元仏画」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「宋元仏画」の実施に向けて文化財調査・研究を行い、その成果を展示・図録・会期中の講座などを通して、広く一般に公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室研究員 森橋なつみ
【主な成果】 「宋元仏画」は中国の宋・元時代に制作された仏教絵画であるが、中国では既に多くが失われ、現存する作品は日本に伝世してきたものがその大半を占めている。日本は中世以来、宋や元と直接交渉をもち、多くの仏教文物を舶載してきたが、仏画は其中で最も珍重されるもののひとつであり、寺院で機能するだけでなく美術史上で規範的な役割を担うなど、日本文化に深く取り入れられ、永く伝えてきた。歴史ある寺院の集中する京都は、宋元仏画を多く擁する地であり、当館にも数多く寄託されていることから、開催にあたってはおのずと京都に伝わる文化財が主軸となってくる。 本展は「宋元仏画」という隣国の美術に焦点を当て、中国当地での制作の背景をたどると同時に、これらを舶載し自国の文化に取り入れてきた我が国のありようについて見渡すものである。さらに、海外からの舶載絵画＝“唐絵”として理解され、中国製と混同されてきた高麗の仏画についてもとりあげ、東アジア的枠組みの中で日本伝来の絵画群を再考する。 これに向け、6年度は展示候補作品の調査（科学調査を含む）、撮影を中心に進めて基礎資料を蓄積し、修正前の下書き線が確認される等の新知見を含めた研究成果を得られた。また会期中に計画している国際シンポジウムでの議論の前提となる作品について、宋元仏画研究の第一人者である井手誠之輔教授（九州大学）等とともに合同調査を行った。			
【備考】			



展示候補作品の調査（右は赤外写真）



展示候補作品の調査（右は赤外写真）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「宋元仏画」の調査研究は、中国本国ではほとんど失われた両朝の仏教絵画の実態を知るようすがであり、日本にとっては中世以降の仏教文化の源流をたどるとともに、いかに我が国が受容し文化に取り込んでいったのかを知るための重要な手掛かりを豊富に含んでいる。既にこの絵画群の重要性が学界において叫ばれて久しいが、一般にはほとんど知られていないのが現状である。本展は、日本国内に所蔵される伝世品を集めて紹介することにより、東アジア文化圏の深いつながりについて再認識を促すものであり、規模と網羅性からも過去にない企画と言える。また、互いの文化への敬意を歴史的に振り返り、今日繰り返される文化財を取り巻く複雑な議論を感情論から切離し、建設的な対話へと導くためにも必要なテーマである。6年度の文化財調査・研究は本展の企画主旨に沿って資料の蓄積と協議を重ね、十分な成果を得ることができたといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は京都の寺院に伝わる宋元仏画の優品を核として構成しており、中世以降の京都における仏教文化の歴史と伝統を、隣国の文化との接点から紐解く調査研究である。美術史のみならず宗教史、文化史など学際的視点をもって東アジアを中心とした仏教文化の広がりを問い、広く有形文化財の意義を発信する機会を企図している。また7年度は展覧会の開催に併せて国際学術シンポジウムを開催するなど、国内外の博物館や大学と連携した学術交流を計画しており、中期計画の目標に沿って事業を着実に進めている。

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 ア 生誕 1250 年記念特別展「空海 KŪKAI ―密教のルーツとマンダラ世界」ほか特別展に関する調査研究 ((4)-①-2))
【事業概要】 密教がシルクロードを經由し東アジア諸地域、日本に至った伝来の軌跡をたどることにより、空海が日本にもたらした密教の全貌を紹介する特別展を企画し、日本各地の真言密教の名品、また中国、インドネシアに伝来する密教の遺品の調査研究成果を踏まえ、空海が目で見えて分かることを強調した密教の世界観を展示室に再現し、空海の事績を顕彰する特別展を開催した。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	列品室長 斎木涼子
【主な成果】 ・海外における調査とその成果 陸と海のシルクロードを經由して伝来した密教の歴史を紹介するという着眼点から、密教に関する文化財が残る中国・碑林博物館（西安市）、インドネシア国立博物館（ジャカルタ市）の所蔵品について5年度より継続的な調査研究を行い、展覧会の主旨に合致する作品を選定し出陳に結びつけた。 ・国内における調査とその成果 かつて高野山より石川県の法住寺に遷された仏像の調査研究を行い、当該作品は展覧会に出陳された。また詳細な点検等により、作品を今後安全に管理するために修理が提案され、当館の協力により修理事業への道筋をつけることができた。 ・上記調査結果を中心に、調査研究の成果について、展覧会図録の総説・各論・作品解説・公開講座等で広く公表した。 ・作品単体だけではなく、真言密教の世界観を感覚的に理解できる展示を模索し、立体マンダラと呼ぶことができる空間を展示室に2つ展開した。 ・実在した歴史上の人物である空海を深く理解してもらうため、時系列に沿いつつその具体的な足跡をわかりやすく紹介する展示構成及び会場における解説を工夫した。	
 ◀写真左: インドネシア国立博物館における調査の様子) ▶写真右: インドネシア国立博物館所蔵品を立体マンダラとして展示した様子 	
【備考】 ・開催概要：生誕 1250 年記念特別展「空海 KŪKAI ―密教のルーツとマンダラ世界」 4月13日（土）～6月9日（日）（51日間）、出陳件数 115 件（うち国宝 28 件、重要文化財 59 件） 来館者数 190,671 人	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査・研究により、従来紹介されることの少なかった、陸と海のシルクロードを通じた密教伝来の歴史を紹介するという新しい着眼点を展示で紹介することができた。また、彫刻・絵画・工芸・書跡といった部門の垣根を越え、総合的な展示空間作りを模索し、立体マンダラ空間に代表される印象的な展示を成功させ、予想を大幅に上回る来館者を動員することができた。主に上記2点により、特に優れた成果を得られたと考えられるためA評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展覧会に関する調査・研究の遂行により、日本初公開の海外作品（インドネシア国立博物館所蔵）、展覧会初出陳の史料（東寺所蔵・観智院聖教）など、今まで国内の展覧会等で紹介されることがなかった文化財について、展覧会を通じで広く情報を提供することができた。また、従来の展覧会にない総合的な展示空間の企画とその実際の観覧者への訴求力という点において、今後の展覧会構成に新しい可能性を示した。よって、特に優れた成果を得られたと考えられるためA評価とした。

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 イ 第76回正倉院展に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「第76回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究をはじめ、展示環境、観覧環境、宝物の梱包・輸送方法など、多角的な観点からの調査・研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室 主任研究員 三本 周作
【主な成果】 (1)正倉院宝物についての調査研究 ・宮内庁正倉院事務所の協力を得て、同所が管理する宝物調書を開覧し、その内容を踏まえて正確かつ最新の情報を展示解説（会場パネル、図録など）に反映させ、発信することができた。 ・正倉院学術シンポジウムを開催し、内外の研究者、正倉院事務所研究員、当館研究員が参加して、今回の正倉院展に出陳された宝物を中心に研究発表や討議を行い、知見を深める機会とすることができた。 (2)展示環境 ・展覧会の開催に当たって、当館の保存担当を中心に、事前に館内展示室や展示ケースの環境調査を行い、温湿度調整機器の更新など、必要な改善策を講じた。 ・会期中、展示室内や展示ケース内の温湿度を常時測定し、監視を行った。温湿度データは正倉院事務所と共有し、必要場合は協議の上、対応できる体制を整えた。 ・会期終了後には、展示ケース内の塵埃調査を実施した。塵埃調査の結果については正倉院事務所に報告し、7年度以降の対応を協議する検討会を実施した。 (3)観覧環境 ・バリアフリーも踏まえた展示環境を提供するべく、関係者とともに展示台の高さや展示具の仕様、照明などについて検討を行った。 ・正倉院事務所とともに宝物の展示方法についての協議を行い、安全かつ見やすい展示を実現することができた。 (4)宝物の梱包・輸送 ・宝物を安全に輸送するため、梱包方法や梱包資材などについて当館研究員と輸送業者で検討会を実施した。また、梱包仕様については正倉院事務所とも協議・調整し、安全な輸送を確実に行うことができた。			
【備考】 ・宝物に関する内部検討会を2回実施した。 ・図録に掲載する解説文について、学芸部職員全員で検討する機会を設けた。 ・公開講座 2回 田中 陽子 氏（宮内庁正倉院事務所保存課整理室長）「紫地鳳形錦御軾再現—伝統技術とデジタル技術の融合—」 吉澤 悟（当館学芸部長）「黄金瑠璃鈿背十二稜鏡の魅力について」			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院宝物は「日本国民の宝」として、一般の関心が高い。今回の正倉院展でも、そうしたニーズに対応すべく、正倉院宝物に関する様々なデータを収集し、その発信に意を尽くすことができた。正倉院学術シンポジウムで内外の研究者との討議を通じて知見を深められたことも、今後の正倉院宝物の魅力発信の上で、大変有意義であったと考える。 世界的な宝物である正倉院宝物の展示に当たっては、厳格な管理体制が求められる。今回の正倉院展においても、展示場所の空気環境を適切な状態に維持するため、データの監視と共有を徹底し、即時に対応できる体制で臨むことができた。また、正倉院宝物には脆弱な状態にあるものが少なくなく、その取扱いには細心の注意を要する。今回の正倉院展においても、梱包仕様について正倉院事務所の意見も仰ぎながら入念な検討を行い、安全に輸送・展示することができた。 さらに、正倉院宝物の魅力を伝える上で、展示方法は重要なポイントである。今回も、担当者間で検討を重ね、正倉院事務所や展示具製作者とも協議しながら、安全性や見やすさを考慮した展示が実現できた。以上の理由から、B評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画においては宝物に関する調査研究とその成果の発信が重点項目となっている。中期計画4年目となる6年度も、宝物についての最新の情報の収集に努め、正確な内容を発信することに最大限の注意を払った。また、英語による広報も強化され、海外からの観光客が正倉院展を認知する下地が増強されつつある。音声ガイドについても英・中・韓の3か国語を用意し、より鑑賞しやすい環境を整えることに注力した。以上の理由から、B評価とした。7年度以降も、海外に向けた情報発信を更に強化していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	2) 特別展等の開催に伴う調査研究 ア 挂甲の武人 国宝指定 50 周年記念 九州国立博物館開館 20 周年記念 特別展「はにわ」に関連する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「はにわ」は、古墳時代の埴輪を体系的に紹介する半世紀ぶりの展覧会である。特に、国宝 埴輪 挂甲の武人（東京国立博物館蔵）と同じ工房で作られ国内外で所蔵される兄弟埴輪を一堂に展示したほか、最近の埴輪研究の成果を取り入れた。10 月～12 月に東京国立博物館で開催され、7 年 1 月から 5 月まで九州国立博物館で開催される。九州国立博物館では、主に西日本各地で所蔵される埴輪を中心に、特別展出品予定作品を調査したほか、教育普及事業の開発に向けた調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸部長 白井克也
【主な成果】 (1) 事前調査 特別展の出品予定作品について、巡回館である東京国立博物館と分担・協力しつつ、各所蔵機関で事前調査を行った。調査先：東京国立博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、兵庫県立考古博物館、神戸市埋蔵文化財センター、和歌山県立紀伊風土記の丘、上淀白鳳の丘展示館、島根県立八雲立つ風土記の丘、岡山県立博物館、岡山市埋蔵文化財センター、八女市岩戸山歴史文化交流館、米国シアトル美術館。 (2) 展示調査 埴輪や石人を所蔵・展示している国内各機関において、展示を調査した。調査先：栃木県立博物館、相川考古館、埼玉県立さきたま史跡の博物館、行田市郷土博物館、本庄早稲田の杜ミュージアム、千葉県立中央博物館、市原歴史博物館、山武市歴史民俗資料館、芝山古墳・はにわ博物館、東京国立博物館、東京国立近代美術館、東京大学総合研究博物館、明治大学博物館、國學院大學博物館、与謝野町古墳公園はにわ資料館、京丹後市立丹後古代の里資料館、大阪歴史博物館、堺市博物館、高槻市今城塚古代歴史館、大阪府立狭山池博物館、大阪大谷大学博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、天理大学附属天理参考館、和歌山市立博物館、岡山県古代吉備文化財センター、福岡市博物館、大野城心のふるさと館、八女市岩戸山歴史文化交流館、熊本県立装飾古墳館 (3) 遺跡踏査 埴輪や石人（復元品の場合も含む）を樹立している古墳を踏査した。調査先：京都府与謝野町・蛭子山古墳、同・作山古墳、大阪府高槻市・今城塚古墳、兵庫県神戸市・五色塚古墳、福岡県八女市・岩戸山古墳 (4) 作品にかかわる研究会 宮内庁書陵部の協力の下、大山陵古墳（仁徳天皇陵古墳）の出土品をはじめとする同部所蔵の埴輪の蛍光 X 線分析を実施し、分析成果の検討会を開催した（7 年 1 月 9 日、10 日） (5) 教育普及事業の開発 古墳時代の文化について来館者の理解を深める教育普及事業を開発するため、垂飾付耳飾を試作するなど、検討を進めた。			
【備考】			



岩戸山古墳

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館と分担した作品調査等により、同館で10月に開催された同展において作品を安全かつ効果的に展示することが可能になるとともに、調査成果を図録に反映することができた。 また、事前調査、展示調査、遺跡踏査、教育普及事業の開発のための調査研究などの成果を、展示、講演会等イベント、教育普及に反映させた。 さらに、作品調査、研究会の成果は、埴輪や古墳時代に関する今後の研究に大いに資すると考えられるため左記評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき、作品調査をはじめとする調査研究を着実に進めることができた。この成果は、特別展「はにわ」の開催のみならず、文化交流展（平常展）の充実や将来の特別展の開催、文化財の収集と保存、教育普及等においても応用できる内容を多く含んでおり、中期計画を大きく上回る成果を上げることができたため、左記評定とした。 7年度以降も特別展等の事業を通して、調査研究を継続し、その成果を発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究((4)-①-3))
【事業概要】多くのの人に文化財に親しむ機会を提供することを目的として、先端技術による文化財のレプリカやデジタルコンテンツの開発に係る調査研究、文化財の活用事例についての調査研究を行った。それらの知見を基にコンテンツの開発と体験型展示等を実施し、実施事業を通して、効果の測定並びに人々のニーズの調査を行った。	
【担当部課】	本部文化財活用センター
【プロジェクト責任者】	副センター長 丸山士郎
【主な成果】 (1) キャノン株式会社、シャープ株式会社、NHK、TOPPAN 株式会社、国立科学博物館との連携による共同プロジェクトを継続して実施し、コンテンツの新規開発・改良を行った。 NHK と東京国立博物館と取り組む「8K文化財プロジェクト」では、「洛中洛外図屏風（舟木本）」の「8K文化財」（3DCG モデル）を佐賀県立美術館（12月6日～7年1月29日、体験者数13,001人、満足度89.7%（日本語）、100%（英語））で実証公開した。また、5年に制作し公開した「8Kで楽しむ国宝屏風 洛中洛外 京めぐり」をNHK名古屋放送センターで公開（体験者数1360人、満足度95.41%（日本語）、100%（英語））したほか、本コンテンツに中国語・韓国語の字幕及び手話CGサービス2話分を追加した。キャノン株式会社との共同プロジェクトにより新たに東京国立博物館所蔵の「松林図屏風」などの高精細複製品を製作したほか、高精細複製屏風の展示を羽田空港及び東京国際クルーズターミナルで展開した。また、高精細複製屏風にプロジェクションマッピングを施した体験型展示を佐賀県立美術館でも公開した。シャープ株式会社との共同プロジェクトにより、江戸時代のきものに着目したデジタルコンテンツ「江戸きものLOOKBOOK」を開発し、東京国立博物館特別3室にて実証公開した。車椅子利用者にも配慮したコンテンツ及び空間デザインの設計を行い、日本語5,608人、英語3,632人と幅広い層に体験いただいた。	
    江戸時代の小袖雛形本を起点に、バーチャルでの染織文化財の試着を叶える「江戸きものLOOKBOOK」（東京国立博物館） 「8Kで楽しむ国宝屏風 洛中洛外 京めぐり」コンテンツの公開（NHK名古屋放送センター）	
   高精細複製品「歌舞伎図屏風」（羽田空港 第3ターミナル 4階「江戸舞台」） 高精細複製品「風神雷神図・夏秋草図屏風」展示風景（羽田空港 第2ターミナル 国際線施設 3階出発ロビー） 「8K文化財」（3DCGモデル）の体験型展示実証公開（佐賀県立美術館）	
(2) レプリカ製作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術や知見を持つ企業、機関等や、それらを使ったコンテンツの公開、活用を行っている施設への視察を行った。 (3) 機内各施設や地域のミュージアムと連携し、レプリカやデジタル技術を活用したコンテンツを開発した。体験者からのフィードバックを反映させるため、体験型展示、教育プログラムについてアンケート調査を実施した。 (4) 「2023年度ぶんかつアウトリーチプログラム報告書」を刊行した。 (5) 調査・研究の成果について、講演会等での発表を行った。	
【備考】 (1) 江戸きものLOOKBOOK（東京国立博物館、7月23日～9月23日） (2) 主な調査先／CONTENT TOKYO、NTT R&D Forum、SHARP Tech-Day、Inter BEE、日本科学未来館（パリ・ノートルダム大聖堂展）、ACN ラムセス大王展、NHK放送博物館ほか (3) アンケート調査実施事業／デジタル法隆寺宝物館（東京国立博物館、①8Kで文化財 国宝 聖徳太子絵伝 4月2日～7月28日、7年1月28日～7月27日、②「法隆寺金堂壁画 写真ガラス原板デジタルビューア」7月30日～7年1月26日）、8Kで文化財「ふれる・まわせる名茶碗」（岡山県立博物館、7年1月31日～3月16日）、「8Kで楽しむ国宝屏風 洛中洛外 京めぐり」（NHK名古屋放送センター、10月5日～10月14日）、「8K文化財実証公開」（佐賀県立美術館 特別展「桃山三都一京・大坂と肥前名護屋」会場内、12月6日～7年1月29日）、ぶんかつアウトリーチプログラム（6年度全26回実施） (5) 主な発表等／「考古資料の複製品を用いた文化財活用の実践」飯田茂雄・品川欣也・小島有紀子（5月26日、	

アウトリーチプログラムの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	企業等との共同研究プロジェクトの成果物を、アウトリーチ及び他館における公開などのために貸し出すことで広く活用し、アンケート結果でも高い評価を得た。また、文化財に親しむ手法を更に拡大すべく、企業等の先進事例について調査・研究を行った。そこで得た知見を基に、文化財鑑賞の新たな提案につながる新コンテンツの開発を開始した。地域の活性化を促す文化財体験を開発・提供することにより、研究成果を広く国内外にも発信することができた。 さらに、先進事例の調査、コンテンツ開発、一般への公開・検証を行い、地域の博物館や教育機関との連携を深めることで、文化財活用の新たな道を拓く有意義な実施手法を構築した。また、より広い範囲の地域・会場で簡便に活用してもらうために、多言語字幕や音声の追加、手話CGなど社会包摂的なサービスを加え、より普及性の高い仕様にコンテンツの一部の改修などを行った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目として、文化財の理解を促進する展覧事業や教育普及活動等についての成果を発展させるとともに、調査研究の成果を事業に反映させ、広く発信することができた点において、中期計画を順調に遂行できている。既存コンテンツを、より包摂性の高いものとし、広い範囲で利用可能なものとするための改良と検証を継続した。今後は、より広範囲の博物館や教育機関等との連携を更に深め、各地域での既存コンテンツの公開を通して調査・研究をさらに進めることを課題とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア 博物館環境デザインに関する調査研究		
【事業概要】 当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課デザイン室	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課デザイン室長 矢野賀一
【主な成果】 (1)「本館11室展示室改修」「内藤礼展」「本館特別2室 OLED 照明改修」「あそびば トーハク」「柳瀬荘のサイン改修」「インドネシアきもの展会場デザイン」「博物館で初もうで」「新千円札展示ケース製作」「東南アジア彫刻作品用安定台製作」の展示デザイン及び本館4室展示改修に関するアンケート調査を行った。 (2)「お正月・お花見のポスター」、「柳瀬荘案内サイン」「あそびば トーハクロゴ」「正門プラザ誘導サイン」「郵便ポスト」のグラフィックデザインを行った。 (3) 正門プラザ内外サイネージ改修および本館17室、本館平成館連絡通路、本館エントランス、平成館企画展示室解説パネルのサイネージ化を行った。			
			
「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」第2会場 撮影：畠山直哉		本館1階11室展示室改修	
【備考】 他館のデザイン調査：国内の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に6年度においては総合文化展の展示デザインのための参考とした。 調査先：ルイジアナ近代美術館、バイエルン州立エジプト美術収集館、グリュプトテーク美術館、州立古代美術博物館、バイエルン州立博物館、台北故宫博物院、アーサー・M・サックラー・ギャラリー、フリーア美術館、フィラデルフィア美術館、MOMA、メトロポリタン美術館、台南故宫博物院、大英博物館、V&A 美術館、ハンタリアン博物館、ジャパン・ハウス・ロンドン、State Tactile Museum Omero、SFER IK UH MAY アートセンター、大阪東洋陶磁美術館、八重山博物館の展示調査をおこなった。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度当初の目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査した成果を、総合文化展示及び特別展へ展開することが達成できている。7年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査を行う。また最新の情報技術など、本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目として、本館11室で仏像彫刻の美術作品を展示するため、高演色LED照明器具を用いた展示照明及び展示ケースをデザインし、観覧環境の向上につながる改修を行った。 7年度以降は引き続き展示照明のLED化およびOLED化をおこなう。また3Dプリンターを使った支具の製作などの調査研究及び本館展示改修のデザインを進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 イ 博物館教育に関する調査研究		
【事業概要】さまざまな来館者に向けて、博物館に親しみを持ち、鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論を基盤とした調査研究と実践を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課長 鈴木みどり
【主な成果】			
(1) 上廣倫理財団助成の「北米・欧州におけるミュージアムの先駆的活動調査」により、阿部が米国、小野塚、内山、山本がヨーロッパの博物館教育の事例を調査し、調査報告会において発表を行った。 (2) インバウンドの来館者を意識し、インバウンド理解のための館内研修や、通訳士などインバウンドを対象とした事業を行う専門の方々への研修を行うとともに、トーハク新時代プランに基づいた「日本文化のひろば」を引き続き実施した。また、「日本文化のひろば」の一部アクティビティをウェブサイト上に公開した。 (3) 障がい者に向けたプログラムの開発・調査研究および研修を継続して行った。博物館教育課内の研究会「みんなの博物館」を継続し、事例研究や発表を通して共通意識を持って実践に繋げた。障がい者理解のための研修に積極的に参加するとともに、合理的配慮の研修会を博物館教育課主導で開催し、館内職員にも参加者を広げた。また、ボランティアバリアフリー班の研修を行った。視覚障がい者に対しては、盲学校のためのスクールプログラムを児童生徒や PTA に、対面およびオンラインで実施した。聴覚障がい者には UD トーク（音声認識アプリ）やヒアリンググループを引き続き使用し、手話を利用した動画制作の準備を行なった。また、感覚過敏の来館者のための「センサリーマップ」は、新たに英語版とダウンロードできる PDF 版を開発し、ウェブサイト上に公開した。「トーハクキッズデー」や「あそびばとーはく」などのイベント時には、感覚過敏の来館者のためにカームダウンスペースを設置した。センサリーマップ作製と関連の取り組みは、内閣府バリアフリー・ユニバーサルデザイン功労者の候補の一つとして文部科学省から推薦され、受賞はならなかったものの、最終選考まで残った。それら障がい者のための取り組みについて、他館や大学、病院等への助言を複数回行い、執筆や講演、インタビューなどで協力をした。 (4) 低年齢層を含むファミリーグループへのプログラム開発と運営、調査を「トーハクキッズデー」および「トーハクプチ・キッズデー」において合計 4 回行い、対話型の作品鑑賞や、年齢にかかわらず参加できる制作や体験など、当館ならではの作品に合わせた、新たなコンテンツ開発を行なった。また、未就学児と保護者向けのウェルカムガイド「はくぶつかんへようこそ!」を制作し配布した。 (5) ボランティア組織のマネジメント及びボランティアの事業について、活動の方向性や内容に関する調査・研究を行った。また、他館への助言を行った。 (6) 東京国立博物館研究誌 MUSEUM において、鈴木、藤田、阿部、横山、永田、山本、中村、勝木が博物館教育の実践報告を行った。			
【備考】ワークショップ、スクールプログラム、講演会、トーハクキッズデーで、終了後にアンケートを実施。東京国立博物館研究誌 MUSEUM712 号「東京国立博物館創立 150 年記念事業における博物館教育」特集号。			



盲学校対応のためのツールを使った研修の様子



キッズデーのプログラム「ふしぎな文字を書いてみよう」の様子



盲学校対応のためのツールを使った研修の様子



キッズデーのプログラム「ふしぎな文字を書いてみよう」の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	継続的に教育普及事業を行うとともに、海外調査による先進的事例調査や、調査報告会での発表などを積極的に行うことができた。6年度はそれらの積み重ねなどを基に、館内だけでなく館外のインバウンド対象事業を行う専門の方々を対象とした研修を実施することで、ノウハウの展開に努めた。 障がい者への対応についても共通意識を持ち、研修機会を博物館教育課のみならず、館内職員にまで広げることができた。そのような今までの先端的事業の実績に対して、他施設への助言や協力も複数回実施した。 また、当館研究誌において、150周年記念事業の博物館教育事業をまとめた報告書を刊行し、他館の教育普及事業への参考情報の発信も行った。以上のことから、A評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目として、今までの経験や研究に加え、新たに調査機会をもつことで、海外の先進的事例を共有することができた。また、障がい者、低年齢層を含むグループ、外国人に対して、引き続き、より効果的な鑑賞支援プログラムや普及方法を実践し、他館への助言等に努めた。今後の博物館教育研究の継続と実践の中で、さらに生かされるように努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 凸版印刷及び文化財活用センターと共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究		
【事業概要】 文化財のデジタルアーカイブを活用した、文化財の新たな公開・鑑賞手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 村田良二
【主な成果】 ・「江戸城の天守」を1月2日～4月14日に公開した。 ・「洛中洛外図屏風 舟木本」を4月17日～7月15日に公開した。通常35分のコンテンツに対して約20分の短縮版上映を試行し、滞在時間の限られている来館者層のニーズを確認した。 ・「空海 祈りの形」を7月17日～10月14日に公開した。 ・「アンコール遺跡バイヨン寺院 尊顔の記憶」を10月16日～12月22日に公開した。 ・「国宝 松林図屏風 乱世を生きた絵師・等伯」を7年1月2日より公開した。			
【備考】			
			
「洛中洛外図屏風 舟木本」告知画像			

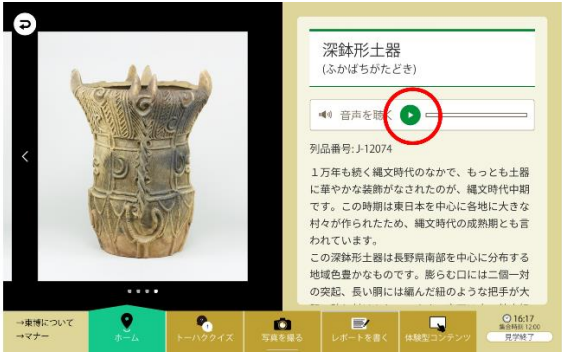
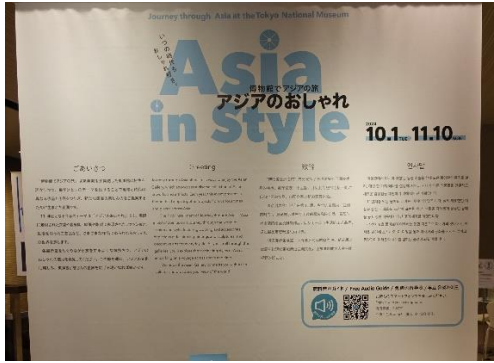
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既存のコンテンツの再演とともに、「洛中洛外図屏風 舟木本」において通常35分のコンテンツに対して約20分の短縮版の上映を行い、滞在時間の限られている来館者層のニーズに応えることができ、文化財のデジタルアーカイブ蓄積の有用性を再確認できた。 また、「江戸城の天守」は12,008人（定員充足率31.4%）、「洛中洛外図屏風 舟木本」は9,423人（定員充足率20.4%）、「空海 祈りの形」は15,061人（定員充足率44.6%）、「アンコール遺跡バイヨン寺院 尊顔の記憶」は6,508人（定員充足率26.2%）の来場者があり、デジタルデータを活用した新たな鑑賞手法の有用性が立証された。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目として、デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究を行い、従来と異なる上映方法の試行をしつつ、集客力のあるコンテンツの継続的な公開を行い、中期計画を遂行できている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 エ ICT を利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英中韓4言語による鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」及び児童生徒のための鑑賞ガイドアプリ「学校版 トーハクナビ」を運用するとともに、「トーハクナビ」のユーザー動向解析により、より豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。 あわせて、QRコードを利用した情報提供に努めた。	
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課
【プロジェクト責任者】	博物館教育課 鈴木みどり
【主な成果】 (1) 「トーハクナビ」以降の新しい形の鑑賞ガイドを視野に入れ、東洋館で開催した「博物館でアジアの旅」において、QRコードを利用した音声ガイド(VOXX)を試験的に実施した。本システムは、テキストをシステムに入力するだけで音声を生成でき、多言語化も容易に可能であるため、音声ガイドの提供業務に堪えうるか今後も検証を続ける予定である。 また、新規来館者のニーズにあわせたコンシェルジュ機能を入れたアプリを実施に向けて検討した。 (2) 「トーハクナビ」実施5年の集大成として、ユーザーログにより、利用状況や観覧者動向を分析した。 (3) 学校団体のスクールプログラムの一環として開発した「学校版トーハクナビ」の端末貸し出しと運用を行った。 (4) ICT を利用した博物館ガイドについて、他館への助言や執筆を行った。	
  学校版トーハクナビ画像 QRコードを利用した音声ガイド	
【備考】 4) 「博物館のエコシステムの中での音声ガイド」『博物館情報・メディア論 ミュージアムの未来をつくる』中村麻友美	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「トーハクナビ」及び「学校版トーハクナビ」を順調に運用するとともに、それ以降の新たな博物館鑑賞ガイドについて、検討を重ねた。その中で、新たにQRコードを利用した音声ガイドを試行することができた。また、初めて来館するような来館者のニーズを探り、コンシェルジュ機能を持つアプリについて、検討を行った。以上のことから、評価をBとする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画4年目として、順調に「トーハクナビ」を運用するとともに、時代に合わせた、ほかの方法でアクセスできる音声ガイドや、新規来館者の求める機能についても検討し、新たなICTを利用した博物館ガイドのシステムの可能性を探っている。以上のことから、評価をBとする。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 オ 博物館広報・国際交流活動に関する調査研究		
【事業概要】当館の広報活動の充実と効果的な実施及び国際交流活動を推進するため、博物館における広報及び国際交流活動について調査・研究する。 6 年度は国際交流活動については、ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業の一環として海外調査及び現地での人的交流を実施する。また、海外の博物館・美術館との交流協定の締結を進める。館内では外国人来館者向けの多言語化対応の充実に継続的に努める。			
【担当部課】	学芸企画部企画課国際交流室	【プロジェクト責任者】	国際交流室長 楊鋭
【主な成果】 (1) 主な内容 国際交流：ミュージアム日本美術専門家交流・連携事業（11 月 26 日～11 月 30 日）、海外館との交流を進めるための協定締結、多言語化対応事業 (2) 内容の詳細 ・当館陶磁担当者 3 名、国際交流室員 3 名を英国へ派遣、大英博物館所蔵する日本の陶磁器を調査。また、大英博物館、V&A 美術館の日本美術担当者と交流を行った。 ・世界のミュージアムとのネットワークを強化、交流を進めるために、海外の博物館・美術館 11 館と MOU を締結した。 ・日本で学ぶ留学生向けに英語、中国語、日本語によるギャラリートークを実施した。 ・外国人来館者に日本美術を紹介するため、通訳案内士向けに研修を行った。			
 大英博物館での交流  米国・国立アジア美術館との MOU 締結  留学生向けのギャラリートーク			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際交流については、6 年度のミュージアム日本美術専門家交流・連携事業は英国・大英博物館にて陶磁器調査、V&A 美術館視察など、日本美術担当者との交流を進めた。また、7 年度の交流事業の開催について意見を交換した。海外の博物館・美術館 11 館と MOU を締結したことにより、7 年度からは活発な交流を期待される。さらに、外国人来館者との交流の機会を設け、博物館留学生の日（10 月 6 日）に外国人留学生向けに英語・中国語・韓国語によるギャラリートークを実施し、好評を得た。

中期計画の実施状況の確認

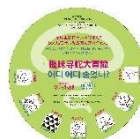
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6 年度は海外の博物館、美術館との交流・連携を進め、中期計画にのっとり国際交流の具体的施策展開に向けて準備を整えることができた。国際交流活動並びに外国人来館者への施策を積極的かつ効果的に実施するよう中期計画を今後も継続して推進する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関連する調査研究 ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 文化財を活用した効果的な展示や、博物館における教育活動の充実を目指して、6年度は「ボランティア活動の充実」、「初学者に向けた情報発信」の2つをテーマに調査・研究を進めるとともに、これまでの調査・研究成果を展示やボランティア運営に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室 水谷 亜希
【主な成果】 1) 「ボランティア活動の充実」に関する調査・研究 ・文化財ソムリエ 20 人の育成に係るスクーリング (21 回) と、「文化財に親しむ授業」(7 回・484 人)の実施に際して、文化財ソムリエに対するアンケート調査を行い、今後の博物館教育の在り方について考えるべく、その分析を行った。 ・京博ナビゲーターに向けて行った研修にて、今後の活動の参考とするため、ナビゲーターに対するアンケート調査を行い、その分析を行った。 2) 「初学者に向けた情報発信」に関する調査・研究 ・「文化財に親しむ授業」(7 回・484 人)の実施に際して、児童・生徒と教員に対するアンケート調査を行い、今後の事業の在り方について考えるべく、その分析を行った。また新たに作成した伊藤若冲筆「果蔬涅槃図」の複製を用いた授業について考察を行い、それをもとに文化財活用センターの「ぶんかつブログ」に「教室に若冲がやってくる! 文化財ソムリエの訪問授業」と題した記事を掲載した。 ・教員による複製を活用した授業 (3 校・生徒 196 人)の支援、「社会科教員のための向上講座」(1 回・61 人)の実施に際して、今後の事業の在り方について考えるべく、教員からの聞き取り調査と意見交換を行った。 ・京都府立丹後郷土資料館「ワークショップ・体験コーナー 初めての仏像体験」への協力に際して、今後の活動の参考とするため、資料館に参加者へのアンケート調査を依頼し、その結果を共有・分析した。 ・これまでの調査・研究成果を踏まえて、入門的な特集展示「新春特集展示 巳づくしー干支を愛でるー」(7 年 1 月 2 日～2 月 2 日)を企画し、展示に関連するワークシート「さがしてみよう! こんなへび」(日英 6,500 部・中韓 1,700 部)を発行した。また、館主催の土曜講座にて「巳づくしー蛇を表す・蛇で表すー」と題して講演した。 ・京都国立博物館の教育普及史について調査し、その概略を「美術による学び研究会メールマガジン」(第 518 号)にて「京都国立博物館の教育普及史 130 年」と題して報告した。 ・これまでに実施した京博ナビゲーターによるワークショップのうち、絵画を主題とするものを中心に考察を行い、その成果を「美術による学び研究会メールマガジン」(第 543 号)にて「日本の絵画を主題としたワークショップの手法 5 例」と題して報告した。			
【備考】 ・本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B、1312B も参照。			



さがしてみよう!
こんなへび
(日英版・中韓版)



さがしてみよう!
こんなへび
(日英版・中韓版)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「ボランティア活動の充実」に関して、6年度は、京博ナビゲーターのワークショップを再開したため、これまでの経験を踏まえて運営面での改善を行いつつナビゲーターへのアンケート調査を行った。文化財ソムリエの活動についても、5年度のアンケート結果を反映して活動を行いながら、7年度の活動に向けて分析を行うことができた。 「初学者に向けた情報発信」に関しては、実践に関連して調査・分析を行うとともに、館の教育普及史の概略をまとめ、その成果を公表することができた。また「日本の絵画を主題としたワークショップの手法」について考察した結果を公表するなど、成果を社会に還元することができたためB評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京博ナビゲーターによる特別展開連のワークショップを再開し、これまでのアンケート結果を基に様々な改善を行いながら、従前行ってきた各種の教育普及活動を継続して実施することができた。また、これまでの調査・研究の成果を公表することができたため、B評価とする。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 (4)-①-3))		
【事業概要】奈良を中心とした寺社の歴史や伝統文化に関連する教育普及プログラムを実施し、学習の機会を提供するとともに、対面型・オンライン型いずれの教育活動も展開し、多様な形で地域学習の拡充を図る。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長 中川あや
【主な成果】			
1) 学校教育との連携に関する研究			
・奈良教育大学大学院修士課程「伝統文化の継承と発信」と連携し、7月20日から9月1日にかけて、当館にて開催した子供向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「フシギ！日本の神さまのびじゅつ」に関連した親子向けワークショップ2種を共同で企画し、開催した。ワークショップを企画するに当たり、奈良教育大学大学院生と内容や実施方法について検討し、改良を重ねた。			
・「特別展 第76回正倉院展」が開催されるのに併せて、奈良教育大学附属中学校2年生を対象に、正倉院や正倉院宝物について解説する特別授業を実施した。観覧する前に正倉院や正倉院宝物に関する事前学習を行うことにより、学習の深度にどのような違いをもたらすのか検証した。			
2) 若年層来館者を対象とした展示内容に関する調査研究			
・奈良県立青翔中学校と奈良市立若草中学校の2校を対象に職場体験を実施した。職場体験に参加した生徒たちに、当館の展示を来館者の目線で鑑賞してもらうほか、ボランティアと共同でワークショップの実施を担当してもらうなどして、教育普及担当の研究員と共に、当館の展示方法や教育普及事業についての課題の調査を行い、更に改善策を考案した。			
・大分県と連携し、学校団体を対象としたオンライン中継授業を実施した。学校の教室となら仏像館をオンラインでつなぎ、ボランティアが仏像について解説した。なら仏像館に展示されている様々な地域の仏像をオンラインで鑑賞する事により、仏像をはじめとした文化財や各地域の歴史に対する関心を醸成した。			
・石川県立美術館で開催された特別展「まるごと奈良博」の関連ワークショップや講座を石川県立美術館にて行った。石川県で暮らす人達に、当館所蔵の文化財について親しんでもらう機会を創出した。			
【備考】			
1) ・わくわくびじゅつギャラリー「フシギ！日本の神さまのびじゅつ」に関連した親子向けワークショップの実施回数及び参加人数：「ダンボールびわをつくろう！～神さま さまごま ワークサマー①～」1回28人、「しかけ絵本をつくろう！～神さま さまごま ワークサマー②～」1回20人			
・奈良教育大学附属中学校2年生社会科歴史的分野特別授業の実施回数及び参加者数：2回131人			
2) ・職場体験受け入れ校数及び人数：2校8人			
・大分県オンライン中継授業の参加校及び人数：2校53人			
・石川県立美術館関連講座・ワークショップの実施回数及び参加人数：15回683人			

職場体験の実施風景



職場体験の実施風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良教育大学大学院や奈良県内の中学校等、地域の教育機関と連携し、様々な教育普及プログラムを実施できた。さらに、大分県や石川県立美術館等、他県の機関や美術館等と共同で教育普及事業を展開する等、地域学習を拡充することができた。よって、年度計画を着実に遂行できていると判断し、B評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良県内に留まらず、県外の人びとを対象に様々な教育普及プログラムを実施し、調査・研究を行えたことから、中期計画を無事に遂行できたと判断し、B評価とした。奈良をはじめとした地域の歴史や伝統文化を次世代に継承していくために、今後、様々な機関や団体等との連携をより一層強化し、多様な事業を展開していきたい。また、文化財や歴史をより身近に感じることができるよう教育普及事業を実施し、それらに対する興味・関心の醸成につなげていく。そのため、7年度は、教育普及事業の更なる充実及び地域学習の更なる拡充を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究 ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 (4) -①-3))		
【事業概要】7月20日から9月1日にかけて、西新館にて開催した若年層向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「フシギ!日本の神さまのびじゅつ」において、様々な教育普及プログラムを実施し、その効果を検証した。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長 中川あや
【主な成果】 7月20日から9月1日にかけて、西新館にて若年層向けの展覧会わくわくびじゅつギャラリー「フシギ!日本の神さまのびじゅつ」を開催した。本展は、日本の神々への信仰から生み出された造形や美術の紹介を通して、若年層を主な対象に、日本の神々に対する興味関心を喚起することを目的とした展覧会で、体験要素を取り入れるなど、教育普及の視点から様々な工夫を凝らした。その内容は下記の通りである。 ・会場の入口に導入映像のコーナーを設けるほか、会場内をポップなカラーリングにするなど、若年層が展示鑑賞を楽しめるような空間を演出した。 ・若年層の能動的な鑑賞を促すために、作品解説や展示パネルは、若年層向けに平易な内容にするとともに、当館公式キャラクター「どんまいず」等のイラストを多用した。 ・会場内にワークショップコーナーを設け、神さまにささげるお面を制作し、お面を着けて記念写真を撮影するワークショップ「体験!お面をつくってポーズをとろう!」を開館日毎日開催した。また、ワークショップコーナーに、来場者が製作したお面を掲示できるようにした。ワークショップ参加者はのべ3,000人に上り、会場に掲示されたお面の枚数は1,326枚だった。 ・展示品をスケッチできる体験型要素も取り入れ、そのスケッチを掲示できるおえかきギャラリー「描こう!日本の神さまのびじゅつ」を会場内に設けた。会場に掲示されたスケッチは1,752枚だった。 ・クイズ形式のワークシート「クイズではっけん!日本の神さまのびじゅつのハテナ」を日本語・英語・中国語・韓国語の4言語でそれぞれ制作し、会場入口にて配布した。ワークシートの配布枚数は日本語版13,894枚、英語版7,884枚、中国語版14,050枚、韓国語版の524枚の計36,352枚だった。クイズの参加率はおよそ33%だった。			
			
		会場風景	
			
		ワークショップでお面を作り、 フोटスポットでポーズをとる来場者の様子	
【備考】・本展の来場者数: 62,863人、外国人の来場者数の割合は約65%だった。 ・アンケート回収枚数 日本語版358枚、英語版63枚、中国語版137枚、韓国語版2枚(アンケート実施期間は8月11日~9月1日)			



会場風景

ワークショップでお面を作り、
フォトスポットでポーズをとる来場者の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展の来場者数は、過去に当館で夏に開催した特別展の来場者数に匹敵し、そこから反響の大きさがうかがえた。また、会場では、若年層のみならず大人もワークショップやワークシート等の体験に積極的に参加している様子が見受けられ、そうしたことも影響し、各種体験への参加率が高い結果になったと言える。加えて、外国人来場者の割合の大きさや、ワークシートの配布枚数等から、外国人来場者に対する効果が高かったことも特筆される。以上のとおり、若年層を主な対象として教育普及の視点から様々な工夫を凝らした本展は、ターゲットであった若年層だけでなく大人や外国人も非常に多く来場し、当初の計画を大幅に超える成果を上げることができたため、Aと判定した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展のように、若年層を対象とした展覧会を開催するほか、様々な教育普及事業を積極的に展開するなど外国人を含む幅広い層が文化財の鑑賞を通して、歴史や伝統文化に対する関心を育める機会を十分に提供できている。よって、中期計画は予定どおり遂行できていると判断し、B評価とした。今後も幅広い層が文化財に親しみを持てる事業を企画し、調査及び研究を継続的に行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 ア 展示のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究((4)-①-3))
【事業概要】 展示理解促進のための教育普及事業として、6年度は弥生時代の棺である甕棺のレプリカを活用したワークショップ及び様々な時代の衣装を着る体験を行った。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	主任研究員 西島亜木子
【主な成果】 ・衣装体験で使用する平安時代初期の女性服(大人用、子ども用)及び古墳時代の冑を新規に制作した。衣装体験で使う衣装は、学術調査に基づいて制作されたオリジナルの衣装である。 ・弥生時代、北部九州の一部で使用された甕棺のレプリカを使ったワークショップ「やさしい日本語 de きゅーはく2024 王さまが死んだ! 甕棺に入れよう」を実施した。甕棺に王さまを入れる一連の流れを、参加者が村人となって劇に参加しながら体験する内容。劇の前に展示室で実際の副葬品を見学し、劇の後は参加者自ら甕棺に入る体験も行った。今年度は新たに「発達特性がある方」向けの回を設けた。「あんしんガイド 王さまが死んだ! 甕棺に入れよう」版を作成し、事前に参加者に送付するなどの工夫をした。「外国人向け」も募集したが、参加者が集まらなかったため、一般向けを2日間行った。参加後のアンケートでは、9割以上が「楽しかった」と回答し、好評を得た。また、発達特性がある方の同伴者からは、「発達障がい者向けのイベントがあると参加しやすい」との声もあり、参加対象者に応じたイベントの需要があることがわかった。 ・弥生時代の貫頭衣、古墳時代の衣装、平安時代初期の衣装を着る衣装体験イベント「古代人に変身!」を開催した。老若男女問わず大変好評だった。事前に放課後等デイサービスにチラシを郵送したところ、放課後等デイサービスの団体参加も多数あった。発語がほとんどない発達障がい者が「今日は来てよかった」と言葉を発したとの報告があった。また、外国人からも大変好評であった。	
【備考】 ・「やさしい日本語 de きゅーはく2024 王さまが死んだ! 甕棺に入れよう」(8月10日:発達特性がある方向け、8月11日、12日:一般向け、参加者各回10人、計30人) ・「古代人に変身!」(11月30日、参加者:約150人)	



「王さまが死んだ! 甕棺に入れよう」



「古代人に変身!」の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「王さまが死んだ! 甕棺に入れよう」は毎年多数の応募があるため、6年度も継続して実施した。6年度は新たに対象者を広げ、発達障がい者向けの回も実施した。発達障がい者は博物館に来るハードルが高いと聞いていたが、発達障がい者向けの企画が実施されることで来館のモチベーションとなったという声が聞かれた。アンケートでも9割が「楽しかった」「甕棺についてわかった」と回答し、高い評価を得ている。今後も発達障がい者のみならず、対象を広げて展開することが求められる。 また、発達障がい者関係団体に直接チラシを送付したことで、これまで博物館に来なかった発達障がい者の参加が多数あったことは、6年度の大きな成果である。障がい者にも来館しやすい環境を整えることで、当事者の生活の質の向上につながるとともに、新たな来館者開拓となった。今後も衣装の種類を増やしつ、実施頻度も増やして実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示理解促進のための教育普及事業は、継続して実施することで来館者に認知されてきた。展示作品やその時代の人について知ってもらうことで、展示室での理解向上につながっている。あんしんガイドの作成や的確な場所での情報提供を通して博物館来館への障がいを取り除くことで、多様な人々への参加につながった。以上のことから、中期計画の展示に関する教育普及について、順調に遂行したと評価し、左記の評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動に関する調査研究 イ文化交流展示室における障がい者向け展示・解説・体験プログラムに関する調査研究 (4)-①-3)		
【事業概要】 当館では多様な方に博物館の楽しさを伝えるために、様々な取組を行っている。6年度は、視覚・聴覚に障がいがある方向けの展示やワークショップの実施、発達障がい者や初めて当館を訪れる人向けの「あんしんガイド」の制作、心が落ち着かなくなった時に避難する「あんしんルーム」の設置など、より包括的な施設となるよう取り組んだ。			
【担当部課】	展示課 学芸部企画課 交流課	【プロジェクト責任者】	課長 齋部麻矢 主任研究員 一瀬智 主任研究員 西島亜木子 主任研究員 今井涼子
【主な成果】 (1)特集展示「さわって体験！本物のひみつ 2024」 2年度から開催している体験型展示を、6年度は特集展示へ規模を拡大して開催した。ケース内に本物の文化財を展示し、隣にレプリカや関連する本物の文化財を体験用として展示し、触ったり音を鳴らしたり持ち上げたりと、能動的に鑑賞できるようにした。展示室内のレイアウトは、車いすや白杖を持った方々がゆったりとできる仕様とした。また部屋を明るくし、例年通り点字付き題箋、触知図、手話動画も掲示した。毎年の開催により視覚障がい者や車いす観覧者も増え、「常設してほしい」との声も多かった。体験作品では、特に日本刀の抜刀や古代鏡に触る体験は好評で、約26,000人が体験した。 (2)障がい者向けイベント及びサービス ・ミュージアムトーク「さわって体験！本物のひみつ」(8月31日、参加者：32人)を手話通訳付きで、きゅーはく☆とおき講座「さわって体験！ひみつの楽しみ方」(9月14日、参加者：25人)を、手話通訳・要約字幕付きで開催した。 ・展示作品の「観覧」が難しい視覚障がい者が展示を楽しめる取組として「視覚障がい者と楽しむ対話型鑑賞会」を開催した(9月29日、参加者：19人 内視覚障がい者8人 晴眼者9人 内小学生3人)。参加者からは「ひとりだとわからないが、みんなの対話を聞き、雰囲気を理解できた(視覚障がい者)」「伝えるためにじっくり観察し、モノを認識することができた(晴眼者)」と良い意見があった一方、障がい者からは「複数の晴眼者の散漫な感想や説明では、イメージの構築が難しい」「三次元での想像が難しい」といった意見があった。視覚障がい者が先天性か後天性かによってもイメージの構築方法が異なり、対話型鑑賞の今後の課題が浮き彫りになった。なお、募集に当たってはラジオによる宣伝が効果的であることが分かった。 (3)発達障がい者や初めて来館する人向けに「はじめて九州国立博物館に行く人のためのあんしんガイド」(一般にソーシャルガイド、ソーシャルストーリー等と呼ばれるもの)を制作した。発達障がい者は見通しを持つことで安心して博物館を楽しめる。そこで、当館を訪れる人が体験すること、館内のルールや展示室などの楽しみ方等を写真と文章でわかりやすく説明した。また、入場料や施設の予約方法等の詳しい情報を掲載した同伴者用も制作した。発達障がい者支援施設、特別支援学校、放課後等デイサービス等約700か所に配布したほか、当館ウェブサイトでの公開、館内配布も行った。 監修：福岡市発達障がい者支援センター (4)慣れない場所で心が落ち着かなくなったり、パニックになりそうになった時に避難できる場所として「あんしんルーム」を1階に設置した。(7年4月2日使用開始予定) 監修：福岡市発達障がい者支援センター (5)「みんなdeきゅーはくを楽しもう!! 模型de博物館たんけん隊」 当館の建築模型を使い、対象者を限定せず、文化財を守るための建物の工夫を文化交流展示室内で紹介した。説明には、当館ボランティアの協力を得て手話通訳と要約字幕を付けた。また、説明後に建築模型に触れる時間を設けた。複数の子ども連れを含む多くの参加があり、模型に触りながら建物の構造を確認していた。文化財保護への理解を深めることができた。(11月17日、参加者：午前20人以上、午後20人以上)			

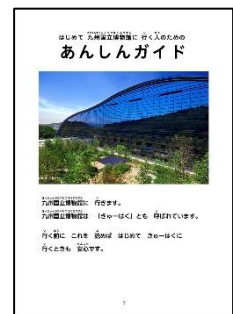
はじめて九州国立博物館に行く人のための
あんしんガイド



九州国立博物館に、行きます。
九州国立博物館は「きゅーはく」とも、呼ばれています。
行く前に、これを、読んで、はじめて、きゅーはくに
行くときは、安心です。

あんしんガイド
(当事者用)

【備考】 ・「あんしんガイド」(印刷数：当事者用、同伴者用 各1,500部、送付数：約700か所、ウェブサイトページ表示数：4,493、ダウンロード数：9,662)


 あんしんガイド
(当事者用)

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	障がい者を対象とした展示やイベントを、当事者や参加者の意見を取り入れて、より充実した内容で継続的に実施したことで、認知度と評価が向上し参加者が増加した。より開かれた観覧環境の提供という点では「あんしんガイド」（ソーシャルガイド、ソーシャルストーリー）の作成・配布、「あんしんルーム」の常設は国立の博物館の中でも先進的な取組といえる。新たな取組を実施しそれに対して高評価を得るなど、年度計画を大きく上回る成果を上げていることからA評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでの蓄積に加え、「あんしんガイド」や「あんしんルーム」といった新たな試みによる検証を活かし、6年度は充実した内容で実施することができた。視覚、聴覚以外の障がい者にも対象を広げるという目標も着実に遂行しており、当事者の意見に耳を傾け、誰にとっても利便性が高く楽しい博物館になるよう取組を進めたい。以上のことから中期計画を大きく上回る成果を上げていると判断しA評価とする。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究	
プロジェクト名称		1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 文化財の修理・保存に関する調査研究	
【事業概要】文化財の修理および保存を行う上で必要な技術開発、調査分析を実施し、得られた知見を博物館における活動に還元する事業。			
【担当部課】	学芸研究部保存科学課	【プロジェクト責任者】	保存科学課長 和田浩
【主な成果】 国内外の学会及びシンポジウムにおいて、以下の研究成果発表を実施した。 ・ Analysis of Vibrations Generated during Transportation of Cultural Property and Response Characteristics of Packing Box, Hiroshi Wada, Berlin National Museum Evening Lecture, 1月28日 ・ Visualization of Airflow and Humidity Distribution Inside Display Cases for Cultural Properties Hiroshi Wada, 14th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing, 11月27日 ・ 衝撃対策と振動対策の両立を目指した包装資材特性の収集, 和田浩, 第62回全日本包装技術研究大会, 11月22日 ・ Long distance transportation in Japan: continuous vibration measurement and analysis, Hiroshi WADA International Symposium "Vibration and Conservation ", 11月7日 ・ Combining Experience, Experimentation, and Prediction to Mitigate Damage to Museum Artifacts from Earthquakes, Hiroshi Wada, 2024 International Symposium on Seismic Technology for Cultural Heritage, 10月20日 ・ 文化財輸送時に発生した振動解析と梱包設計の評価, 和田浩, 日本機械学会 2024 年度年次大会, 9月8日 ・ ポリエステル綿の衝撃吸収性能に関する基礎的研究, 和田浩, 日本包装学会第33回年次大会, 8月29日 ・ ガラス乾板の長距離輸送時における振動計測について, 和田浩 他, 日本文化財科学会第41回大会, 7月27日 ・ 美術品展示ケースにおける湿度伝達の可視化に関する検証, 和田浩, 第52回可視化情報シンポジウム, 7月19日 ・ 展示ケース内に生じる気流と湿度分布についての検証, 和田浩, 文化財保存修復学会第46回大会, 6月23日			
			
		2024 International Symposium on Seismic Technology for Cultural Heritage での研究成果発表	14th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing での研究成果発表
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国内外の学会で多くの成果を発表し、目的達成に向けた進展を見た。これらは、保存と修理の緊急課題に応えるため、輸送時の振動計測や包装資材の研究が行ない、業界の技術向上に貢献したものである。湿度分布の可視化など革新的な手法を導入し、新たな視点を提供した。包装技術や展示ケース設計への応用も期待され、国際的な連携強化も見込まれるものであり、過去の知見を生かし、精密なデータ計測に基づく標準技術開発が行われた。これらの成果から、研究の必要性、独創性、応用性において高く評価され、計画の目的は十分に達成されたと判断されるものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目として、基礎的な調査研究と技術検証が計画通りに進行し、湿度分布や気流の可視化技術の適用が試行された。この成果により、保存環境の評価基準が精緻化し、展示ケース設計の見直しに繋がる重要な知見が得られた。さらに、文化財輸送時の振動計測に基づく包装技術の改善も進展し、輸送リスク軽減のための具体的な指針が示された。 以上の点から、中期計画における進捗状況は計画に対して順調であり、目標達成に向けた基盤形成が十分に行われていると評価されるものである。今後の研究では、さらなる精度向上と多様な文化財に対する応用拡大が求められる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 (4)-②-1))		
【事業概要】 文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 福士雄也
【主な成果】 (1)修復文化財情報の収集と調査 ・6年度、文化財保存修理所の工房に搬入した新規の修復文化財に関して、各修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、163件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 ・当館職員により修理工房の巡回を7回行ったほか、修理技術者とともに科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 (2)修復文化財情報の整理 ・5年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、136件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 ・修理工房より提出を受けた「修理計画書」や「修理解説書（報告書）」など、修復文化財情報の保管は紙ベースで行うとともに、将来的な活用を視野に入れ、過去の情報から順次デジタル化を進め、平成5年度から6年度にかけての分145件のデジタル化を実施した。 (3)模写作成のための文化財の調査 ・模写修理事業者（六法美術）による宮内庁京都事務所蔵「京都御所清涼殿障壁画」の4か年目の復元模写（6か年計画）を行った。模写する文化財は搬入せず、原寸大写真及び資料を基に復元を行っている。 (4)情報の公開と共有 ・3年度に修理が完成した文化財127件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第22号（7年3月31日発行）として発行し、併せてPDF化した。 ・修理時の調査により発見された銘文24件の詳細を本文内に記載した。			
【備考】 (1)データ収集件数163件、巡回回数7回 (2)データベースの追加更新件数136件、修復文化財情報のデジタル化145件 (4)報告書 1冊（修理報告127件、銘文報告24件を含む）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理文化財1件当たりの点数にはばらつきがあり、複数年度に跨る修理事業も少なくないため、文化財保存修理所に搬出入される修復文化財の件数は、年度ごとに必ずしも一定しない。したがって、データの収集件数や更新件数には増減が生じる。この点を考慮し、上述の主な成果を通覧すると、修復文化財に関する調査研究、情報の収集と蓄積、発信による公開が5年度と同程度に行われており、所期の目標を達成できている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の修理及び模写に際して行われる調査研究は、作業に着手している期間のみ実施が可能で、材質や製作技法の解明と密接に関係している。そこで得られた情報を収集・蓄積及び公開していくことは、次世代の安全な修理、そして文化財の確実な継承へと繋がってゆくものである。こうした重要な事業を継続的に実施していることに加え、将来的な活用を念頭に置いた情報のデジタル化を推進していることから、中期計画4年目として順調に計画を遂行できていると言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ 文化財の製作技法・材料等に関わる調査・研究 (4)-②-1))		
【事業概要】 博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や、使用材料等に関する調査を実施し、データの蓄積を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長 降幡順子
【主な成果】 (1)作品の調査研究 6年度に実施した構造調査としては、X線CT撮像6件(45点)、SfMによる3次元形状調査1件(2点)、透過X線撮影による内部構造調査2件(38点)、顕微鏡撮影4件(27点)、を実施した。作品の材質調査としては、蛍光X線分析調査15件(403点)、X線回折調査3件(16点)、分光分析調査3件(21点)、オルソ撮影1件(1点)を実施した。 (2)展示に関連する調査研究の一例 展示に係る文化財資料調査では、特別展「法然と極楽浄土」にて展示された「早来迎{知恩院所蔵}」の科学調査報告書を来館者に関覧可能にして情報公開に努めた。また5年度の特別展「東福寺」での調査を発端とし、6年度は泉涌寺・不動寺等の他所蔵の密教法具のX線CT撮像・蛍光X線分析調査へと展開することができた。 (3)館蔵品等を対象にした調査では、「観無量寿経」の材質調査から、文字・界線から金と真鍮が混合されたと考えられる金属泥の使用が確認でき、文様からは金泥・銀泥のみが確認されるなど、平安時代末における真鍮泥・金泥・銀泥の利用について有用な情報が得られた。「刺繍楊柳観音」の赤外線撮影から墨線を明瞭に観察できるようになり、さらに分光分析結果から染料の種類を同定することができた。これらの結果は今後の展示に活用できる。 (4)地方公共団体や美術館からの依頼を受入れた展示・修理事業に関わる調査を実施し、使用材料や復元材料に関するデータ提供を行った(文化庁、東京国立博物館、泉屋博古館、中之島香雪美術館、平等院ミュージアム鳳翔館、香芝市、滋賀県)。			
【備考】 (1)学会発表等 ・降幡順子・上杉智英 「観無量寿経の材料分析-平安時代末頃における真鍮の利用-」 『日本文化財科学会第41回大会』7月 ・降幡順子、降矢哲男、尾野善裕 「仁清」印をもつ御室仁清窯跡出土陶片に関する調査『文化財保存修復学会大46回大会』6月 (2)論文等 ・大島幸代・井並林太郎・降幡順子 「制作当初の法華経絵巻のすがた-修理と顔料分析の成果から-」『特別展法華経絵巻と千年の祈り』展覧会図録、香雪美術館、10月			



観無量寿経の材料分析



観無量寿経の材料分析

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は、34件(553点)の有形文化財について分析調査を実施し、製作・技法等に関わる情報を得ることができた。展示・修理事業に関する外部組織からの調査依頼も、積極的に受け入れ、成果の活用に努めた。得られた調査成果は学会発表、展覧会図録等による情報発信を行った。7年度以降も継続して分析調査を実施し、データの蓄積を図り、成果を図録、学会発表等で情報公開する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は、展示事業に関わる調査点数が増加し、7年度以降の展覧会へその成果を反映させることができるとともに、文化財修理・復元による使用材料の傾向や特徴を明らかにすることができた。7年度は、中期計画期間を通して博物館の展示・教育普及活動、さらに復元修理や文化財指定に関わる調査など、科学技術を活用した幅広い文化財調査・研究を実施するとともに、文化財の製作技法、材料等のデータ蓄積を図り、研究成果は随時、図録や学会等を通じて公開していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ 社寺等における保存環境に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財を有する社寺には、必ずしも文化財収蔵のための専用施設が整備されておらず、建造物内に常設されている有形文化財に対して、温度・湿度、照度等を博物館環境と同等に整えることは難しい。また、収蔵建物自体が有形文化財であることも珍しくなく、収蔵環境を整備するために大がかりな改修工事を行うことも困難な場合が多い。本調査研究では、文化財の劣化に大きく影響する温湿度の変動や、照度・紫外線の強度、空気質について、まずは現状の環境調査を実施し、その結果を踏まえて簡便な手法で保管環境の改善に関する助言・協力を行い、文化財のより適切な保管環境を目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長 降幡順子
【主な成果】 社寺等を対象とする文化財の保管環境に関して基礎データの収集に努め、改善に関する協力を行った。 (1)知恩院との月次報告8回実施、知恩院境内の4箇所での温湿度モニタリングの実施、御影堂内カビ生息調査を2回実施。6年度は、測定箇所に法蔵1箇所を追加した。 (2)清水寺との月次報告8回実施、清水寺境内の5箇所での温湿度モニタリングを実施。6年度は、測定箇所に成就院収蔵庫2箇所を追加した。 (3)社寺調査の一環として、龍光院収蔵庫内2箇所での温湿度モニタリングを実施。社寺調査期間中に龍光院への報告を2回実施。 (4)鳥取県・三仏寺収蔵庫内外2箇所での温湿度モニタリングを継続実施 (5)文化財資料の適切な保管環境に関して検討			
【備考】 ・内田考「清水寺と京博で共同研究 寺宝の保管環境チェック」『清水213号』清水寺、6月 ・降幡順子「文化財を微生物から守る ガス燻蒸の今後」『京文連令和6年研修講演会』知恩院、9月			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度の社寺等における保存環境に関する調査研究は、継続して環境調査を実施している知恩院境内、清水寺境内、龍光院収蔵庫、三仏寺収蔵庫にて実施した。清水寺境内の環境調査については、5年度までの調査結果を踏まえた空調設備の改修が6年度に実施されることになり、1年間延長することとなった。改修により変更される空調設備の調整・運用方法については、清水寺担当者と詳細に情報交換を実施している。社寺の収蔵庫の環境調査を実施できる点は、生物被害に関する検討も可能となるなど、社寺等の保管環境の改善につなげるとともに、展示借用等に関わる調査研究への活用も期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間内に、環境調査を実施する社寺を順次変更しながら、広く公開・保管環境と改善に関する取り組みを実施することとしている。7年度では、龍光院・三仏寺等の収蔵庫環境の測定を重点的に行っていく予定である。日常行われている法会や参拝者へも配慮をした効果的な改善策については、社寺の協力が必須であるため、今後も社寺との連携を十分に取りつつ、継続してモニタリングを実施していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図る。 (1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3)文化財害虫トラップの設置及び回収と解析			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)5年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで24時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても5年同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。 (2)正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。 (3)5年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2か月に1回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することでIPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的に行い、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。			
【備考】 ・学芸部保存修理指導室員及び総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねた。 (1)展示室内温湿度調査：200か所 (2)展示ケース内ほか粉塵調査：25か所 (3)文化財虫害生息状況調査：100か所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11回開催			



温湿度測定の様子



温湿度測定の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実に行った。また、調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図り、年度計画を着実に実行することができた。以上の理由から、Bと評価した。 7年度もデータの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えようと、なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査を進めデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では、温湿度及び文化財害虫に関する継続したモニタリングや調査を、年間を通じて行うことができた。また、なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することができ、6年度も中期計画を着実に遂行できた。以上の理由からBと評価した。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1) 有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ_文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】			
(1) 所蔵品や寄託品の修理前調査及び光学調査を実施し、作品の基礎データを蓄積する。 (2) 修理中の文化財について光学調査を実施し、修理へ反映させる。 (3) 調査研究の成果を公表する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】			
(1) 所蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報を踏まえ保存カルテを作成した。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2) 所蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果を踏まえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3) 修理中に発見された銘文について、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。これらの成果は「奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」第7号として2月に刊行した。			
【備考】			
・5年度に保存カルテや修理調書を基に修理された文化財について、6年度冬に開催した特集展示「新たに修理された文化財」にて公表を行った。 (1) 保存カルテ作成件数：総計 104 件 (内訳 絵画：23 件、書跡：23 件、彫刻：16 件、工芸：29 件、考古：13 件) (2) 修理調書作成件数：総計 5 件 (内訳 絵画：2 件、彫刻 2 件、考古 1 件)			
			
		修理前に増長天立像を X 線 CT 調査	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、彫刻作品の構造や劣化状況、絵画作品の顔料の推定など修理に有用な成果が得られた。また、保存カルテについても整備を進め修理方針の検討に役立てるとともに、材質調査や銘文調査も引き続き実施してデータの蓄積を図った。以上の理由からBと評価した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を「新たに修理された文化財」展や修理報告書として公開するものである。保存カルテ作成件数や修理調書作成件数は年度により増減があるが、修理展や修理報告書は計画通り実施できたことからBと評価した。7年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ_保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究((4)-②-1))		
【事業概要】 文化財修理に伴う保存科学の観点からの収蔵品等の調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)所蔵品・寄託品の文化財(彫刻や漆工品など)の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。これらの光学調査は修理に活用するとともに、データの蓄積も進めた。 (2)当館研究員と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの光学調査を行った。所蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となり、彫刻作品・漆工作品や絵画作品のより安全な修理に役立てることができた。			
			
		館蔵多聞天立像の X線透過撮影の様子	
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査・蛍光X線分析調査回数:5件			

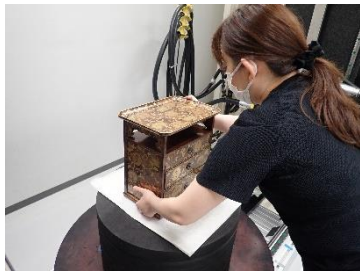
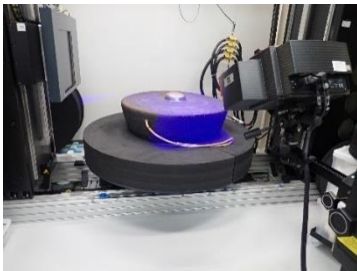
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。X線CTスキャナやX線透過撮影は安全な修理に欠かすことのできないものとなっており、また蛍光X線分析は彩色材料の同定に重要な役割を果たしている。光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てることができた。以上の理由から、評価をBとした。7年度についても継続した調査及びデータの蓄積を図る。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTスキャナを順調に稼働させて、彫刻や漆工品などの修理に活用することができた。また、文化財保存修理所での修理内容を踏まえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。以上の理由から、中期計画を順調に遂行することができたと判断し、Bと評価した。7年度も調査を継続し、データの蓄積を図ることで中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4)-② -1))
【事業概要】 本事業では、X線CTスキャナ及び3Dデジタイザ等の非破壊的な調査手法を使用し、館内及び外部の多様な専門分野の研修者との学際的連携を通じて、各種文化財の材質・構造等に関する知見を得ることを目的とする。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	研究員 渡辺祐基
【主な成果】 (1) 婚礼調度の木地構造調査 文化庁所有の「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度」のうち、化粧道具類をX線CTによって調査した。櫛台については、甲板や底板は恐らく2枚接（はぎ）で、接目には刻苧彫という細かい処理がなされていること等が分かった。櫛箱、払箱、元結箱、髻箱についても、甲板・底板・側板の構造や各部材の接合方法について明らかになった。 (2) ガムランのゴング類の形状調査 インドネシア・ジャワの「ガムラン」で使用される様々なゴング類について、外部専門家との共同研究の一環として、3Dデジタイザによる形状測定を行った。その結果、ゴングの音響特性に影響していると考えられる膜状の部位の厚さの分布を明らかにすることができた。今後、各種ゴングの形状と音響特性に関する検討を進めることで、前年度からの調査成果を取りまとめ、論文・学会発表等で公表したゴング製造技術についての理解を深めていく予定である。	
 櫛台の X 線 CT 調査風景  ガムランの大型ゴングの3Dデジタイザによる調査風景。回転台にはX線CTスキャナのものを活用した	
【備考】 ・X線CT調査件数57件、調査回数116回 ・3Dデジタイザ調査件数20件、調査回数63回 <論文・学会発表等> ・渡辺祐基、川畑憲子、板谷寿美、吉川美穂、田中麻美、木川りか「国宝『初音の調度』のうち櫛箱、小角赤手箱、手箱（胡蝶蒔絵）の木地構造および制作技法のX線CT調査」日本文化財科学会第41回大会、東京（7月） ・大西智洋、後藤里架、渡辺祐基、和泉田絢子、志賀智史、デ・ルカ・レンゾ、宮田和夫「日本二十六聖人記念館所蔵『日傘』の材質・構造調査と製作地の推定」日本文化財科学会第41回大会、東京（7月） ・折山桂子、田中麻美、志賀智史、和泉田絢子、渡辺祐基「福岡・誓願寺所蔵銭弘叔八万四千塔 調査報告」紀要『東風西声』20号、154(85)-146(93)（7年3月） ・川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について(5) 化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髻箱）」紀要『東風西声』20号、144(95)-131(108)（7年3月）	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は、X線CT及び3Dデジタイザによりのべ77件の文化財等を調査し、高精細な三次元データを収集できた。得られたデータについて、所蔵者や外部専門家、修復技術者、館内作品担当者等とともに解析及び検討を行い、作品の材質や内部構造、制作技法に関する理解を深めた。上記成果は、学会発表や論文として公表できた。以上より年度計画を達成したと評価し、B判定とした。

中期計画の実施状況の確認

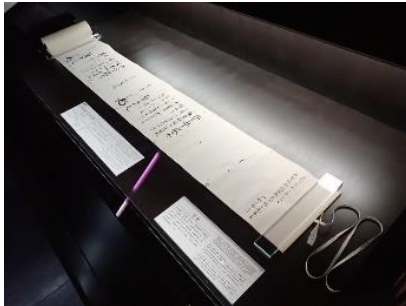
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、外部研究者とも協力しながら、各種文化財の材質・構造等に関する調査に取り組むことができた。特に、江戸時代の婚礼調度類の内部構造について、体系的なデータベースが構築されつつある。中期目標最終年度である7年度には、調査を継続するとともに、検討会や研究会の開催及び成果の公表についても更に推し進める予定である。以上より、中間計画を円滑に遂行したと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 イ 博物館における国内・アジア地域の文化財保存修復に関する研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 国内やアジアの国々で製作され、伝世してきた文化財について、人文的・自然科学的手法を用い、素材、製作方法、修理技法、保存環境等の調査を行い、文化財の保存修復について検討する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
【主な成果】 1) ベトナム国立歴史博物館における紙本文化財の修理を通じて、ベトナムの修理理念及び技法、伝統的な紙原料に関する調査を実施した。 2) 文化交流展（平常展）において、修理、模写・模造、環境、保管をテーマに、博物館の役割に関する展示を行った。			
【備考】 1) ベトナムにおける紙本文化財の調査研究 日 程：10月28日～11月8日 場 所：ベトナム国立歴史博物館 協 力：修理工房宰匠株式会社 内 容：ベトナム国立歴史博物館所蔵の「神勅」を対象として、日本の修理理念と技術に基づく本格修理を行った。現地の保存修理従事者と過去の修理における問題点を共有し、現代日本の修理と比較検討した。また、修理に先立ち、原材料や製作技法の調査を実施した。			
2) 文化交流展示「文化財を守り伝える博物館」 日 程：7年3月5日～5月6日 場 所：文化交流展室 第7室 内 容：平成28年度から例年行っている展示である。平成17年度から継続して修理を行っている重要文化財「対馬宗家関係資料」より、修理前及び修理後の比較展示を行った。修理や保存管理についてパネルで紹介するとともに、当館の収蔵棚や保存箱、温湿度計や害虫調査用トラップを併せて展示し、文化財を継承するという博物館の役割について周知する機会とした。			



ベトナム国立歴史博物館での意見交換会



「文化財を守り伝える博物館」
展示風景



ベトナム国立歴史博物館での意見交換会

「文化財を守り伝える博物館」
展示風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アジアの国々では近年の経済発展により伝統文化が失われつつあり、伝統的な技術や材料の調査研究は文化財を継承していく上で重要である。ベトナムとの保存修復事業を通じ、現地の担当者や関係者と認識を共有することができた。国内においても、展示を通して保存修復の意義と重要性を周知できたことからB評定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ベトナム国立歴史博物館所蔵の「神勅」は、最終年度にあたる6年度に保存修復事業を完了した。ベトナムとの保存修復事業は平成25年度から継続しており、良好な関係を構築している。7年度以降も引き続きベトナムの紙本文化財を対象として修理と調査研究を行う予定である。中期計画に沿って確実にかつ計画的に事業を推進していることからB評定とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 ウ 博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究は、我が国の博物館における IPM（総合的有害生物管理）普及のための持続的なシステムづくりを目的とする。館内の各部署との連携と併せて、地元 NPO 法人や博物館ボランティア等とも協力体制を築き、博物館における IPM を地域共同で実践するためのシステムを構築する。また、環境問題等社会的背景を鑑みた運営方法を施策普及し、研修会の開催等を通じて IPM の社会的理解度を高めることを目指す。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】 (1) 新規の生物被害対処方法の検討と導入 文化財生物処理用のガス燻蒸剤として国内で汎用されていた、酸化エチレンを有効成分とする薬剤「エキヒューム S」の販売中止に伴い、燻蒸に頼らないでカビに対応するためのクリーニング方法を検討した。作業従事者がカビに暴露されないよう、カビが生えた作品を扱うための安全キャビネットや陰圧ブース等を導入した。 (2) 外部向け IPM 研修の開催 全国各地の博物館等施設の学芸・事務及び施設担当職員を対象に、IPM 研修を実施した。各参加者が受講後に自館で IPM 活動を実践できるよう、実習を中心とした研修を実施し、受講後のアンケートでは、全体の 78%の受講者が「とても良かった」、22%の受講者が「良かった」とするなど、非常に満足度の高い研修を実施することができた。 (3) 館内向け IPM 研修・館内環境ワーキング会議の開催 新任職員や館内業務を請け負う事業者を対象に、IPM 研修を実施した。IPM 活動への理解を深め全館的な協力体制を築くため、IPM の理念とその重要性を共有した。また、月に一回の館内各部署から出席する環境ワーキング会議を通じて、館内環境に関わる情報を共有した。 (4) ボランティア活動等 当館ボランティア環境部会の協力のもと、文化財害虫のモニタリングに用いる粘着トラップの組立、一般来館者エリアの粘着トラップの交換、展示ケースで使用する調湿剤の整理等を行った。また博物館内各課の協力の下、文化財用綿布団の作成や文化財修理に用いる板の仮貼り剥し、屋外研修（冬の野鳥観察会）、研究員・アソシエイトフェローによる小話会などの活動を実施した。			
   陰圧ブースの設置 IPM 研修の様子 ボランティアによるトラップ交換の様子			
【備考】 ・外部向け IPM 研修（10 月 24 日～25 日） 参加者：18 施設から 32 人（応募者：81 施設から 140 人） ・館内職員向け IPM 研修（6 月 5 日） 参加者：29 人			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研修・環境ワーキング会議の開催、ボランティアの活動等、館内の IPM 活動を推進するとともに、「エキヒューム S」の販売中止に伴い、化学薬剤のみに頼らずにカビに対応し、文化財を保存するための方法を検討、導入した。今後、実用化に向けてさらに検討を進める。また、このことから IPM について博物館業界からの関心が高まっており、全国の博物館等施設に向けて効果的な IPM システムを普及する機会の一つとして、当館の IPM 研修が担う役割は非常に大きい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地元 NPO 法人や、ボランティア、館内各部署に協力を仰ぎ、地域共同での持続的な IPM システムづくりを推進した。当館の IPM 研修を通して、国内の博物館施設等への情報の普及に資することができており、中期計画を順調に遂行している。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究 エ 展示収蔵環境の空気質に関する調査研究 ((4)-②-1))
【事業概要】 展示収蔵環境における空気質を調査し、揮発性有機化合物濃度を低減させる実用的な対策の確立に向けた調査研究を行う。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1)展示空間の揮発性化学物質（VOC）の継続的調査 展示ケース内における有機酸やアルデヒド等汚染物質濃度の調査を継続して行い、空気環境を把握するとともに必要に応じて改善策を講じた。 (2)低 VOC の展示ケース、展示台、造作材料に関する調査 作品および人体にとって安全な展示空間を維持するため、展示ケースや展示台、展覧会の造作壁等用の材料について、有機酸・ホルムアルデヒド・アンモニアの放散量調査を実施した。また、アメリカのメトロポリタン美術館（MET）の科学者とコンサバターが来日し、MET で行っている安全な材料選定のための試験方法や、対応についてセミナーの開催と、日本国内の材料の共同調査を行った。さらに「造作研究会」を定期的に5回実施し、館内関係者のほか、造作者、メディアの参加を得て、安全な展覧会用材料のスクリーニングやより VOC の少ない安全な展示環境を検討した。 (3)循環ファン付き吸着剤導入による独立展示ケースの環境改善 特殊な湿度条件などのため、換気で空気質の改善ができない独立展示ケースへの対策として、循環ファン付き化学吸着剤の効果を検証した。調湿ボックス内にファン付き吸着剤を設置し、日中のみ稼働させた結果、ケースを密閉した状態であっても有機酸やホルムアルデヒド濃度が低減された。 (4)文化財から放出される汚染物質（還元型硫黄化合物）の特定と対応 海揚がり遺物や砲弾資料などでは、文化財そのものから還元型硫黄化合物が放出され、周辺の金属製品に錆を生じさせる場合があることから、そのような恐れのある資料について、放散されるガスの調査を行うとともに、吸着剤による低減効果を検証した。	
【備考】 ・学会発表：和泉田絢子、渡辺祐基、山本花乃、穴井恵理、木川りか「循環ファン付き吸着剤（ケミカルフィルター）による展示ケースの空気質改善の試み」文化財保存修復学会第46回大会（6月23日） ・学会発表：木川りか、和泉田絢子、島田潤、渡辺祐基、安木由美、内野義、佐藤嘉則、柳田明進、脇谷草一郎「海底から発掘された木製品、石製品等遺物（海揚り品）から発生する還元型硫黄ガス（硫化水素、硫化カルボニル）の調査」文化財保存修復学会第46回大会（6月23日） ・学会発表：Gaseous sulfur compounds from objects: Generation of “Black spots” on bronze and emission of H ₂ S and COS from various artefacts excavated from a marine archaeological site. (Kigawa, Izumita, Shimada, Watanabe, Yasuki, Sato, Yanagida, Wakiya, Uchino, Shiga, Koizumi, Kohdzuma), the International Conference on Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments (IAQ 2024), The Metropolitan Museum of Art, November 19, 2024 ・研究紀要：和泉田絢子、渡辺祐基、川畑憲子、穴井恵理、桑原紀久美、奥島希子、望月規史、桑原有寿子、折山桂子、木川りか「展示ケース・展示室で使用するガス放散性の少ない展示材料のスクリーニングの試み」『東風西声』第20号、182(57)-172(57)（7年3月）	



館内関係者、造作者、メディアと展覧会に用いる材料の検討会を実施



資料から放散される硫黄化合物の調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示収蔵環境における空気質について継続して詳細な調査を行い、データを蓄積し、空気環境を適切に保つための方策を講じた。これまでに対策が難しかった展示ケース内の環境改善についても、循環ファン付き吸着剤を導入するなどの対応が可能となった。さらに、館内関係者のみならず、海外の研究者、造作者やメディアとも情報共有を行い、文化財及び人体にとって安全な展示材料を検討した。これらは国内でも先進的な取組であり、年度計画を大きく上回る成果であると考え左記の評価とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき、展示収蔵空間の空気質に関する調査を行い、より適切な空気環境の実現に努めた。さらに、6年度は、展示ケース内だけでなく展示室全体の空気環境改善に向け、世界の趨勢や先進国での対応方法も参考にしながら、材料を調査するなど、文化財及び人体にとって安全な空気環境の構築に向け具体的な検討を進めるなど、中期計画を順調に遂行するとともに、卓越した成果を得ることができたことから左記の評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	文化財の修理・保存に関する調査研究		
【事業概要】 収蔵品に対しての負担を軽減するため、館内（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境整備を目的として、センサーやデータロガー、毛髪計を用いた館内施設の温湿度測定、生物トラップの設置及び付着菌調査、ガス検知管を用いた空気環境調査を実施する。そして、これらの分析結果を基に問題点を見つけ、早期の対応を行ない、保存環境の向上を図っている。			
【担当部課】	調査・保存課	【プロジェクト責任者】	調査・保存課長 高梨 真行
【主な成果】 ・館内に設置したセンサーやデータロガー、毛髪計により温湿度測定を実施し、データを蓄積した。これらのデータを用いて館内の温湿度環境の特徴を見出し、空調機運転方法の変更や空調機不具合への対処を行ない、安定した温湿度環境を維持している。また、入館者数の変化に対応し、換気量や温湿度設定を変更し、鑑賞しやすい空気環境を維持している。 ・IPM(総合的有害生物管理)の一環として、生物生息調査や付着菌調査の結果や皇居内にある当館の立地条件を踏まえ、ゾーニングの方法や清掃箇所を検討し、実行した。さらに調査結果から週1回の当館職員による清掃箇所や、除塵防黴施行、脱酸素処理を実施し、効果を調査によって検証し、保存環境の維持をしている。 ・月1回の空気環境調査の結果で、測定値の上昇が確認された場合は、早急に換気作業を行ない、開館時まで東文研が定める展示室・収蔵庫内の有機酸、アルデヒド類の濃度基準を満たすことができた。			
【備考】 ・温湿度測定箇所(センサー、データロガー、毛髪計) 計121箇所 ・生物生息調査(年4回) 計101箇所 ・付着菌調査(年4回) 計27箇所 ・パッシブインジケータによる酸・アルカリ測定(年2回) 計14箇所 ・検知管による空気環境測定(月1回) 計12箇所 ・その他、課内会議で情報共有を行ない、館内の保存環境の向上を図っている。 ・岡山県・大阪府にて桐箱の製造および有機酸除去方法の調査を実施(11月4日・5日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	8年度の全面開館に向けた工事が実施されている中で、着実に調査・研究を行い、適切な温湿度環境の構築やIPM計画の立案・実行などの成果をあげ、安全に運営を実施した。引き続き着実に監視し、調査を続ける必要がある。調査は、正確を期す必要があると同時に収蔵品に影響を与えないよう行うことが重要なテーマであり、来館者数の設定などにも応用・活用した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現在、適切にモニタリング、調査を実施している。8年度の全面開館に向けて、引き続きデータを蓄積し、適切な対応を図る必要がある。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究	
プロジェクト名称		有形文化財に関連する国際交流・情報発信等に関する調査研究	
【事業概要】当館の国際交流活動を推進するため、博物館における多言語化及び国際交流活動等について調査・研究する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 建石徹
【主な成果】 多言語化対応について、以下の視察・調査を行った。 ・国立アイヌ民族博物館、ウポポイ（民族共生象徴空間）での多言語化対応について視察・ヒアリングを行った。（10月10日～13日） ・上海博物館でのM20+世界トップ博物館会議に館長及び職員を派遣し、世界各国の博物館の情報収集と上海博物館の国際交流や多言語対応の視察・調査を行った。 ・京都府総合教育センターでの文化財活用センターのアウトリーチ活動の視察と作業補助を行った。（12月6日） ・オランダ・アムステルダムで開催されたCIDOC International Conference 2024（ICOMドキュメンテーション国際委員会）（11月11日～17日）に職員を派遣し、研究発表と交流を行った。 ・王立コレクションを有する世界各国の美術館・博物館を中心に職員を派遣し、収蔵品の調査及び運営に関する意見交換を行った。			
			
国立アイヌ民族博物館での調査		ICOM-CIDOC の会場の様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

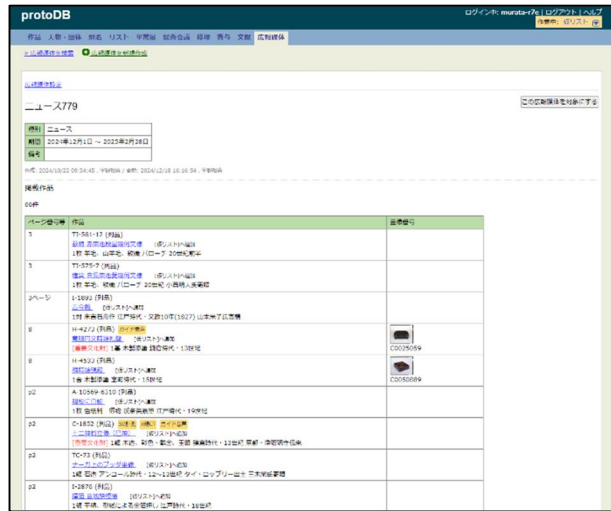
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際交流については、主に王立の海外のミュージアムへ職員を派遣し、所属する日本美術担当者等との交流を進めた。職員同士のネットワークを強める機会を改めて持つことができた。 また、博物館における多言語対応の改善・強化のため、先進事例を視察し、言語表記や解説内容などを見直すことで、より質の高い多言語化ができるように努めた。ICOMの研究集会等へも積極的に参加し、各国の情報収集や調査を進めた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は海外のミュージアムとの交流・連携を高め、今後の発展に向けて準備を整えることができた。国際交流活動ならびに外国人来館者への施策を積極的かつ効果的に実施するよう中期計画を今後も推進する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究 ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究
【事業概要】 当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究を行い、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。	
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課
【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 村田良二
【主な成果】 1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、作品管理、修理予定・履歴管理、文献情報管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。 2) 開発言語、ミドルウェア、アプリケーションフレームワークの更新作業を継続した。また、運用していたサーバ機器が老朽化していたため、新しいサーバを準備し、移行した。これにあわせて、HTTPS化によりセキュリティ対策の水準を向上させた。 3) 「博物館ニュース」「プレスリリース」「ポスター・チラシ」「Web サイト」「メールマガジン」等の広報媒体に対する作品の掲載状況をシステム上で確認できるよう、広報媒体掲載情報の管理機能を実装した。各作品の広報媒体への掲載記録を蓄積できるようにするとともに、平常展管理画面においては特定の展示に含まれる作品のうち、展示期間中に広報媒体に掲載されているものがあれば、広報媒体名等を表示するようにした。これにより、作品に関する情報の更新があった場合に、広報媒体掲載情報の訂正等について連絡漏れを防ぐことにつながるようにした。	
【備考】 収集データ件数 248,952 件 (内訳) 作品データ件数 233,054 件 平常展データ件数 7,236 件 鑑査会議データ件数 127 件 貸与データ件数 2,680 件 修理データ件数 2,825 件 文献データ件数 3,000 件 広報媒体データ件数 30 件	



広報媒体管理機能画面

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発し、館内からの要望に応えながら着実に発展させることができた。アプリケーションが最新の環境で動作しつづけることができるよう、言語、ミドルウェア、アプリケーションフレームワークの更新を行うとともに、サーバ移行によりサービスの安定性を高め、セキュリティ対策水準を向上させることができた。また、広報媒体掲載情報の管理機能を実装し、より包括的に博物館業務を支援することができるようになった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本中期計画期間では、より業務の実態に即した継続的な改善と、収蔵品に関する様々なデータ資源を集約的に扱える統合環境の構築を目指す。4年目となる6年度は、サーバ機器の移行と広報媒体掲載情報の管理機能を実装できた。7年度以降は、ユーザインターフェースの改善を中心に開発を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア データベースやアーカイブズ等、収蔵品等情報の整理・活用に関する調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 当館で運用している収蔵品管理システムや図書管理システムなどの業務用システムをはじめ、公式ウェブサイトや館蔵品データベースなどの外部公開システムなど、各種システムの運用上の課題を整理するとともに、博物館情報に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 永島明子
【主な成果】 (1)「情報システム検討委員会」を開催し、各種業務システム及びハードウェアの運用、リプレイス計画等について検討するとともに、博物館情報に関する研究を進めた。 (2) 収蔵品管理システムをはじめとする各種システムについて、運用における課題や改善点をまとめ、委託先と打ち合わせを行い、改修と点検を行った。 (3) システムや機器の耐用年数、経費などをまとめた資産目録に従い、6年度はサーバを2基更新した。 (5)『列品録』をはじめとする館史資料4冊を画像データ化した。 (6) 5年度に作成した明治古都館の点群データについて、裸眼で映像が立体的に見える空間再現ディスプレイを用い、来館者に公開した。			
【備考】   空間再現ディスプレイならびに点群データ 空間再現ディスプレイ設置の様子			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年度に作成した明治古都館の点群データについての活用方法を検討する上で、裸眼で映像が立体的に見える空間再現ディスプレイを用いた。6年度は、運用面での課題整理と来館者からの意見収集を目的として、期間を限定したデモイベントを実施した。最新技術と組み合わせることで、来館者の興味関心を高めるとともに、通常、非公開である明治古都館の内装を公開することができた。明治古都館を紹介するパネルを設置したこともあり、イベント体験者から「とても感動しました！面白かった！」「臨場感があって、あたかも自分が博物館内部に立っているように感じました」といったご意見をいただいております。満足度が高かったことがうかがえる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	6年度は、空間再現ディスプレイという最新技術を活用して明治古都館の点群データを公開し、来館者から意見収集するとともに、運用面での課題を整理することができた。また、空間再現ディスプレイを活用している国立西洋美術館と三次元データの活用方法について情報交換を行った。中期計画の最終年である7年度においては、これまでの検討を基に点群データの更なる有効的な活用方法を検討し、公開を目指す。6年度は、その活用方法検討に資する効果的な取り組みが実施できた。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4)、(東京国立博物館) 1)、2)			
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	室長 楊鋭
【実績・成果】 (4館共通) 1) 韓国国立中央博物館及び中国上海博物館との人的・学术交流協定に基づき、双方の職員を2名ずつ派遣し研究交流を進めた。また、相互の派遣職員による学術発表会や帰国後報告会を開催し、研究情報や得られた経験などを共有した。 2) 第13回韓日中国立博物館長会議をソウルにて開催、3館間の健全で持続可能な協力関係の発展について意見交換した(7月8日)。また、3館による共同企画展「三國三色ー東アジアの漆器」を韓国国立中央博物館にて開催した(7月10日～10月22日)。 3) 当館研究員を大英博物館に派遣、大英博物館が収蔵する日本由来の陶磁器の調査を行った(11月26日～30日)。 4) 中国国家博物館主催の「第3回世界博物館長フォーラム」に当館職員が出席、「東京国立博物館の文化的な使命の展開」というテーマの基調講演を行った(6月20日)。 中国上海博物館主催の「M20+ 国際ミュージアムカンファレンス」に当館職員が出席、「文化遺産の保存と再解釈：サステナビリティの時代における東京国立博物館」というテーマの講演を行った(12月3日)。 (東京国立博物館) 1) 香港M+にてIEO(国際展覧会オーガナイザー会議)に職員を派遣し、国際展覧会に関わる情報交換を行った(4月9日～13日)。 2) 平成26年から継続して実施しているミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として、大英博物館が収蔵する日本由来の陶磁器の調査を通して交流を行った。また、7年度の交流事業について意見交換した(11月26日～30日)。 ○アメリカ・国立アジア美術館(4月22日)、フランス・ケ・ブランリ美術館(4月26日)、中国・国家博物館(6月19日)、フランス・ギメ東洋美術館(7月11日)、フランス・国立極東学院(7月31日)、アメリカ・サンフランシスコアジア美術館(9月6日)、中国・瀋陽故宮博物院(9月13日)、韓国・国立古宮博物館(9月27日)、チェコ・プラハ国立美術館(11月14日)、中国・旅順博物館(11月26日)、オランダ・アムステルダム国立美術館(7年1月16日)との間で文化交流に関するMOUを締結した。			
【補足事項】 ・ 3館による共同企画展「三國三色ー東アジアの漆器」の入場者数は38,639人。 ・ 留学生の日、各言語によるギャラリートークの参加者数 中国語 参加人数 64名 韓国語 参加人数 3名 英語 1回目 参加人数 85名 英語 2回目 参加人数 63名			
			
		「三國三色ー東アジアの漆器」展開会式	留学生の日、多言語によるギャラリートーク
【年度計画に対する総合評価】 評定：S		【判定根拠、課題と対応】 6年度は中国・上海博物館との研究員の招へい・派遣を再開し、従来通りの人的・学术交流ができた。ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業ではイギリス・大英博物館の要請を受け、当館の陶磁研究員と国際交流室員が先方へ訪問、学术交流および人的交流を行い、博物館同士のネットワーク強化と情報交換ができた。また、海外博物館・美術館との交流・協力を進め、アメリカ・国立アジア美術館をはじめ、世界各地の11館との文化交流に関するMOUを締結し、今後一層の連携強化期待される。 以上の実績より、年度計画以上の成果をあげられたと判断し、S評価とした。	
【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 海外の研究者との交流を全面的に再開し、より活発に行った。また、当館の国際戦略の一環として、海外の博物館・美術館との連携・協力を一層進めている。海外における展覧会の協力や、国際シンポジウムなどにも積極的に参加し、日本美術への理解促進に貢献した。また、博物館の多言語化対応の改善、外国人来館者向けにより鑑賞しやすい環境作りに力を入れている。これらの交流事業の実施により、中期計画は順調に遂行できているため、Bと評価する。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】・I-1-(4)-③(4館共通)1)2)3)4)			
担当部課	学芸部	事業責任者	調査・国際連携室長 降矢哲男
【実績・成果】			
新型コロナウイルス感染症の制限が解除されたことにより、国際的な人の往来が再開し、計画が先送りになっていた展示会や研究発表等の対面活動を実施することができた。同時に、オンラインミーティングや他のデジタル手段を活用し、積極的に国際コミュニケーションの促進を図り、以下の成果を上げることができた。		サンフランシスコ・アジア美術館にて京都国立博物館との共催展『茶道具などにみる日本人の中国趣味』展示風景(会期5年12月21日～6年5月6日)	
1) 2) 3) サンフランシスコ・アジア美術館との学術交流基本協定締結(2年度締結)を記念した共催展『茶道具などにみる日本人の中国趣味』をサンフランシスコ・アジア美術館タテウチ企画展示室にて5年に引き続き開催した(5年12月21日～6年5月6日)。当初は3年9月に開催の予定であったがコロナ禍や会場の都合により、5年12月21日の開幕となった。			
1) 2) 3) 4) 「国際学術コロキウム『朝鮮時代前期の美術』」(韓国国立中央博物館)・「国際博物館長フォーラム」(台南芸術大学)・「東アジア陶磁史国際学術シンポジウム」(中国復旦大学)などで、館長・研究員が講演学術発表を行うなど、海外の博物館などとの学術交流を積極的に行った。			
1) 2) 3) 米国・メトロポリタン美術館(MET)との博物館展示環境の空気質改善に関する共同研究に関連し、METから3人が来館して文化財に安全な材料の確認や展示環境について情報交換を実施したり、館内視察等を受け入れるなど、コロナ禍以後、海外から来訪し対面による交流が増加した。			
【補足事項】			
3) 5月6日～10日、サンフランシスコ・アジア美術館との共催展『茶道具などにみる日本人の中国趣味』の閉幕及び撤収に当館職員1人が渡米した。			
2) 5月13日、米国・メトロポリタン美術館(MET)との博物館展示環境の空気質改善に関する共同研究に関連し、METから3人が来館。文化財に安全な材料の確認や展示環境について情報交換を実施した。			
2) 5月30日、国立扶餘博物館・国立公州博物館から2人が来館。当館職員3名が対応し、展示室と収蔵庫の環境管理ならびに防災について情報交換を実施した。			
4) 6月9日～6月14日、当館職員1人がフランス・ヨーロッパ地中海博物館(MUCEM)にて、ICOM総会・諮問会議に参加した。			
4) 6月12日、当館職員1人が米国・プリンストン大学教授・理事「ナソー・ホール・ソサイエティ大会」35人に「平安・鎌倉仏教美術」に関する講義を実施した。			
1) 7月15日～19日、当館職員4名が韓国・国立中央博物館、国立光州博物館と学術交流等に関して協議を行った。			
4) 8月5日～9日、「2024年国立中央博物館海外専門家招聘事業－国際学術コロキウム『朝鮮時代前期の美術』－」に招聘され、当館職員1人が「茶の湯にみる高麗茶碗」と題して学術発表を行った。			
2) 9月3日、立命館大学ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修に関連し、28名が来館。「京都国立博物館の防災設備と文化財の災害リスク対策」について講義を実施。			
2) 10月10日、サンフランシスコ・アジア美術館から2名が来館し、文化財修理について当館職員4名と意見交換を行った。			
2) 10月31日、韓国・京畿道子供博物館から3名の視察対応。博物館教育について当館職員3名と意見交換を行った。			
4) 11月10日～14日、当館職員1人がアラブ首長国連邦・ドバイで開催されたICOM(国際博物館会議)国際シンポジウム及びICOMドバイ2025大会準備会議に参加した。			
4) 11月14日～26日、当館職員1人が米国・ピーボディ・エセックス博物館で開催されたICOM-ICDAD年次会議に参加し、発表及び研究発表セッションの座長を務めた。			
4) 11月20日～23日、国際博物館館長フォーラム(台南芸術大学)に当館館長が招待され、基調講演「日本における国立博物館の運営について」を行った。			
2) 11月28日、韓国・国立中央博物館から3名の視察対応。博物館教育・バリアフリー対応等について当館職員4名が意見交換を行った。			
4) 12月2日～5日、2024 M20+ International Museum Conference(上海)に当館副館長が招待され、講演を行った。			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 5年度に続き、サンフランシスコ・アジア美術館との共催による『茶道具などにみる日本人の中国趣味』展を実現し、当館職員が海外での学術発表や講演活動に積極的に参加し、ICOM総会や国際博物館館長フォーラムなどでの発表も行うなど、国際交流において意義深い成果を挙げた。また、コロナ禍以後、対面交流が可能になったこともあり、海外からの視察等についても積極的に受け入れ、交流の機会を得られたことも今後の海外との交流に資するものと言え、Bと評価する。		



サンフランシスコ・アジア美術館にて京都国立博物館との共催展『茶道具などにみる日本人の中国趣味』展示風景(会期5年12月21日～6年5月6日)

【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。	
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 海外の博物館や研究施設に赴く機会が増え、当地で会議やシンポジウム等に参加して海外の研究者や研究機関と多面的に交流することができた。積極的な事業展開により中期計画を順調に達成しているため、Bと評価する。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4) (奈良国立博物館) 1)			
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 吉澤悟
【実績・成果】 (4館共通) 1) 学術交流協定を結ぶ韓国の国立慶州博物館から3名を招聘し、博物館における保存科学について情報交換を行った。インドネシア国立中央博物館代表団5名が来館し、インドネシア出土立体マンダラについて意見交換を行った。中国陝西歴史博物館代表団3名が来館し、中国陝西省出土密教関連文物に関する情報交換を行った。学術交流協定を結ぶ中国の上海博物館から3名を招聘し、博物館における管理運営について情報交換を行った。 2) 中国上海博物館 (樋笠研究員・張アソシエイトフェロー・田中事業推進係員)、韓国湖巖美術館 (北澤情報サービス室長・三田主任研究員)、中国西安碑林博物館 (内藤研究員)、インドネシア国立中央博物館 (三本主任研究員)、中国雲崗石窟研究所 (谷口企画室長)、韓国国立慶州博物館・国立中央博物館 (井上館長・内藤研究員・久米研究員)、米国ボストン美術館・メトロポリタン美術館 (谷口企画室長・山口主任研究員、ウィーン研究員)、イギリス大英博物館・セインズベリー日本藝術研究所 (井上館長・谷口企画室長)、米国シカゴ美術館・国立アジア美術館 (山口主任研究員・三本主任研究員)、国立台湾博物館等 (井上館長) を訪問し、現地研究員と意見交換を行った。 3) 職員のべ24人を海外に派遣し、現地の研究者と交流を図った (中国6名、台湾1名、韓国8名、インドネシア1名、米国5名、イギリス2名、ポルトガル1名)。 4) 国立慶州博物館に職員を派遣し、学術発表「近世日本における清凉寺式釈迦像の制作について」を行った。国際研究集会を開催し、国立慶州博物館からの招聘研究員による講演「水鐘寺 八角五層石塔奉安王室発願仏像群の研究」を行った。 (奈良国立博物館) 1) 当館開催の「正倉院学術シンポジウム2024」に米国ハーバード大学教授を招聘し、正倉院宝物の東アジア仏教美術史上における意義について討論を行った。			
【補足事項】  正倉院学術シンポジウム2024「正倉院・東大寺伝来の伎楽面」			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 海外との人的往来が世界的な新型コロナウイルス感染症流行以前の水準に回復したことに伴い、学術交流協定を結ぶ韓国の国立慶州博物館への職員の派遣及び同博物館研究員の招聘を着実に実施することができた。同じく学術交流協定を結ぶ中国の上海博物館への職員の派遣及び同博物館職員の招聘を再開することができた。また、職員を博物館等の海外の諸研究機関に派遣するとともに、海外の諸機関から研究員を招聘することで、対面による意見交換や国際研究集会での発表など、時宜に適った学術交流を行い、着実に計画を実行できた。	
【中期計画記載事項】 2019年ICOM京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 学術交流協定に基づき海外の研究者の招聘を行うとともに、5年度よりも多くの職員を海外へ派遣することで、海外研究者との学術交流を深めながら博物館活動における有用な情報の集積に努めた。また海外の研究者を招聘して正倉院学術シンポジウム及び国際研究集会を開催するなど、海外との学術交流が重要な研究成果として結実しており、中期計画を順調に遂行することができた。以上の理由から、B判定とした	

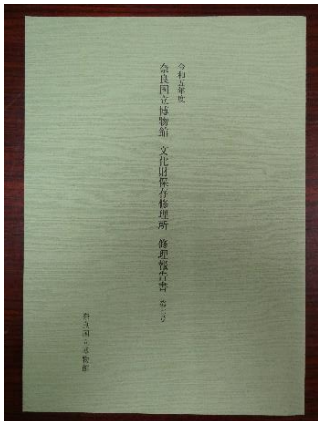
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等		
【年度計画】			
・ I-1-(4)-③ (4館共通) 1)、2)、3)、4) ・ I-1-(4)-③ (九州国立博物館) 1)			
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長 木川りか 課長 高棕剛太 課長 為近雄一郎
【実績・成果】			
I-1-(4)-③ (4館共通)			
1)			
・ 学术交流協定を締結している大韓民国国立公州博物館・扶餘博物館と相互に職員を派遣する人的交流事業を行った。(受入れ：5月20日～6月1日、派遣：9月25日～10月2日)			
・ 学术交流協定を締結している上海博物館主催の「M20+国際博物館会議」に館長が出席し、講演「九州国立博物館のこれまでとこれから」を行った。また、当館職員が同行し、講演のサポートを行うとともに今後の人的交流事業に向けての足掛かりをつくった。			
・ 韓国、台湾など12か国の博物館・美術館等へ延べ38人派遣し、各自の研究テーマに係る研究の推進及び研究交流を行った。			
2)			
・ カナダ保存研究所 (Canadian Conservation Institute, CCI) との共同研究 日本の伝統的絵画に用いられている褪色しやすい染料等の光褪色挙動を系統的に調査するため、10月14日～18日にCCIを訪ね実験を開始した。			
3) 欧州の美術館の日本美術の保存活用状況聴き取り調査 海外での日本美術作品の活用状況や、保存状況、そして修理の考え方について正確な状況を調査し、先方の考え方を十分に理解することを目的として、大英博物館、V&A博物館、セインズベリー日本藝術研究所、ベルリン国立アジア美術館を訪ね、聴き取り調査を行った (11月4日～8日)。			
4)			
・ IPMの国際会議 (5 th International Conference, IPM for Cultural Heritage) (ベルリン) における研究発表 日本の文化財害虫に関する研究成果を発表し、国際的な状況を把握した (9月18日～20日)。			
・ 美術館等の室内汚染に関する国際会議 (IAQ2024、メトロポリタン美術館主催) における研究発表 博物館の室内汚染物質による文化財への影響についての研究発表を行った (11月18日～20日)。 (九州国立博物館)			
1)			
・ 展示空間の空気環境対策に関する海外の美術館との連携研究 展示ケース内外で使用される材料は、文化財に影響を与えないよう、VOC (揮発性有機化合物) などを放散しにくいものが求められる。アメリカ、ニューヨークのメトロポリタン美術館 (MET) の科学者とコンサバターが5月7日～17日に来日し、オンライン併用のセミナー・オディテストに関するワークショップを実施し、日本国内で入手可能な安全な材料の選定や試験法などについて調査と意見交換を行った。			
・ 中国の北京故宫博物院研究員と文化財の分析調査に関して当館において情報交換を行った。(7年3月14日)			
【補足事項】			
			
CCI における実験サンプル調製 (10月14～18日)			
			
		IPM 国際会議 (9月18～20日)	
		MET の科学者によるセミナー、およびオディテストの実演 (5月7日～8日、九州国立博物館)	
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】	
評定：A		学术交流協定締結機関とは引き続き交流を深め、博物館等からの視察など活動の充実を図った。また、文化財の分析調査、保存環境など、海外の博物館や研究機関と連携研究や共同研究を開始し、共通の課題を協議する場も設けるなど年度計画を大きく上回る充実した内容の研究交流ができたため、左記の評定とした。	

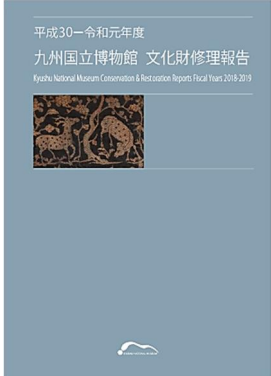
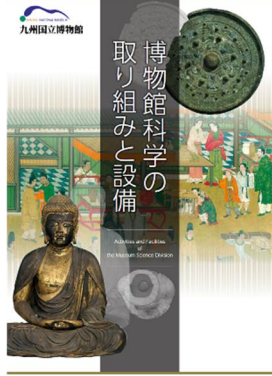
【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。	
【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 学術交流協定締結機関との間で人の往来を伴う交流を再開し、友好を深めるとともに相互に学ぶ機会を得た。また、CCIやMETなどの海外の研究機関や博物館と共同研究を開始するとともに、大英博物館、ベルリン国立アジア美術館など欧州の博物館でも調査を実施したことに加え、二つの国際会議でも研究成果発表するなど、年度計画を大きく上回る事業を実施し成果を上げていると判断し、左記の判定とした。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等		
【年度計画】 ・ I-1-(4)-③ (皇居三の丸尚蔵館) 1)			
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 建石徹
【実績・成果】 (皇居三の丸尚蔵館) ・ 海外の宮殿や王室コレクションを収蔵する美術館を中心として職員を派遣し、収蔵品や博物館運営に関する意見交換、収蔵品の調査等の交流を行った。(イギリス・フランス・オランダ・スペイン・ポルトガル・ギリシャ・中国) ・ シカゴ美術館 (アメリカ)、国立古宮博物院 (韓国) やポートランド日本庭園 (アメリカ) などの視察を受け入れ、交流と意見交換を行った。また、ホノルル美術館 (アメリカ) と収蔵品についての意見交換を行った。 ・ ナショナルポートレートギャラリー (イギリス) で開催された研修に職員を派遣した。 ・ 上海博物館 (中国) で開催された「M20+全球頂尖博物館大会 (グローバルトップ博物館長会議)」(12月3日～4日) に館長が参加・発表し、フランス、日本、スペイン、イギリス、アメリカ、アラブ首長国連邦、シンガポール、ウズベキスタン、韓国、ポルトガルなどの国々および、中国各地域の博物館と交流・意見交換を行った。 ・ アムステルダムで開催されたCIDOC International Conference 2024 (ICOMドキュメンテーション国際委員会) (11月11日～17日) に職員を派遣し、研究発表と交流を行った。 ・ エジプト及びトルコの要人も参加する東京大学先端科学技術研究センターで開催された国際セミナー「中東王室の外交儀礼と日本：外交贈答品とその展示空間」にて職員が研究発表を行った。(6月5日)			
			
オランダ ヘット・ロー宮殿での調査交流		ポルトガル アジュダ宮殿での調査交流	
【補足事項】			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 北米・欧州・アジア諸国と幅広い範囲の美術館・博物館と研究や運営に関する意見交換や交流を推進した。特に6年度は王立コレクションを収蔵する各国のミュージアムとの交流を深め、収蔵品や博物館運営に関する意見交換を行うなど、年度計画を着実に遂行することができた。	
【中期計画記載事項】 2019年ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。			
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 各国の優れた美術館・博物館と意見交換及び交流を行い、中期計画を着実に遂行することができた。7年度も引き続き、ICOMなどを通じて、海外の美術館・博物館と交流を促進し、特に王室コレクションを収蔵する施設等との研究交流等、博物館活動を推進していく。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】								
・ I-1-(4)-④ (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)、(東京国立博物館) 1)、2)、3)								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課 学芸研究部調査研究課			事業責任者	課長 原田あゆみ 課長 村田良二 課長 小山弓弦葉			
【実績・成果】								
(東京国立博物館、京都国立博物館)								
1)・『東京国立博物館文化財修理報告 25』PDF ファイルを当館ウェブサイトで公開し、研究情報の普及を図った。 (東京国立博物館)								
1)・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続しつつ、「中国書画録」や「東博所蔵品画絹データベース」への登録データを追加し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。 あわせて、新たなプラットフォームシステムでの運用試験を始めた。								
・刊行物等を収録する機関リポジトリ構築に向けて、収録項目の検討と登録手順書の作成を行い、一部刊行物の登録を実施した。								
・特集印刷物リーフレット等9件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって、研究情報の普及を図った。								
2)・『東京国立博物館紀要 第60号』『法隆寺献納宝物特別調査概報 44 染織2 錦』『東京国立博物館図版目録 チベット仏教関係資料篇』を制作し、PDF ファイルを当館ウェブサイトで公開した。								
・刊行物のリポジトリを行った。								
・『受贈記念 橋本コレクション 一』を刊行し、『東京国立博物館ハンドブック』日本語・英語の重版を行った。								
・特集の展示関係では『博物館でアジアの旅 アジアのおしゃれ』『モダンきもの一名門「大彦」の東京ファッション』『没後100年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち』を制作し、『東京国立博物館セレクション「旧儀式図画帖」にみる宮廷の年中行事』の英語版を刊行した。								
・特別展図録5件、特集等印刷物16件(リーフレット9件、冊子7件)の編集等を行った。								
3)・研究誌『MUSEUM』709号～714号(6冊)を刊行した。								
【補足事項】								
【定量的評価】項目	6年度実績	目標値	評価	経年 変化	2	3	4	5
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	43件	-	-		25	27	32	49
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』等の定期刊行物を刊行するとともに、図版目録、文化財修理報告等を刊行し、PDF公開を行った。特集展示の刊行物は、特別展と連動したテーマの刊行物を増やすことで充実した情報を提供し、PDFファイル版をウェブサイトに掲載することでさらなる情報公開に努めた。さらに、学術刊行物についてはリポジトリを導入し、過去の刊行物をウェブ上で公開することで広く研究情報の普及を図った。 また、研究成果のデータベースへの反映を逐次行ってきた。そして、機関リポジトリ構築も進み、広く調査研究成果を発信する体制を築き上げることができつつある。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信をさらに拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紀要、学術誌、図版目録並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行した。『受贈記念 橋本コレクション 一』『モダンきもの一名門「大彦」の東京ファッション』等名品図録で新しいコレクションの紹介も行い、東京国立博物館セレクションやハンドブックの英語版等で販売部数を伸ばすこともできた。『東京国立博物館紀要 第60号』『東京国立博物館図版目録 チベット仏教関係資料篇』『東京国立博物館文化財修理報告』『法隆寺献納宝物特別調査概報』は当館ウェブサイトで公開し、特集展示リーフレットをはじめとして、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)、(京都国立博物館) 1)、2)								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 羽田聡 調査・国際連携室長 降矢哲男 保存修理指導室長 福土雄也					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財保存修理所 修理報告書』22 を刊行した (京都国立博物館) 1) 研究紀要『學叢』46 を刊行した。研究紀要『学叢』34 をウェブサイトへ掲載した。 2) 社寺調査報告等 ・『社寺調査報告』34 の刊行を目指して調書の整理等の編集を進めた。6年度は版下データの作成までを行った。印刷・製本は7年度に行う予定。 ・特別展『雪舟伝説―「画聖（カリスマ）」の誕生―』の図録を編集した（発行は日本経済新聞社、テレビ大阪、京都新聞）。 ・特別展『法然と極楽浄土』の図録を東京国立博物館、九州国立博物館と共に編集した（発行はNHK、NHKプロモーション、読売新聞社）。 ・豊臣秀次公430回忌 特集展示『豊臣秀次と瑞泉寺』の図録を編集・発行した。 ・上田コレクション収蔵記念 特集展示『密教図像の美』の図録を編集・発行した。								
【補足事項】 豊臣秀次公 430 回忌 特集展示 「豊臣秀次と瑞泉寺」 図録表紙 								
【定量的評価】項目	6年度実績	目標値	評価	経年 変化	2	3	4	5
有形文化財の収集・保管・展示等に 係る調査研究件数	15件	-	-		12	13	16	15
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 社寺調査報告書は刊行していないが、学叢、図録等を着実に刊行することができた。『學叢』については最新の研究成果を論文として掲載し、質の高いものとすることができた。また、図録については当初予定のなかった特集展示に係る調査結果をまとめた図録を刊行することができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 展覧会図録、研究紀要等を着実に刊行できた。研究紀要である『學叢』は、刊行後10年を経過した時点で全文をWEB掲載する作業を継続しており、引き続きインターネットも活用して研究成果の発信に努める。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (奈良国立博物館) 1)、2)								
担当部課	学芸部			事業責任者	部長 吉澤悟			
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1) 『鹿園雑集』第27号を7年3月に刊行した。また奈良国立博物館ウェブサイトにも掲載した。 2) 『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第7号を7年2月に刊行した。また、修理報告資料を整理しデータベース化につとめた。								
【補足事項】 1) 掲載内容は、作品研究2件、研究ノート3件、調査報告1件、事業報告2件であった。 2) 掲載内容は、修理概要17件、関係銘文集8件、材質調査(木造)1件であった。								
 鹿園雑集 第27号  『奈良国立博物館 文化財 保存修理所 修理報告書』 第7号								
【定量的評価】項目	6年度実績	目標値	評価	経年 変化	2	3	4	5
有形文化財の収集・保管・展示等に 係る調査研究件数	12	-	-		15	15	14	11
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 定記刊行物、報告書とも、当初予定のとおり刊行物を刊行することができた。研究紀要では、当館研究職員による多数の寄稿とともに外部研究者の寄稿もあった。修理報告書では、当館内文化財修理所の5年度修理完了品の修理報告を行った。いずれも例年どおり充実した内容となり、年度計画どおりに遂行できたものと判断し、B評価とした。						
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 刊行物については、計画していた出版物を順調に刊行している。研究紀要については、継続的に調査研究の成果を掲載しており、刊行・ウェブサイトでの公開等も着実に実施している。以上のことから、中期計画を遂行できていると考えB評価とした。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表							
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 博物館科学に関する印刷物を刊行する。								
担当部課	学芸部企画課 学芸部文化財課 学芸部博物館科学課							
事業責任者	課長 伊藤信二 課長 野尻忠 課長 木川りか							
【実績・成果】 ・ I-1-(4)-④ (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第20号を刊行した(発行部数900部)。また、新たに6年度からウェブサイト上での公開を開始した。 2) 『平成30-令和元年度 九州国立博物館 文化財修理報告』(第7号、発行部数600部)を刊行した。 『博物館科学の取り組みと設備』を改訂、発行した(発行部数2000部)。								
【補足事項】 1) 研究紀要『東風西声』第20号では、14本の論文を掲載した(うち当館職員執筆11本、外部研究者との共同執筆3本)。 2) 、『平成30-令和元年度 九州国立博物館 文化財修理報告』(第7号)では、平成30年度～令和元年度に当館文化財保存修復施設にて行った修理及び、当館経費による館外での修理の記録を掲載した。文化財の概要、修理前の所見と修理内容の詳細、修理前後の記録写真、修理に伴い得られた知見等を公表することにより、今後の修理事業の参考資料とともに、学術研究や修理事業への普及啓発など、多方面での活用を目指すことを目指した。 ・ 『博物館科学の取り組みと設備』を最新の情報に合わせて改訂、発行し、国内外から視察や見学に訪問する研究者、学生、そして関係者等に配布できるようにし、広く科学的な調査や修理の取り組みを紹介できるようにした。								
 『東風西声』 第20号表紙  『平成30-令和元年度 文化財修理報告』 7号表紙  『博物館科学の 取り組みと設備』 表紙								
【定量的評価】項目	6年度実績	目標値	評価	経年変化	2	3	4	5
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	10件	-	-		18	12	10	10
【年度計画に対する総合評価】 評価：A	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要や特別展、特集展示等の図録等を刊行し、調査研究の成果を公表した。また、文化財修理に係る記録を「九州国立博物館 文化財修理報告」第7号で報告し、年度計画を達成した。さらに、研究紀要のウェブサイト上でのオンライン公開を6年度から行い、より広く成果を発信できるようにするなど、年度計画を大きく上回る成果を上げていると判断しA評価とした。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。								

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って予定どおりに図録、研究紀要、報告書などを刊行し、調査研究の結果を広く公表することができた。とくに修理報告書については、作品の損傷やそれに対する修理の工程がわかるような詳細な記述に務めてきており、将来にわたって貴重な情報を提供するものとする。また、館内の科学的調査研究や修理などをわかりやすく紹介するための冊子を最新の情報に改訂、発行した。 さらに、研究成果のウェブサイトでの公表は、5年度以前より館内での検討を継続していたが、6年度から研究紀要「東風西声」の研究成果のウェブサイトでの公表を開始するなど、年度計画を大きく上回る成果を上げていると判断し、左記の評定とした。
---------------------------------	---

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表							
【年度計画】 ・ I-1-(4)-④ (皇居三の丸尚蔵館) 1)								
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 建石徹					
【実績・成果】 (皇居三の丸尚蔵館) 1) ・「皇居三の丸尚蔵館研究紀要」創刊号「尚蔵」を刊行した。 ・収蔵品目録 写真「『御手許写真』明治初年日本風景帖」を発行した。								
【補足事項】 ・開館記念展「皇室のみやびー受け継ぐ美ー」第4期「三の丸尚蔵館の名品」の図録を刊行した。 ・展覧会「いきもの賞玩」の図録を刊行した。 ・展覧会「花鳥風月ー水の情景・月の風景」の図録を刊行した。 ・展覧会「公家の書・皇室の美術振興」の図録を刊行した。 ・展覧会「瑞祥のかたち」の図録を刊行した。 ・展覧会「百花ひらく」の図録を刊行した。 ・作品紹介リーフレット「中世絵巻の傑作 国宝春日権現験記絵」を日英に加え、中国語版及び韓国語版を制作、配布した。 ・作品紹介リーフレット「古今和歌集賀歌三首(大色紙)」を制作・配布した。 ・作品紹介リーフレット「伊藤若冲『動植綵絵』の世界」を制作・配布した。 ・地方展開展、香川県「美が結ぶ 皇室と香川」、岐阜県「PARALLEL MODE：山本芳翠ー多彩なるヴィジュアル・イメージ」、北海道「皇室の至宝 北海道ゆかりの名品」、新潟県「皇室の名宝と新潟」での展覧会図録の刊行にあたり、当館の職員が収蔵品や章の解説、コラムなどを執筆した。 ・皇居三の丸尚蔵館紀要「尚蔵」創刊号を発行し、研究成果を公表した。 ・収蔵品目録 写真「『御手許写真』明治初年日本風景帖」を発行した。 ・そのほか学会誌等で発表をおこなった。								
 刊行した収蔵品目録と研究紀要								
【定量的評価】項目	6年度実績	目標値	評価	経年変化	2	3	4	5
有形文化財の収集・保管・展示等に係る調査研究件数	9件	-	-		-	-	-	12
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 刊行物については当初予定していた図録をすべて刊行するとともに、各展覧会の出品作品を網羅した図録を作成するなど、収蔵品とその研究成果の普及に努めた。また、移管後第一号となる研究紀要を発行し、研究成果を公表した。以上の理由から、年度計画を達成できたと判断し、Bと評価した。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 着実に研究成果を発信し、中期計画を順調に遂行することができた。ウェブサイトでの研究成果の公開をしており、更なる拡充にも対応し、中期計画を達成する見込みである。							